

---

# 黙々・恋姫†無双

TAPeT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黙々・恋姫十無双

### 【Nコード】

N7403W

### 【作者名】

T A P E t

### 【あらすじ】

悲しみを背負った子供、ある管理者に出会ってから、物語は始まった。

## 一黙

荒野、

そうとしか言えない広い地に、主人公、北郷一刀ちゃん（9）は立っていました。

「……?」

キョトンとなつて首を傾げる一刀ちゃんですが、状況を把握できそうな物はどこにもありません。

今日は学校でせっかく友たちから野球にサッカーに誘われて、ゴールキーパーという重要役を任せられちゃって、一生懸命ゴール台守っていました。

そしたら、何か真正面に立っている子（サッカー部所属の）がおもいがけなかったダイレクトアタックをかけてきてそのボールが顔面に当たって……

ああ、それ見事なシュートでしたね。

とても小学生のあれとは思いませんでした。

とにかく、

「……」

まだ顔が赤くなっている一刀ちゃん。周りを見回してみます。

荒野です。

学校のグラウンドも芝生もないし、砂と石しかありませんが、鉄棒やジャンゲルジムとか後ろにあったはずのゴール台がありません。

そして何より、

学校の建物が見当たりません

…

はい、決して学校ではないですね。

一乃ちゃん、知らないうちに知らない場所に来てしまいました。

大変なことになっちゃいましたねー

「…?」

あ、はいはい、僕ですか？

僕はただの作者です。

これからさっちゃんって呼んでください？

「……」

はい、すみません調子に乗りました。

ええと…とりあえずお詫びにあめをあげましょう。

ざあああー！ー！

「！…！」

あっ！ごめんなさい、雨じゃなくて飴です。

たっ たっ たっ たっ たっ

「！？…！」

いや、飴を雨のように降り注ぐのでもありません！何やってるんですか、一刀ちゃん痛がってるでしょう！？

「……？？」

もうわけが解らなくなっちゃった一刀ちゃんです。本当にごめんなさい。

「………」

あ、飴舐めるんですね。

落ちた飴の中の一つを取って口に入れました。

「…！（ニパーツ）」

あ、開き直りました。気に入ったみたいです。

雨のように降り注ぎましたので、もっと取ってズボンのポケットが外でみて膨らむほどたくさん入れました。

お欲張りさんで…いえ、子供だから飴が好きなのは当然ですね。

「…」

え？ああ、私もですか？ありがとうございます。解説の邪魔になりますから、食べるのは少し後に…

「……（むっ）」

あ…はい、はい、解りました。食べます。うう…甘いです。

ちょっと、食べ終わるまでカットしてくれますか？

>P<

さて、ここはどこかというところです。

「??？」

知ってるの？って顔ですね。はい、知っています。だって作者ですからね。何でも知っていますよ？

「(キラキラ)」

あ、いや、そんなキラキラな瞳で見られたら照れちゃいますよお……

ここは陳留から十里ぐらい離れているところにある荒野ですね。

「??」

あ、良くわからないって顔していらっしやる。

ええつとですね……

「おいよ、そこのお前」

うん？この人たちは誰ですkってうわあっ！大変です！この人たちは……！

「??」

「子供がこんなところで一人でうるちよろしてよお」

「……」

一刀ちゃん、そこから早く逃げるんですよ。その人たちは所謂「三馬鹿」と言われる……

「兄貴、そんなちびはほおっておいて行こうよ」

そこ、チビはあんたでしょう？

「まあ、待ってみるよ。このガキ、服が何かすげえじゃねえか？」

「おお、そういえばそうですね。何かぴかぴかしていて」

「刀ちゃんが着ている服は聖フランチェスカ学園初等部の制服です。

すごく日差しを浴びたら、キラキラします。」

あれ？でも何でサッカーをしていたはずなのに制服なんでしょうかね？

「きつとどっかの大金持ちの息子だろ。捕まえて親に金を出せとしたり……」

「なるほどー！さすが兄貴！」

「なすがなんだな」

大変です。このままだと、刀ちゃんが誘拐されちゃいますよ。刀ちゃん、早く逃げて。」

「…………？」

何で沸け解らないって顔って立っているの、この子は？

「刀ちゃんとお母さん？子供の教育ができていません！自分の安全をはかっていません、この子！」

「大人しく俺たちと一緒に行くんだな……」

あっ、デブが一刀ちゃんに手を……！

って、あれ？

「!?!」

「馬鹿、なにやってるんだ、お前えは！」

「おかしいんだな」

デブが捕まえようとした一刀ちゃんは、デブの手がある一足先に立っていました。

「大人しく捕まるんだな」

「……」

「!?!」

またです。

デブが捕まろうとしたら、いつの間にかそのちよっただけ先にたっています。

「おい、どうなってんだ！」

「わ、解らないんだな」

「ええい、退け、俺がやる」

兄貴さんが一刀ちゃんを捕まろうとしますが、

「……………」

一刀ちゃんは口の中で飴を転がしながら、なんともないように立っています。

兄貴さんの目の前に、捕まらずに。

「な、何だこれは」

「兄貴、何かおかしいぜ？」

「怖いんだな」

チビとデブは、まるで一刀ちゃんを化け物や幽霊を見るようにして怯えています。

「そ、そうだな。ここは……」

兄貴さんもちょっと怖いように逃げようとしたが、

「まていー！」

「こ、今度はなんだ？」

あ、あの人は、

「子供一人を相手に三人で襲い掛かるとは、言語道断！」

わーい、白い袖をなびきながら現れた女性、その姿まるで一匹の蝶  
！！変態ですけど

そうです。この人こそ、常山の昇り竜、趙雲さんです！変態ですけど

「ま、待てくれ！俺たちはもう……」

「問答無用！」

すさっ！

「「「うわあああああっ！！」「」」

わあ、星になっちゃいました。

あんなのができるのって、どこかの服にR文字をしている人たちと  
猫ちゃんしかできないのだとばかり思っていましたよ！

「……」

「大丈夫か？」

趙雲さん、一刀ちゃんに近づいています。

逃げて、一刀ちゃん、その人は別の意味で危険だよー。

「……………」

ってまた何の反応もしないし…もう僕の声聞こえないんでしょうか。

「ふむ、どうやら驚いて言葉が出ないようだな」

まあ、どの意味あってますけどね。

「大丈夫ですかー」

あ、また一人来ました。

何か眠たそうな顔をしているこの人。名前は程立。

「怪我はないか？」

もう一人の人は眼鏡をした、右腕の骸骨の飾りがとっても似合わない人、名前は郭嘉です。

「……………」

二人追加されたもの的一刀ちゃんは反応なし。

あ、何かしてます。

ポケットの中から…

「うむ?」

「……」

あ、先ポケットに入れといた飴を一つ趙雲さんに差し出しました。

ありがとうございますという意味なんですね、解ります。

「……」

「くれるのか?」

「…(じくっ)」

おおっ！何か頼いた！すごい！

「なんですかー？風にもくださいよー」

「あなたはもう大きいの持つてるでしょ?」

後ろで見ていた程立さん物欲しそうな目で見ていますが、程立さんその口についているものがなんでいらっしやいますでしょうか?

「稟ちゃんは要らないそうですから、風が代わりにとってあげるのですよー」

「子供はあげる気もなさそうなのに勝手なこと…っん?」

「……」

おおっ！後ろでの話を聞いて一刀ちゃん、二人にも一つずつ飴を勧めました。

「ありがとうございますー」

「い、いや、私は……」

「……(むっ)」

とらない郭嘉さんに向かって更に一步近づくと一刀ちゃん。

郭嘉さん、それはとらないとダメですよ。私ももらっちゃいましたから。

「ど、どうも……」

仕方なさそうに飴をもらう郭嘉さんです。

> p f <

「……」

三人が飴をもらって食べてる間、一刀ちゃんはなににもそれをじっと見ているだけでした。

飴はもつと残ってるんですが食べません。

一日に飴は一つずつ。一刀ちゃんとお母さんの約束です。

それも、食べてから直ぐに歯磨きをするっていう条件ですが、残念ながら今はブラシがありません。

「ふむ、怪我はなさそうだが、精神的が衝撃があるようだな」

「でないと、元から寡黙な子なのかも知れませんね…どっちにしろこのままほおっておくわけには……」

「待ってください、風。あなた、もしかしてこの子を連れて行くのか思っていないですよね？」

程立さんの話を途中で切って郭嘉さんが言いました。

「おいおい、じゃあこんな子供をこんなところにほおっておけというのかい？それはあまり酷すぎだろ」

「！…！」

お、一刀ちゃんびつくりしちゃいました。

程立さんの頭の上の人形がしゃべってるように見えます。

「……………」

「おおっ…！」

触ってみようと程立さんに近づくと一刀ちゃん。

「お、おい、やめろ。そんなに触ったら…ああ…ああああ」

おい、人形、変な声出すな。

「あの一、おぼっちゃん？そんなことしたら困るんですけどー」  
今度は下のが話しますね。あ、いや、すみません。

「……」

困るっていう言葉を聴いて直ぐに触るのをやめる一刀ちゃんです。  
いい子ですね。欲望に充実な上に人の話をちゃんと聞いてくれるってなんていい子なんでしょうか。

「この子のことは陳留の刺史殿に任せるとしましょう」

うん？

陳留の刺史って確か……

「……」

「むっ」

あ、一刀ちゃん、話が見えてきたのか、郭嘉さんの裾を掴みます。

こんなところに一人で置いていかないでっていうことですよね。

「えっ！？あ、いや…あの、その…」

「稟ちゃん…??」

「ふむ、確かに子供をこんなところに一人で置くことは喜ばしいことではないな…」

「いや、しかし、私たちにはこんな子の助けをする暇なんてないのですよ？それに、この子はどこかの貴族の息子の様子ですし、我々のようなものがつれていくようなことではないです」

「それもそうではあるが……」

趙雲さん、悩んでいらっしやいますね。

…あれ？何か悩みの視線の先に、一乃ちゃんが郭嘉さんを捕まえる手があるのですが？趙雲さん？

だだだだー

うん？

この、なんかこう……

あ、この音は聞いたことがあります。

昔スペインの闘牛祭りで聞いたようなこの声は……

あ、すみません、普通に馬ですね、はい。

牛とか変なこと言ってますみません。

旗に曹と言う字があるのを見れば、あれは陳留の刺史、曹操さんの部隊のようですね。

って、あれ？三人とも行っちゃうんですか？

「それでは私たちはこれで…」

「うむ」

「飴おいしかったですよー」

「……」

「一刀ちゃん、慌ててます。」

ここでせつかく話ができる人たちに会ったのに、また行っちゃった  
ら自分は一体どうすればいいのか。

てててて

小足で三人を追う一成ちゃんです。

郭嘉さん、鬼！人でなし！全身血液女、全部鼻で噴出して死ね！！

「稟ちゃん、ついてきてますよ？」

「言わないでください！」

「何か…助けてあげたはずだが、すごく悪いことをしてしまったよ  
うだな」

「言わないでくださいってば！」

それでも後ろを振り向かずいってしまつ三人さんです。

「…、…あ…」

ドスン！

ああ！一刀ちゃん！倒れました！

地面は砂。

それほど痛くはないでしょうけど、子供がこんなところでこけてしまつたら……」

「……………（じぶく……………）」

あ、ああ、泣いちゃいそうです。

どうしましょう、どうしましょう。

私はただの作者にすぎないのです！

泣く子を慰める術なんてえー！！

「……………（ううう……………ううう……………）」

あああ、ダメです。子供が泣くのを見たら私、胸が千切れそうで死  
んじゃいますよー

「男が泣いたらダメよ」

「……………?」

「そんな情けないことをすると、男の子として恥というものよ」

「……………」

「刀ちゃんがその言葉を聴いて涙と泣き声をぐっぐと我慢して後ろを  
振り向いたら……………」

「……………いい子ね」

そこには、

また違う女の人が出ていました。

( 続く…の? )

> p f <

一度こんな悪ふざけを満載させた話をしてみたかったもので……

そういえば、北郷一刀を主人公にしたのって、自分これが初めてですね。

たとえ設定は変わっていても、

というわけで一刀ちゃんの設定です。

北郷一刀ちゃん(ちゃん)は名前のうちに入りません(9)

特徴：

寡黙、というか喋らない、というか喋れないというか……  
約束をちゃんと守るいい子です。

煩惱に素直な子ですが、人にダメと言われたらやめます。

服：聖フランチェスカ初等部制服（あるの？初等部）

好きなもの：飴（でも一日に一つしか食べません）、抱っこ

嫌いなもの：辛い食べ物、怖い人

背：曹操さんより少し低いです。

体重：知ってどうします？子供並みです。

以上でお送りしました。

以上、さっちゃん（…）（…）作者でした。

一黙（後書き）

> p f <

一度こんな悪ふざけを満載させた話をしてみたかったもので……

そういえば、北郷一刀を主人公にしたのって、自分これが初めてですね。

たとえ設定は変わっていても、

というわけで一刀ちゃんの設定です。

北郷一刀ちゃん（ちゃんの名前のうちに入りません）（9）

特徴：

寡黙、というか喋らない、というか喋れないというか……  
約束をちゃんと守るいい子です。

煩惱に素直な子ですが、人にダメと言われたらやめます。

服：聖フランチェスカ初等部制服（あるの？初等部）

好きなもの：飴（でも一日に一つしか食べません）、抱っこ

嫌いなもの：辛い食べ物、怖い人

背・曹操さんよりより少し低いです。

体重・知ってどうします？子供並みです。

以上でお送りしました。

以上、さっちゃん(…(…作者でした。

## 二黙（前書き）

一人になった子供に助けを伸ばす大人は、子供の難しさを分るはずもなく。。。

## 一黙

「いい子ね」

そこに立っていた人は……

「……」

小柄、だけどその心の中の野望だけは誰よりも広く、その誇り誰にも及ばぬほど深く、覇道を目指すものが誰よりも警戒すべき人。

曹操孟徳はそこに立っていました。

>ロチ<

「華琳さま、この子は……」

「どつやらあの輩に捕まっていたようね。あなた、あいつらがどこに行ったかわかるかしら」

「??？」

あいつらって、もしかして先の馬鹿トリオのことでしょうかね？

「……」

「刀ちゃん、相変わらず何も言わず空を指しました。」

「……は？この子何を言ってるんだ？」

「どうやら逃げたようね」

逃げたというか、飛んで言っちゃったんですけどね…まあ、見てなかった人なら理解できなくて当然ですけどね。

「秋蘭、部隊を再編成して、逃げたやつらを探すように言いなさい。深追いはしないように」

「御意」

そう答えた曹操さんの左の人は夏侯淵。弓の名手、一矢一殺とはまさに彼女のための存在する言葉。

「なつ！ここで追撃を止めるのですか？」

そう残念そうにいる人は、未来の魏の大剣、曹操の右腕、夏侯惇さんです。

「ええ、これ以上我々が追う必要はないわ。それに、この子の親を探さないとダメだしね」

「そんなことこそ！他の兵たちに任せれば良いではないですか！たかが子一人のために、ここで追撃を止めたら…」

「はあ…姉者、その辺にしておけ」

「なつ、秋蘭」

「…あの子、怯えてるわよ？」

「えっ？」

「……………（カタカタブルブル）」

ああ、春蘭さんが大声出すから一刀ちゃん怖がってるし。

「わ、私が何をしたとお！」

「（びくっ）」

「春蘭…？」

「ううう……………」

小動物のようにふるえている一刀ちゃんを見て、

「大丈夫だぞ。姉者はこう見えて、本性はやさしい。それに、別に  
お前のことを脅かそうとしたわけでもない」

「……………」

夏侯淵さん、一刀ちゃんを慰めようと手を伸ばしますが、

「！？」

ああ、案の定、まるで最初からそこにはいなかったのよう、夏侯  
淵さんの手の一歩後ろに立っている一刀ちゃんです。

「秋蘭、今のは……………」

「私も何が何だか……」

もう一度手を伸ばす夏侯淵さん。

けど結果は同じです。一刀ちゃんは夏侯淵さんの手から離れていました。

「華琳さま！離れてください！この者、きっと我々を誑かそうとする妖術使いです！」

「落ち着きなさい、春蘭」

まったくです。もう一叫びで一刀ちゃんの涙腺が千切れそうですから。

一方、一刀ちゃん、怖くてもあの三人から逃げない理由がありますね。

ここで頼りにできそうな人が、この三人しかないのです。

しかも、先あの三人から見捨てられたばかりで、ここでまた見捨てられたら、一刀ちゃん本当にここでどうすればいいか解らなくなっちゃうのです。

でも、近づきたくもない。

何より、

「……………（カタカタ）」

いえ、いえ、こっちをみながら震えても困りますよ。あの人怖いか  
らなんとかしてとか言いたいみたいですけど、そんなの無理ですか  
ら……

「う……………（じー）」

うう…僕他には役立ちますから、そんな涙でいっぱいな目でうらむ  
ように見るのは勘弁してください。傷つきちゃいますよ。

「あなた、何者なの？何か言ってみなさい」

曹操さんがそう言ってますけど、無理なんです。だって一刀ちや  
んは喋れないのですから。

「……………（あわあわ）」

慌てて一刀ちゃんも何かをしようとしますが、口を動かしても言  
葉はできませんし、手は何の意味もなく宙を泳いでいるだけです。

「……………どうやら「喋れない」みたいですね」

「（くく、くく）」

一刀ちゃんが夏侯淵さんの言葉に頷けば、曹操さんがジド目になっ  
て、そのあまり高くもない背で一刀ちゃんを下目線で見ます。

「喋れない、ね……………」

「そんなの嘘に決まっています。それに、こいつが着ている服、どう考えてもこの大陸のものではありません」

「うむ…」

「そこは私も気にしていたわ。触れないからちゃんとは解らないけど、私たちが知っている素材ではないよね」

そついいながら、先夏侯淵さんがしたように一刀ちゃんに手を伸ばす曹操さん。

> ぽく <

「(びく)」

「あら？」

あれ？曹操さんの手には触れるんですね。

「華琳さま！」

夏侯惇さんが止めようと曹操さんが触れた一刀ちゃんの肩に手を伸ばしたら、

「あ

「あ

また曹操さんの手から離れている一刀ちゃん。

「……………（カタカタ）」

「どつやら、私にしか触れないようね。どついつとかしら」

どついつとかしらね。私にも良くわかりません。私も一刀ちゃんのことを詳しく知っているというわけでもないのです。

少なくとも、一刀ちゃんが普通の子じゃないことは良く解ります。

「あなた、ちょっと、こつちに来て見なさい」

「華琳さま?!」

「……………（カタカタ）」

「いくらなんでも、華琳さま一人で触れるということは危険です」

「大丈夫よ。何か私たちに何か脅威をしているわけでもないし、単に怯えてるだけでしょうよ」

「怯えてるなどと！私がそんな扱いをされるようなことは…!」

「…ひくっ」

「姉者…もういいから我々は一步下がっておくとしよう」

「秋蘭？」

まったくだ。もう泣き声が声零れようとしてるではないか。

「ううう……」

仕方なく下がる夏侯姉妹。

「さあ、こっちに来て見なさい」

「……」

…行ったらいいと思いますよ。

「…（こくっ）」

そしててくてくと曹操さんの前に近づく一刀ちゃん。

「大丈夫ですか？華琳さま」

「少し静かに……」

夏侯惇さんの心配の心は曹操さんに届かず。

曹操さんは手を伸ばして、一刀ちゃんの頭に手をのせました。

「……」

「大丈夫よ。私たちは悪い人じゃないからね。…私たちに付いてきてくれるかしら」

「……（じくじく）」

「いい子ね。それじゃあ」

そう言った曹操さん、一刀ちゃんを手を掴みました。

「……」

「華琳さま、大丈夫ですか？」

「ええ、もう大丈夫よ。取り合えず一度城に戻ってこの子について詳しく聞いてみることにしましょう。口は言えなくても、話は通じるみたいだからね」

その時、

ぐー

「む？」

「…おなかが空いたようね」

「……????」

いやいや、先お腹から大きい出たばかりなのに、しらんぷりしましてもね……

「先ずは何か食べさせることが先のようね。まあ、とにかく城に戻りましょう」

「はっ」

> p f <

「……お……（キラキラ）」

「一刀ちゃんがまた目を輝かせている理由は、他でもないです。」

それは、自分の目に広げられてる、はじめてみる豪華な中華料理の存在でした。

「……」

「一度曹操さんを見る一刀ちゃん。これ本当に食べていいんでしょうか。」

「お食べなさい。空腹なんですよ？」

「……」

許可も落ちました。遠慮なく食べていいみたいです。

まずは、目の前の炒飯に手を出す一刀ちゃん。

「華琳さま、この子ですが、陳留の民の子ではないようです」

「一刀ちゃんがおいしく食べてる間、夏侯淵さんが心配そうに曹操さんに言いました。」

「そう、まあそうは思っていたけどね」

「え？じゃあ、華琳さまはこいつの正体を知ってここまでつれてきたのですか？」

「そういうわけではないわ。ただ、この子が着ている服といい、それに、先あなたたちには捕まえられなかったことといい、どうやら普通の子供ではないようね」

「やはり五胡の妖術使いとか何かなのです」

「その可能性もあるでしょうよ。だけど、私たちに害を与えそうにない以上、こんな子供を殺すというのも、」

「（びくっ）！」

殺すと言つ言葉に反応して蓮華を止める一乃ちゃん。

「あ、大丈夫よ。殺すとかしないから。それより、もういっぱい食べたかしら」

「…（じくっ）」

え？もうなの？小腹だね。まだ子供だからもっと食べないと……

「じゃあ、聞くけど、あなたはどこから来たの？何故そんなところに居たのかしら」

「……………」

いや、喋れない子にそんな書術型の質問しましてもねえ。

……あ、一刀ちゃん。

「??？」

一刀ちゃん、書くのはできる？

「…（じくっ、じくっ）」

まあね、小3が字書けないというほうが可笑しいし。

でも、やっぱりここって中国だし、書くのは漢文じゃないとダメなんだよね……ちょっと待っててね。私が何とかするから。

「質問の仕方が悪かったわね。……そうね、あなた自分の名前は書けるかしら」

「……（じくっ、じくっ）」

「じゃあ、ここに書いてみなさい」

曹操さん、どこから持ってきたのか竹簡と筆を一刀ちゃんをくれま  
す。

「……」

あ、ここではそれが紙と鉛筆と一緒になんですよ。ちょっと書きづら  
いかも知れないけど……

『北郷 一刀』

つてちよー達筆!?

「『ほんごう かずと』ね…不思議名前ね。字は…まだ子供だからないでしょうね」

「……………」

あ、字というのはですね。

『知ってる』

あ、そうですね。あ、後、私には書かなくていいですよ。前の人たちに気にしてください。余計なことになるかも知れませんがね。

「あなた、字をかくのが上手ね。もしかして、どこかで学んでいたのかしら」

『学校』

「がつごう？何なの、それは」

「……………」

学校が何かというとても基本的な質問にどう答えればいいのかわからない様子です。私にも言いにくいですけどね。

「なら、あなたが住んでるところを言ってくれますかしら」

「東京 浅草」

「……??」

「とじきょう……あさくさ?」

「そんなところ聞いたことないぞ」

「……」

いや、だからそんなこと言われましても小3の子には付加説明は…  
しかも漢字しか書けない状況ですからね……

「どこの州なの?」

「…?」

『しゅうつてなに?』

いや、だからその竹簡で平仮名を書いてこっちに向けなくてくださ  
いってば?!

「うん?ね、それなんと書いたの、ちょっと見せて?」

あ、取られた!

「……これも文字なの?」

「見たことがないですか……やはりこの大陸の出生ではないようで

すね」

「ならやはり五胡の…」

「五胡でこういう文字を使うという話は聞いたことがないわ…あなた、どの国から来たの？」

やっと話がそこに向かいましたね。

一刀ちゃん、竹簡をもらって「日本」とか…

…日本？

「ひのち日本？」

「「…！」」

うわあ、その発想はなかった。

> p f <

竹簡に作家の力で少し工夫をしてみました。日本語で書いても、相手には漢文のように見えるようにしました。

その後話はもう少し進んで、

「では、話をまとめるが…お前の名前は北郷一刀、日本ひのちというところから来て、ここまでどうやって来たか、どうやってその場所にあ

ったのかは解らないと……」

「……（じくじ）」

「そして、物心がつく頃からもう喋れなくなったと」

「……あ……」

「声は少し出てくるけど、言葉にはならないようね」

「信用していいのですか？」

まだ疑ってる夏侯惇さん。

「……嘘をついてるようには見えん。何より、そうやってこんな子供になんの取り得もない」

「ううむ……」

「でも、何より驚くのはこの国の名前ね」

日本ひのくにそう読むと、まるで……。

「天の御使い、ね……」

「……？？」

「……いいことを思いついたわ。この子を私たちが保護することにし  
ましょう」

「華琳さま!？」

「まさか、華琳さま、先見た流星のことを……」

「確信はないけどね。けど、この子の説明や、そこに居た理由が不明だということ、可能性は十分にあるわ」

む?何の話でしょうかね。

「しかし、城の中にこんな子供を入らせるなど……」

「何か問題になるかしら」

「それは……!!その……華琳さまがこんな子供の面倒を見てやる必要は……」

「……」

うん?一刀ちゃん?

タッ

「ん?北郷?」

話から離れていた夏侯淵さんが、一刀ちゃんが椅子から降りることに気づきました。

『ボク、邪魔みただから行く』

「あ」

一刀ちゃん？

『御飯、有難う』

すっ

あっ？あれ？一刀ちゃん、どこ行きました？

急に消えて……

「なっ……」

「な？あいつはどこに消えたんだ？」

「急に消えてしまった……自分が邪魔そうだから行くと言って……」

「なっ！」

一刀ちゃんがいたところには、使ってた竹簡と筆に、一刀ちゃんが持っていた飴が全部テーブルの上に乗せられてました。

「……春蘭、秋蘭、」

「「！」「」」

!

突然空気が重く……

「今直ぐあの子を探しなさい。街の隅々まで」

「わ、解りました」

「…御意」

「…この曹孟徳から勝手に逃げるなんて、許さないわよ」

あらら…曹操さん怒ってらっしゃいますね。自分に何も言わずに消えてしまって…

これは、私も早く探してみないとダメですね。

> p f <

あ、見つかりました。

人が通らない寄り道の隅っこで俯いています。

一刀ちゃん？

「……………」

どうしたんですか？何で急に消えちゃって……………」

「……………」

……はい？お父さんとお母さんと……

……ああ、そうだったんですか。

ご両親が離婚するとき、一刀ちゃんのせいで喧嘩をしたのですね。

それが先の二人の姿と重ねて見えて……

「……………」

けど、こんなところで俯いていても何もいいことはないのですよ？

あの人たちが一刀ちゃんを探してますよ。あそこに戻りましょう？

「……………」

迷惑って、そんなに急にいなくなっちゃうのがもっと迷惑ですよ。  
皆心配してます。主に曹操さんが。

「……………」

ぼたぼた

一刀ちゃん……

…いえ、私には一刀ちゃんをここで安全に守る義務があります。

こんなところに一人にさせるわけにはいきません。

待っててください。

私がなんとかして、曹操さんをここに連れてきま…

ぐいっ

「……」

えっ？え、ちょっと待ってください。

どうやって私を捕まえたのですか？

いや、放してください、

【一人にしないで】

あ

「……」

一刀ちゃん……

「一刀」

「(びくっ)」

> 〆 〆 <

「こんなところで何をしているのかしら」

曹操さん。よく見つけましたね。

「…どうして逃げたの」

「……」

一刀ちゃんの口から言葉が出るはずもなく。

「あなたはどうか知らないけどね。私はあなたに用があるわ」

そして一刀ちゃんに手を伸ばす曹操さん。

けど、

「……もう私も拒むというの？」

「……」

もう曹操さんの手にも触れないようになりました。

「あなたが何故私たちを怖がる理由はわからなくもないわ。知らないところに一人に置かれて不安なんですよ」

「……」

「けど、いつまでも現実から見ないで前に進まなければ、そこでおしまいよ。さあ、どうするの？一刀。私に付いてくる？それとも、ここでそのまま俯いているのかしら」

「……」

一刀ちゃんは動きません。

僕は、一刀ちゃんの判断を直接にどうする権利はありません。

選ぶなら、それは一刀自身の考えです。

けど、

僕は、一刀ちゃんがあの人について行って欲しいです。

「……」

「私についてきなさい。私はあなたが必要よ」

「……あ……」

一刀、

一刀がないとお母さんは……

「……あ」

「一刀ちゃんが立ちました。」

「うっ！」

そしていつの間にか曹操さんの目の前にいる一刀ちゃん。

「……」

「なっ！ちよつと」

そして、曹操さんの腰に抱きつきました。

「ちよつ、よしなさい」

でもまあ、子供と言っても男にそこまで接触は拒むことは仕方ないですね。

「?..?」

曹操さんが嫌そうにするので一度離れます。

「はあ……まあ、とにかくついてきてくれるという点とに理解するわ」

そして今度は、曹操さんから、一刀の頭をなでてあげます。

「……(きゅー)」

嬉しいのか、うれしくないのかよく解らない表情ですね。

「一刀」

「??？」

「あなたを天の御使いとして、私たちのところに身をゆだねることを許すわ。これから、私たちのためにその力を使わせてもらうわよ」

「……」

その時は、一刀ちゃんはきつと曹操さんの言った言葉の意味が解らなかつたと思います。

けど、

「（くっ）」

その時頷いたことに、悔いはないでしょう。

拠点フェイス1 華琳黙

陳留の平和な朝。

まだ露店や店らも開けていないこの朝に……

??「きゃあああああああああああああああああ……!!」

何、この嬌声

(嬌声× 悲鳴)

がたん!

春蘭「華琳さま!!」

春蘭さん、部屋の門を壊さないでください。

秋蘭「華琳さま!」

でも、嬌声、もとい、悲鳴をあげたのは華琳さんみたいですね。

一体なぜ……

へ？

一刀「……すー」

春蘭「な、なななな……！」

秋蘭「なんと！」

華琳「はあ……はあ……びっくりしたわ」

悲鳴上げたの、華琳さんだったんですか？

一刀ちゃん？何故華琳さんのベッドで寝てますか？

いや、僕ももうちょっと驚きたいですよ。もっとこう、あああああああああ！僕も悲鳴あげたいです。なにやっってるんですか、

一刀「……すー」

起きろー！！

一刀「…………」

春蘭「こ、こいつがどうして華琳さまと一緒に寝ているのですか」

華琳「私も解らないわよ……ね、一刀、ちょっとおきてみなさい」

でもまあ、子供にこんな朝早く起きなさいといっても無理なんですよね。

それにしてもよく寝ますね、この騒ぎで。

春蘭「このおおー!」

あ、でも、早く起きないと春蘭の剣に真二つになっちゃいますよ？

華琳「春蘭？私の寝台まで切っちゃうつもりかしら」

春蘭「えっ？あ、いや、それはその……」

華琳「…一刀、…一刀起きてみなさい」

だけど起きない一刀ちゃんです。

華琳「(ピキッ)(ピキッ)」

あ

?!

あ！華琳さん、シート飛ばした。一刀ちゃん吹っ飛んだー!!

どかつ！

一刀「！？！？」

床に落ちてパツと起きた一刀ちゃん。

何事かとあっちこっち見回ってます。

華琳「一刀！！」

一刀「！？（ぴくっ）」

華琳「（ゴゴゴ）（どうして私の布団の中に入っているのかしら？」

一刀「あ……う……（あわあわ）」

いや、僕を見ても…私も聞きたいですよ。

一刀「……」

春蘭「ええい、早く吐かんかー！」

秋蘭「姉者、落ち着け。北郷、竹簡をあげるからちゃんと説明する  
といい」

・

・

『悪夢見た』

全員「……………」

一刀「…（カタカタ）」

正座いたまま、頭を守るようにして開いてある竹筒にはそう書いてありました。

華琳「そう…だから私のところに来たの…私に断りもなく潜んで」

当然まだ怒っていらっしやる華琳さん。

一刀「…う……………」

華琳「……………」

城に来て三日目、一刀ちゃんの大ピンチです。

華琳「はあ……………今回だけは許してあげるわ。今度また人の部屋に勝手に潜りこんだ容赦なく首を刎ねるわ」

一刀「……………（こくっ）」

春蘭「華琳さま!」

華琳「何?」

春蘭「ううう……」

この前の事件のせいで罰をもらってあまり経ってない春蘭さん。それ以上文句を言えずに下がります。

華琳「あなたの部屋に戻りなさい」

一刀「……」

予想以上に軽い叱りで終わり、一刀ちゃんは華琳さんの部屋から出ていきました。

華琳「二人も、もう行っていいわよ。朝から騒ぎになったわね」

春蘭「華琳さま、どうしてあの子にだけそんなに優しいのですか？」

華琳「子供が悪夢を見て頼りになりそうな人の部屋に来たというのに叱るわけにもいかないでしょう。ただ、私に断りもなく入ってきたのは許せないけど」

春蘭「なら……！」

華琳「……そういうえば春蘭、前あなたの部屋に行ったら、私に断りもなく私の等身大人形を作ったみたいね」

春蘭「なっ！どうしてそれを……！！」

華琳「私の人形を作って、一体何をしたのか今夜に詳しく聞かせてもらっわよ」

春蘭「は、はいっ」

秋蘭「……」

華琳「秋蘭、どうかしたのかしら？」

秋蘭「いえ、特に問題は……」

華琳「そう、なら二人とも仕事に移りなさい」

春・秋「御意」

・

・

・

それから一週間後です。

秋蘭「なあ、姉者、最近北郷の姿を見たことがあるか？」

春蘭「は？…いや、見てないが、それがどうかしたのか？」

秋蘭「実は、私もここ最近、北郷を見かけたことがないのだ」

春蘭「どこかにいるだろう。それに、あいつ急に姿を消して他の場所に行ったり来たりするのだから？それを使えば中間行動なんて必要

ないじゃないか」

秋蘭「それはそうなんだが……」

春蘭「ええい、あんな奴のことなんてどうでも良い。どこの馬の骨なのかも知れない子供に華琳さまをとられた気がして、あいつを見ると気分が悪くなるのだ。秋蘭はそう思わないのか？」

秋蘭「姉者も言うことはわかるが、北郷が華琳さまに頼ろうとするのは当然のことだ。あんな小さい子供が、突然親を失って一人になれば、他に頼りになるような相手に付いていこうとするのは当然のことだ」

春蘭「ううう……」

秋蘭「それとも、姉者は華琳さまがあんな子供がいるからって、北郷にだけ贖身するとも思うのか？」

春蘭「それは……そんなはずはないだろうが……」

秋蘭「なら問題ないだろう。それに、最近は華琳さまも初めてそうだったほど北郷に気を使わないみたいだし。姉者が心配するほどではないと思うのだが」

春蘭「ううむ……」

そんな風と言う秋蘭さんでしたけど、まあ、確かに華琳さんは一刀ちゃんが初めて来た頃は、華琳さんほぼずっと一刀ちゃんといましたからね。

まあ、それも別に華琳さんがそうしたわけじゃなく、どこに行っても何故か一刀ちゃんが近くにいる、という状態で、華琳さんが行くところにはいつも一刀ちゃんがいました。

春蘭さんがイライラするのも無理はないです。

それにしても、あの事件以来には、本当に一刀ちゃんが動きがあまりありませんね。

初めて来た時は城のあっちこっちで現れて、華琳さんたちだけではなく、侍女さんたちや城の文官たちを驚かしたり色々ありましたね。

最近はまだ部屋から出てくることも……

……

一度言ってみましようかね。一刀ちゃんの部屋。

・

・

・

一刀ちゃん？

一刀「……………??」

なっ！

一刀「……………」

えっ？ちょっと待って、一刀ちゃん、え？ええ？！

・

・

・

秋蘭「うん？華琳さま」

春蘭「か、華琳さま！休憩ですか？」

華琳「ええ、二人も休み中かしら」

秋蘭「はい…あ、その、華琳さま」

華琳「なにかしら」

秋蘭「最近、北郷の姿の城の中で見当たらないのですが、華琳さまは知りませんか？」

春蘭「またその話なのか？あんな奴のことはどうでもいいだろ」

華琳「そういえば、最近は見えてないわね。私のところにも来ないし、侍女にだけ任せていたからね」

秋蘭「……………」

華琳「そうね…そう言われてみると少し心配になるわね」

春蘭「華琳さま、そんな奴はほつといて、せつかくだからお茶でもいかがですか？」

華琳「また今度にしましょう。それじゃあ……………」

春蘭「ああ…、華琳さま……………」

秋蘭「姉者、今回は譲ってやってくれ」

春蘭「秋蘭？」

秋蘭「何だか、嫌な予感がするんだ」

・  
・

・  
・

一刀ちゃん、しっかりしてください！一体いつからこうだったんですか？

一刀「……………」

一週間！？

一週間で寝てないんですか？

【寝てないわけじゃない。悪夢で眠れない】

一緒ですよ！一週間で魔されてるなんてどういっわけですか？

一刀「……………」

あれですか？やっぱり不安なんですか？こんなところにいるのって？

一刀「……………」

じゃあ、初めて来て三日経るは？

一刀「……………」

何一人で我慢してるんですか、この子は！！

それで、それで華琳さんの部屋に行ってたのですか？一人で眠れな

いから？

「一刀」……（こくっ）」

ああ、…ああ、痛い、頭痛すぎる……

いえ、見てなかった僕も悪いんですけどね。最近ここじゃなくても行くところが色々とありまして……

「一刀」……>>よろよろ<<」

最初から口がいない子だから、自分が何か辛いことがあっても人あまり言わなくて一人で唸っているばかり。

でもこのままだと本当に体を壊してしまいます。

取り合えず布団に戻ってください。

僕が華琳さん連れてきます。

タッ

【迷惑かけたくない】

あなたがこうしてるのがもっと迷惑です！

・・・

・・・

・

「一刀……」

すー

どすっ

「一刀……すー……すー……」

…

…

…

「一刀……う……う……う……う……」

コンコン

華琳「一刀？私よ」

一刀「……………」<く魔されてる

華琳「部屋にいないのかしら」

がらり

一刀「……………」

華琳「寝てるの？今が何時だと……………ん？」

一刀「う……………」

華琳「何震えて……………?!」

……………

『悪夢見た』

……………

華琳「まさか…一刀、一刀起きなさい」

一刀「……………」

華琳「(ピキッ)(おきなさい…!」

?!

どかつ！

一刀「！？　！？（ぐすん）」

『何？　何！？』

華琳「それはこっちの台詞よ。一刀、あなた一体何をしているのかしら」

一刀「……」『何も…寝てただけ』

華琳「……正直に言わないと、切るわよ」

一刀「…う…>>もじもじ<<」

華琳「言いなさい。あなた、ここ一週間どうしていたの？」

一刀「……」

『悪夢見た』

華琳「……」

一刀「……」

華琳「……誰が…！」

一刀「！？」

華琳「誰が頼りにしちゃダメだと言ったのよ!!」

一刀「……」

華琳「魔されてたならそうだって言い部屋に来ればいいでしょう？誰があなたに一人で耐えていなさいって言ったの？」

『でも……』

華琳「でもじゃないでしょう？」

一刀「……」

華琳「呆れた。子供がそんなに控え目な性格は良くないわよ？」

一刀「……」『ごめんなさい』

華琳「はあ……いいわ、今回だけは許してあげるわ。また一人で耐えていたら容赦しないわよ。何かあったら直ぐに私にでも秋蘭にでも言いなさい。いいわね？」

一刀「(こくつ)」

華琳「…じゃあ、私が仕事があるから」

一刀「あ……」

ぐいっ

華琳「……何？」

一刀「……」『今』

華琳「今？…先仕事があるって言ったばかりだけど……」

一刀「……」『華琳お姉ちゃん……』

華琳「うっっ……わ、私は眠たくないわよ？」

一刀「……」(うるうる)「」

華琳「……っ」

・

・

・

夕方

春蘭「華琳さまー！！どこですかー！！」

秋蘭「姉者」

春蘭「秋蘭！華琳さまは」

秋蘭「まだ見つかってない」

春蘭「一体どこに…はっ！もしかしてあいつの部屋に……」

秋蘭「…いや、あそこにも行って見たが、いらっしやらなかった」

春蘭「…そうか、なら一体どこに……」

秋蘭「そう慌てることはない。それより姉者、先華琳さまに頼まれたこと、覚えているか？」

春蘭「おおっ？私たち、今日華琳さまに何か頼まれてか？」

秋蘭「忘れたのか？明日お茶会に使うお菓子を注文しておけと言われただろ？」

春蘭「そ、そうだったか？すっかり忘れてた！秋蘭、早く行くぞ！華琳さまを失望させてはいかん！」

秋蘭「ふふっ、了解した」

たっ たっ たっ たっ

うへー、秋蘭さん空気読みましたね。

それにしてもこの城、何かもののけ多いですね。

何かこう…華琳さんに怨望もってる輩って結構多いみたいですし。

こいつらのせいで魔されてたのか…ちょっと気が弱いとよくひっかかるんですね、こういうのって。

まあ、今は大丈夫でしょう。

ぐっすり寝てなさい。一刀ちゃん、華琳さんも。

さて、二人が寝てる間、私はこいつらを片付けるとしますか？

華琳・一刀「……すー……すー……」

拠点フェイズ1 秋蘭・春蘭黙（前書き）

秋蘭が先に出ているのは仕様です。

拠点フェイズ1 秋蘭・春蘭黙

いつものような平和な朝。

今日の一刀ちゃんは……一刀ちゃん？部屋にいませんか？

トントン

うん？

一刀「……（わーっ）」

うわっー！！

一刀「……（にしっ）」

人の後ろに現れるのをやめてください！

一刀「……」

【侍女さんからお菓子もらった】

はい、はい、よかったですね。

お皿一杯もらってきましたね。

【さっちゃんも一緒に食べよう】

僕ですか？……僕より、たまには華琳以外の人たちと一緒に仲良く  
しませんか？

一刀「……」

まだ春蘭さんと仲悪いでしょ？

まあ、あの人も色々あるのですよ。いきなり一刀ちゃんが来て華琳  
さん独占してますし。ここ最近だって、一刀ちゃんばかり華琳さん  
の部屋に行くから溜まってるんでしょ？

一刀「……」

ああ、今は子供に言っちゃダメなことを…口が滑っちゃいました。

一刀「……」

はい、はい、お菓子一緒に食べますよ。

一刀「……（こじっ）」

がたん！

> p f <

春蘭「北郷一刀！！」

その声まさに飛行機のエンジンの音を直前で聞くようなdB！

一刀「!?!?!」

がちゃん！

ああ、お菓子の皿が……！

秋蘭「姉者、そんなに戸を？ 挟じ開けないでっいつも……北郷？」

一刀「……（ぐすん）」

ああ、お菓子、食べれなくなりましたね。

春蘭「なっ、ど、どうした？」

一刀「……うう……」

ああ、春蘭さんまた一刀ちゃん泣かせやがった！

秋蘭「大丈夫か？」

驚いた一刀ちゃんの様子を見る秋蘭さんです。

秋蘭「……危ないから下がっている。お菓子なら後で代わりのものをあげよう」

一刀「……う……」

秋蘭「ううむ……」

これは完全に気に障っちゃいましたね。

秋蘭「仕方ない。北郷、私たちと一緒に少し出かけないか？」

一刀「……??？」

春蘭「秋蘭、今日は暇つぶしでなく、華琳さまの……」

秋蘭「少しぐらいなら時間を分けてもいいだろう。それに、私たちが北郷を連れに来なければこうにもならなかったしな」

正確には、戸さえ普通に開けていれば、ですけどね。

一刀「……（しゅん）」

春蘭「うう…仕方ないな。少しだけだぞ」

秋蘭「というわけだ、北郷。一緒に街に出かけないか？」

一刀「……………」

（こくっ）」

すっげー間とりましたね。

> p f <

初めての時はあまり詳しく見ていませんでしたけど、陳留の街ってすごくにぎやかですよね。

一刀「…お……（キラキラ）」

秋蘭「特に食べたいものはあるか？」

『何でもいい』

秋蘭さんの手を掴んで歩いてる一刀ちゃんの様子は、久しぶりに輝いています。

秋蘭「そうか。なら…こっちも少し時間が惜しいのでな。露店の店のもので勘弁してくれるか？」

一刀「(こくっ)」

その後、露店で買った桃まんを手にして歩いている一刀ちゃん。

春蘭「しゅっらん…」

秋蘭「まあ、そう焦るな。いつもより早く回っていればすむことだろう？」

春蘭「う、うむ………」

そういえば、今日二人さんは何のために出かけたのでしょうか。

一刀ちゃんが心辺りが……

一刀「…(もぐもぐ)」

桃まんにしか目がない。

逸れちゃいますよ？

秋蘭「北郷、こっちだ」

一刀「?…(こくっ)」

秋蘭さんの呼び声に気づきついていく一刀ちゃんです。

やたらと秋蘭さんの言葉には従順なんですネ。

一刀「……(もぐもぐ)」

話したいことがあるのか、食べてる途中の桃まんを口に挟んで竹簡に言葉を書く一刀ちゃん。

『どこに行くの?』

春蘭「何だ、そんなことも知らずに付いてきたのか?」

『連れてこられただけだし』

春蘭「誰もお前には是非にも来いと言っておらん!」

『ボクもそんなこと聞いてないよ』

春蘭「ええい!なら何故お前は私たちに付いてきたのだ!」

『春蘭お姉ちゃんのせいだよ！っていうかお姉ちゃんの馬鹿っぷりに私の書くスピードが追い付かないよ！』

そう書く割には長い文章もよく書きますね。

春蘭「だーれが！脳みそまで筋肉な馬鹿だと！？」

『誰もそこまで言っていないよおお！』

もう泣きたいって顔してますよ、一刀ちゃん。

秋蘭「姉者、時間がないんじゃないの？」

春蘭「ああ、そうだったな。良いから黙って付いて来い。来れば解る！」

一刀「……」

結局、どこに行くのかは説明せずに言っちゃっ春蘭さんです。

寧ろ忘れたかもしませんが。

> p f <

一刀ちゃんが連れてこられた場所は……女性専用服屋

『服買っの？』

春蘭「当たり前だろ？それ以外に何がある？」

一刀「……………（じー）」

春蘭「な、なんだ。何故私をそんな目で……………」

一刀「……………」

まあ、女性服屋ですし、一刀ちゃんの服を買いに来たわけではなさそうですね。ならこの面子だとやはり……………」

秋蘭「これから華琳さまの服を選ぶのでな。北郷も手伝って欲しい」

一刀「……………（こくっ）」

春蘭「よし、それじゃあはじめようか」

秋蘭「うむ」

一刀「……………」

一刀ちゃん、女の人の服とか選んでみたことあるんですか？

一刀「…（ふるふる）」

ですよ。まあ、皆さんスタイルいいですからね。素直に考えて、似合いそうな服見つけたらいいと思いますよ？

一刀「……（こくつ）」

そう言つて一刀ちゃんは二人と一緒に服を見始めました。

> p f <

ぐいぐい

秋蘭「うむ？」

秋蘭さんが裾を引つ張れるのを感じて振り向けば、一刀ちゃんは服を一枚もつて立っています。

『これは？』

秋蘭「ふーむ…華琳さまはこつという派手な服はあまり……」

一刀「……」

服が汚れちゃだめなので何も言わずに先ず服をあつた場所戻す一刀ちゃん。

一刀「…??？」

『そついえば、華琳お姉ちゃんの服を選ぶのに、どうしてボクが来たの？』

秋蘭「たまには他の人たちの意見も聞きたいのだ。北郷も華琳さまの最近一緒にいたから解るだろうと思うが、華琳さまは忙しくてこんなに服を選んでいる暇などはない」

『そっか』

春蘭「おい、北郷。これをどう思うか？」

一刀「??？」

春蘭さんが選んだ服は……うわぁ……

一刀「……（ぽかん）『春蘭お姉ちゃん、本気？』

春蘭「どういう意味だ？」

『それ、本当に華琳お姉ちゃんに着させる気なの？』

春蘭「だからなんだ！私が選んだ服が華琳さまに似合わんと言っつもりか？」

『凄くいい。でも、』

春蘭「でもなんだ！何が問題だ！」

『でも華琳お姉ちゃんが着ない』

春蘭「……ふふーん」

「一刀」??？」

何ですか？あの笑いは？ちょこっと怖いんですけど。

すっ

春蘭「何故秋蘭の後ろに隠れる!!！」

移動して秋蘭さんの後ろに隠れる一刀ちゃん。ドン引きです。

秋蘭「実は、華琳さまの身代わりの人形があるのでな。その服で、試してみたりするのだ」

「一刀」……………」

それって、所謂等身大ドールですか？この前言ってた……

だからその身代わりに人形に、華琳さまにはとても着てくださいと言えない服たちを着させると……

「一刀」……………」

「一刀ちゃん、ドン引きしますn……………」

「一刀」……!!（ドン）（ドン）」

って!!もっと凄い服選んできやがったこの子!

春蘭「おお！そ、それは……！」

秋蘭「うむ……確かに華琳さまに着せたい服ではあるが……あんなもの、我々の体が持たんぞ？」

春蘭「ええい、私も負けられん。これはどうだ！」

一刀「！……（ドン！）」

春蘭「なん……だと？」

秋蘭「はあ……！」

ああ、何かこう、フォローできませんね。

案外、あんなところ似てますね。あの二人。

ちなみに、このノリで選んだ服たちは、後で全部秋蘭さんに没にされました。

> p f <

そうやって三人が買い物を終えた時は、もうすっかり夜でした。

春蘭「イマイチだったな、今日は」

秋蘭「うむ、めぼしい収穫はなかったな」

一刀「……（よろよろ）」

秋蘭「おっと」

一刀ちゃん、遅くまで二人と一緒に服を選んで疲れてるんですね？

秋蘭さん、よろよろと歩く一刀ちゃんをおさえて、服のバックを抱いたまま一刀ちゃんまで抱き上げました。

春蘭「大丈夫か？」

秋蘭「ああ、…少し、これを持ってくれるか？」

春蘭「ううん」

一刀ちゃんを抱いた秋蘭さんからバッグをいくつが代わりにもって持った春蘭さん。

春蘭「結局、あいつは特に役に立ってなかったんじゃないか？やはり時間の無駄だった」

秋蘭「ふふっ、いや、そうでもなかったぞ？」

春蘭「どういう意味だ？」

秋蘭「後で説明しよう。私は北郷を部屋に戻すから、姉者は先に行つて服を片付けててくれ」

春蘭「ううむ」

春蘭&秋蘭の部屋

春蘭「よいしょっと……えーと、それじゃあ……」

がちや

春蘭「この前作った華琳さまの人形は、華琳さまにはれて処分されてたからな。念のため二体も作っておいて良かった」

二体あつたんだ……

それにしても、本当にうまく作ってますね。

まるで本物……

……

隠しどころから人形を抱き上げようとする春蘭さん。

春蘭「??…なんか、人形が生暖かいんだが……」

人形が生暖かい……ああ、春蘭さん、それは……

華琳「春・蘭？」

春蘭「げっ！華琳さま!？」

本物ですww

えっと、どついうことかとですね……

> p f <

『昨日ね？華琳お姉ちゃんと一緒に寝てたらね……』

.....

華琳「一刀？明日は私と一緒に寝られないわよ？」

一刀「(ガーン)」

華琳「私はあなただけじゃなく、他の部下たちのことも気を使わな  
いとだめなのよ。だから今回は、あなたが少し私を手伝いなさい」

一刀「??？」

.....

『今日春蘭お姉ちゃんと秋蘭お姉ちゃんが絶対買い物に行くから、  
ボクもそれについて行って、華琳お姉ちゃんの服だけじゃなくて、  
春蘭お姉ちゃんと秋蘭お姉ちゃんの服も選びなさいって』

秋蘭「何だか選んだ覚えのない服があったのはそういうことだった  
のか…華琳さまが気づいていらっしやるだろうとは思っていたが…

…じゃあ北郷も、私たちが来ることを最初から知っていたのか？」

『うん。……お菓子のごとはわざとじゃなかったけど……でも桃まん美味しかった』

秋蘭「私たちの服は、何故買ったのだ？」

『できるだけ恥ずかしい服に選びなさいって言われたから…多分…』

> p f <

「また一つあると私知らなかったと思ったのかしら？今日はあなたが着せ替え人形になってもらうわよ？」

「か、華琳さま……！！！！！！」

悲鳴× 嬌声

> p f <

秋蘭「……姉者」

一刀「……」 『ご冥福』

秋蘭「だが、私は大丈夫なのか？行かなくても」

『秋蘭お姉ちゃんはボクと一緒にいるのがお仕置きだって』

秋蘭「……ふふっ、そうか」

> p f <

すすー

『……あのね、秋蘭お姉ちゃん、ボクと寝るのが嫌だったら、他のところに行って寝てもいいよ？ボク華琳お姉ちゃんに嘘で言うから』

秋蘭「うん？？いや、それは別にかまわないが…どうして私がお前と一緒に寝るのが嫌いだろうと思うんだ？」

『だって、女の人って子供と一緒に寝るのが嫌がるでしょ？』

秋蘭「……？？すまん、話がわからないのだが」

一刀「……？？？」

『お母さん、ボクと寝るの嫌がってた』

秋蘭「……」

一刀「……」 『華琳お姉ちゃんも最初は怒ってたし、お母さんも男の子はお母さんでも女の人とはいっしょに寝ないんだって言ったか  
r…』

一刀「！>>なでなで<<」

秋蘭「……」

一刀「…??>>なでなで<<」

秋蘭「嫌がるなんてとんでもないさ。私がかまわんぞ」

一刀「……」

秋蘭「たくさん歩き回って疲れてるんだろ？もう寝るぞ」

一刀「……（じくっ）」

そして、夜遅くまで灯りが付けてあった二つの部屋の中で、一つの部屋の灯りが消えた。

一刀「すーすー」

秋蘭「……」

ちなみにもう一つの部屋の灯りは、次の朝までずっとついてあった。

### 三黙（前書き）

やさしいお姉ちゃんだと思っていた人が実は人殺しだとすれば、子供は大人の事情に理不尽な理屈に対してどう反応すればいいんだろう。

### 三黙

城壁から見える風景は、とても広くて、雄雄しくて……

「……………」

そして、とても虚しく見えました。

「うん？おい、貴様、こんなところで何をしている」

「……………」

「一刀ちゃん、後ろに春蘭さんが来てますよ？」

「……………？」

「どっした？こんなところで」

「……………」

『特に何も……………見ていただけ』

「暇な奴だな、お前も」

『悪い？』

「悪いだろ。子供なら子供らしくもうちよつと活発に走り回れ」

「……………」

「な、何だ、その目は」

いや、春蘭さんがそんなこというと…なんというか…ねえ？

「……………（じくっ）」

「何だ！何か私の話に肯定しているというより何か一人で納得しちやっただよなその爽やかな頷き方は！！」

「二人でここで何をしているの？」

あ、華琳さん。そして、後ろには秋蘭さんも立っています。

「か、華琳さま」

「……………」

「春蘭、騎馬と機材についての報告を今日のうち提出なさいって言ったはずだけど？」

「ああ、今持っていこうとしていたところですよ。なのになにいつが…」

「一刀ちゃんが何か？」

『ごめん、ちょっと遊んでた』

「一刀ちゃんエ……そこはかばわなくていいですよ。」

「構わないわ……春蘭？」

「はい、ここに……」

春蘭さんが持っていた報告書を華琳さまに渡したら、華琳さまがそれらを凄まじいスピードで読み始めました。

「……春蘭？」

「はい」

「……兵糧調達についての報告がないんだけれど？」

「はいつ？……あ」

「姉者……」

『春蘭お姉ちゃん……』

「う、ううう……今日こそは何も忘れずにできたと自身してたのに」  
この人いつも何か一つずつ忘れるんですよね。

「い、今すぐ持ってきます！」

『あ、華琳お姉ちゃん、ボクが行ってもいい？』

「一刀が？」

『ボクが行ったら持ってくるの早いし』

「そうね…それじゃあお願いしようかしら」

「北郷、どこのかは知っているのか？」

「（こくっ）」

頷いた一乃ちゃんは、直ぐにその場から消えていました。

「相変わらず、どうやるのかわけが解らない術ですね」

「本人にも聞いてみたけど、普通にできるんだそうよ。天の国では普通なのでしょう」

いえ、普通じゃありません。

「本当にあんなやつ、ここに居させていいのでしょうか。あんな…  
…妖術を使うやつを…」

「春蘭…もし一刀の前でそんなことを言ったら、例えあなたでも許さないわよ」

「……………」

「妖術のようなものが使えるといっても、本人は何も知らない子供。  
あの子が誰かに害を与えることを見たことがあるのかしら」

「いえ、そういうわけでは…」

「なら問題ないでしょうよ。……あの子はあんな風にいてくれるだけでいいのよ。それだけで……他のことは期待していないわ」

「……はあ……」

そういえば、華琳さんは何故一刀ちゃんを城において、

男は近くにもいさせないと言うあのほうが、毎晩一人で寝ることを嫌がる子供をまるで自分の子のようにいつも一緒に寝かせ、

仕事一つがちゃんとできるわけでもない子供を、城の中で一緒に歩きながら一緒にすごすのでしょうか。

……解らないことです。

私は人の考えを読めるわけじゃないんです。

あ、一刀ちゃんは例外ですけど……

それじゃあ、私も付いていきます。

> P F <

「……(きょろきょろ)」

あれ？一刀ちゃん、どうしたんですか？もう報告書もらっているだろ？と思ったんですけど。

「……」【あの、誰にもらえばいいの、報告書？】

…はい？

【監督の人、誰か知らない】

知らないんですか？

場所もしているし、てっきり知っているだろうと思ったんですけど。

【この前監督の人変えたと秋蘭お姉ちゃんに聞いたんだけど、見えない】

はあ…しょうがないですね。いいですよ、教えてあげます。

【あ、さっちゃん知ってるんだ】

そりゃまあ……あ、ほら、あそこの猫耳の頭巾を被っているひとですよ。

「(くくく)」

ジュンイクさんです。猫耳の頭巾、その中何が入っているのは、魏の人たちの中でも、時々謎にされているほど謎なんですけど、私は個人的に角説を追従しますね。

多くの時間、華琳さんのところで華琳さんを助けるようになるでしょう。

ぐいぐい

「うん？」

「……」

あ、一刀ちゃん、その人に接する時は…

「きゃあああ！！」

「！？」

…後ろからいきなり現れたりしたらいけません。

「な、何なのよ！何でこんなところに子供がいるのよ！」

「……（ドキ…ドキ）」【びっくりした】

声大きいですね。春蘭さんと別の意味で。

「……」

『「この監督官のお姉ちゃん？」』

「え？ええ、そうよ。何？道に迷ったのなら他の人に尋ねなさいよ。私は忙しいから」

『華琳お姉ちゃんから「ひょうろつちょうたつ」の報告書もらってくるように頼まれた』

……一刀ちゃん、まさかとは思いますが、兵糧調達が何なのかよく解ってないんじゃないか……

「なっ!?!?どうしてあんたが曹操さまの真名を使ってるのよ!?!?はっ!まさか、」

「??.?」

「いや、…いやありえないわ。華琳さまは男は閨には呼ばないはずなのに……そうよ、きっと何かの間違いよ!」

キチガイの間違いじゃないですかあ?主にあなたが。

『ひょうろつちょうたつの報告書……』

「あなた!華琳さまのどういう関係なのよ、正直に言いなさい!」  
それはとても無理な要求であります。

『毎晩一緒に寝る関係』

そしてあなたはこんなところでまた状況をややこしくなる言葉を「わざと」書き込むんですね、解ります。たまに一刀ちゃんには、すごく大きい声でつつこみたくくなります。

「なん……ですって?」

『そんなことはいいから報告書……』

「良くないわよ！」

「……」

はあ……うん？一刀ちゃん、報告書って、これじゃないですか？何か、普通にこんなところになりましたけど。

「！」

「あ、待ちなさい、それは……」

華琳さん急いでるでしょうから早くいきましょ？

「（じくっ）」

「なっ!？」

一刀ちゃんを止めようと手を伸ばした先に、一刀ちゃんはあるはずもなく、ジュンイクさんはそうやってきよとんとなって立っているのでした。

> っp <

すっ

「……………」

「ありがとう」

はいつ、って一乃ちゃんが渡した報告書を目に通す華琳さん。

「……………」

でも、少しずつ目が怖くなっていきます。

「……? ? ? ? ?」

いえ、間違っているわけがありませんよ。ちゃんと報告書につく標識があったのですが……

「秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なの?」

あれ?何か話が怖い方向に……

「はっ、先日仕官してきた新人です。仕事の手際が良かったので今回の食料調達を任せていたのですが……何か問題でも?」

「ここに連れてきなさい。大至急よ」

「……」

「はっ！」

そして、猫耳頭巾さんを連れに、秋蘭さんは向かいました。

『華琳、お姉ちゃん：私、何か間違えた？』（カタカタ

怖い顔になった華琳さんに驚いたのか、そんなことを書いた一刀ちゃんは、秋蘭さんもないので春蘭さんの後ろに隠れています。

「……大丈夫よ。あなたに怒ってるわけじゃないわ」

それを見た華琳さんはそう一刀ちゃんを安心させましたけど、固まった顔を緩めることはなかったです。

「……」

しばらくしたら、秋蘭さんが猫耳さんを連れてきました。

「おまえが食料の調達を？」

「はい？あ、はい……」

何だか驚いていましたね。まあ、それ持っていた子が急にいなくなったりしましたからねえ。

「……（ひょいっ）」

「！」

春蘭の後ろにまだいた一刀ちゃんを見た猫さんですが、直ぐに華琳さんを見て話を続けました。

「必要十分な量は用意しておいたはずですが…何か問題でもありませんでしょうか？」

「必要十分なんて、どういってもりかしら。指定していた量の半分しか準備できていないじゃない」

「っ！！！！」

その言葉をいう華琳さんは、今まで一刀ちゃんが見てきた姿とは、あまりにも違う人に見えてしまったので、一刀ちゃんは自分がしかれてるわけでもないのに、カタカタと震えていました。

「このまま出撃したら、兵糧不足で行き倒れになる所だったわ。そうだったら、あなたはどう責任を取ってくれるのかしら？」

「いえ、そうはならないはずです」

「何？………どういふ事」

「はい、理由は三つあります。お聞きいただけれるでしょうか？」

「説明なさい。納得できる理由ならば、許してあげましょう」

「ご納得いただければ、それは私の不能がいたすところ。この

場で我が首、刎ねていただいても結構にございます」

「……………一言はないぞ?」

「……………(ブルブル)」

> p f <

「…じむ?」

ふと、一刀ちゃんが震えていることに気が付いた秋蘭さんです。

でも、場の空気があまりにも重いために、秋蘭さんにもどうしようもない様子。

いや、もうちょっと……………華琳さん? 影子ちゃんが怯えていますよ?

といつかこの子はそれでもここにいるんですね。

そうしている間でも、話は続いて、

「なっ! 馬鹿にしているの! 春蘭」

「はっ」

シヤキン

「!」

ジュンイクさんの話に激情した華琳さんを見て、春蘭さんはその場で大剣を引きました。

それを見た一刀ちゃんは春蘭の後ろにも立てなくなって、華琳さんたちの群れから何歩か離れた場所に立ちました。

それでも完全に居なくなったりはしません。

「華琳さま、まだそうなさるのは早いかと。また二つの理由がありますから……先ほどのお約束もありますし……」

一刀ちゃんが怯えているからもうよしてくださいとまでは口で言わない秋蘭さんでした。

今更そんなことを言っただって、華琳さんが怒りを隠すとも思えませんが……

「そうだったわね。で、次は何？」

「二つ目は、兵糧が少なくなれば身軽になり、郵送部隊の進軍速度が上がります。よって、討伐全体にかかる時間を、大幅短縮させることができます」

「……………」

秋蘭さんは華琳さんとジュンイクさんの話を聞いていながらも、後ろの一刀ちゃんのことはずっと気になるのか、時々後ろを振り向いて、一刀ちゃんがいなくなっていないか確認しています。

いっそのことなら近づいて慰めてあげても良いはずなのに……

「……秋蘭……秋蘭」

「うん？あ、どうした、姉者」

そして、そっちの方に気を使っていて、春蘭さんが呼ぶ声も耳に入  
ってなかったようです。

「行軍速度が速くなっても、移動速度が速くなるだけだよな？討伐  
全体の時間が半分なるわけでは……ないんだよな」

「……ああ、そうだな。そうはならないぞ」

「良かった……私の頭が悪くなったのかとおもった……秋蘭？」

ふと春蘭さんも秋蘭さんが他のことに気を散らしていることに気が  
ついたようです。

秋蘭さんの目の先を追いかけたらそこには……

「……………」

怯えている目で、それながらもこっちを見続けている一刀ちゃんが  
いました。

早くいつもの華琳お姉ちゃんに戻ってって、そう祈りながら、待っ  
ているのでしょうか。

けど、一刀ちゃんには解らないのです。

これが、いつもの華琳さんだということを……

一つの軍を預かっている人としての華琳さん、曹孟徳さん。

一刀ちゃんが知っている、やさしいお姉ちゃんとしての顔は、一時のものにすぎないのです。

軍事ごとになれば、華琳さんはまたいつもの華琳さんに戻らなければならぬ。

そのことに、今一刀ちゃんは気づいているのでしょうか。

どうか気づかないように祈ります。

気づいてしまったら、あまりにも可哀相ですから。

好きな人の怖い顔を嫌がって離れていながらも、完全には遠ざかれないその子供のジレンマが、あまりにも悲しく見えてしまいますから。

「秋蘭、あいつは……」

「ああ……姉者は、北郷に私たちのことについて詳しく言ったことがあるか？」

「何をだ？」

「……私たちが一つの軍を預かっている将たちで、華琳さまは大陸を轟かす霸王を目指しているお方で、そのために、これからたくさん

の戦争をし、多くの戦場で、大勢の人たちを殺さなければならぬ  
という話を……だ」

「そんなこと……知っているわけではなかったのか？」

「……知るわけがないだろ。あの子は何も知らないんだ。知りたくもないだろ。あの子は……ただ私たちと一緒にいるだけでも幸せな、  
そういう子なのだ」

「……秋蘭？」

よく解らないように、春蘭さんは秋蘭さんに問い質しました。

春蘭さんにはわからないでしょう。

秋蘭さんが言っている言葉は「一刀ちゃんと一緒に寝ていなければ」  
解らないことですから。

> p f <

「なら、桂花、軍師として働いた経験は？」

こんな風になったから言う話ですけど、華琳さんって以外と空気読  
みませんね。

「はっ、ここに来る前に、南皮で軍師をしていました」

ジュンイクさん、華琳さんに自分を軍師に使ってくださいといった  
ようですね。

まあ、ここまででは皆知っている通りですしね。

違うことがあるとしたら、春蘭さんと秋蘭さんの視線が違つところに向いているといつことぐらいで。

「春蘭？」

「あ、はっ!」

ふと、春蘭さんも華琳さんの言葉を聞き逃すはめになりそうでしたが、流石春蘭さん。華琳さんの声を聞き逃すわけがありませんね。

そして、いつの間にか大鎌をジュンイクさんの首に付け出している華琳さんが居ます。

「桂花、私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは人に試されることよ……分かつているかしら」

「はっ。そこを、あえてためさせていただきました」

「そう。なら、こうすることも、あなたの手のひらの上だということよね」

そして、大鎌を桂花に向かって大きく振るう華琳さん。

すっ!

「!!!華琳さま!」

秋蘭が今叫んだ理由。それは……

「……桂花、その智謀と度胸、私が天下を取るために使わせてもら  
うわよ」

「はっ！」

「華琳さま！」

「……？どうしたの、秋蘭？」

「北郷が……」

「北郷？……！！！」

華琳さんの大鎌が桂花さんの首に振り下がった瞬間、

「刀ちゃんはもうその城壁の上にはいませんでした。」

三黙（後書き）

上げ間違っていました。どうもすみません

### 三黙之奥（前書き）

く之奥とは、尺の都合で二話にわかれたが前後編にするには釈然のしない内容に対してさっちゃん勝手に付けた話の割り方である。

## 三黙之奥

「……」

「あ……」

「……」

会議場。

そこにいるのは華琳さんと春蘭さん、桂花さんが居ました。

秋蘭さんは……

タツ

「華琳さま」

只今参りました。

「どうだったの、秋蘭？」

「……部屋におりました。ですが……」

「……会ってないの？」

「はい、私が行っても何も言えませんでしたため、入っては居ません」

「……」

一刀ちゃんはその後部屋にいたことがわかりました。

けど、部屋に誰が入ったら、姿を消して、戸を閉めればまた部屋の寝台の上で膝を集めて俯いている始末。

秋蘭さんは部屋の戸を開けることすらできず、そのまま帰ってきました。

「華琳さま、私が行ってあいつを引きずってきます」

「姉者、北郷の能力を忘れたのか？」

「む……」

自分が拒む対象には体を触ることを許さない。一刀ちゃん的能力はそれを可能にします。

春蘭さんが言っていることは、不可能でしょう。

「……」

ところで、こんな状況 重い空気が漂う華琳さまの姿 の理由がわからない一人がありました。桂花さんです。

「一つや二つの疑問じゃないでしょうね。」

あの子は一体何なのか？何故あのようなことができるのか？そもそも

も何故華琳さまはあのような妖術使いを自分の下においているのか。  
そして何よりも解らないこと。

何故自分のことよりもあんな子供の問題でこんなに重苦しい空気が  
この場を制しているのか。

元なら華琳さんたちは、これから山賊討伐のために向かわなければ  
なりません。

なのに、たった子供一人が驚いて部屋に籠っていることで、全軍が  
出陣できていない。

「華琳さま」

そして、我慢できなくなった桂花さんが口を開けました。

「華琳さま、華琳さまはこれから、霸道を歩むお方。たかが子供一  
人にこだわっている必要はありません」

「黙れ、桂花！」

一瞬、平常心を失った秋蘭さんは桂花さんに怒鳴りました！

「お前が北郷の何がわかる！」

「確かに私はあの子については解らないわ。私が知っているのは、  
私が華琳さまのためにすることが、ここでこうして立っているだけ  
で何もしないことではないということよ！」

「貴様！」

「秋蘭、寄せ」

珍しくきれてしまった秋蘭さんを春蘭さんが止める始末。

「……………」

その中華琳さんは黙っていた。

そして、

「やめなさい、秋蘭……………桂花のことは尤もよ」

「華琳さま」

「三人はこれから出陣を準備をなさい。私は一度一刀のところに行くわ」

「はっ」

「……………御意」

「それと、桂花」

「はっ」

そして、桂花を呼んだ時、華琳さんの目は鋭くなっていました。

「私との約束が守れなかった場合、今の私と、一刀への侮辱、一緒

に払ってもらおうよ」

「……はい」

そして、華琳さんは一刀の部屋に向かいました。

> p f <

一刀ちゃんにとって受け入れられなかったこと。

それは、自分が知らない華琳さんたちの姿があるっていうこと。

それが何だったのか一刀ちゃんには解らなくても、それが嫌だった。

「……………」

…一刀ちゃん。

「!」

一刀ちゃんがいた場所は、他のところじゃなくて城の自分の部屋でした。

部屋には特に何もありません。

使うことがあまりにない寝台と、テーブルと椅子が二つ、棚が二つあるくらい。そこにも何もいません。

ここが空いた部屋だといっても信じるほど、ここには一刀ちゃんの匂いがまったくしません。

膝を集めて体育座りになったまま寝台の上でこつちを見ている一刀ちゃんの顔には、涙を流した後が二つありました。

「……………」

人の違うところを認めることは、人としては必要な嗜みでありますけど、それができる人間は少ないでしょう。

ましてや、子供にできるはずもありません。

一刀ちゃんが知っていた華琳さんの優しい顔、厳しい顔、それでも自分のことを考えてくれている顔。

今日の華琳さんの顔はどつちでもありませんでした。

新しい顔。知りたくなかった顔。

【……………】

何か言ってください……………よ。

【……………】

せめてあんな華琳さんは嫌だとか、あんな華琳さん見たくないとか、それとも……………。

【……………】

【ボクがいけないの】

.....

> p f <

一刀ちゃんのお父さんとお母さんが一刀ちゃんが他の子たちと違う道を歩いたのは、一刀ちゃんが五才の時でした。

その時の一刀ちゃんは、まだ普通な子供でした。

いえ、普通な子供に見えた、というわけでしょうね。

ありふれた話です。

ありふれてたまる話ではないのですが、

公園で遊んでいた一刀ちゃんは、公園の他のおばさんたちを放していたお母さんの目から離れ、道路へと向かいました。

そして、

ギギギイイイー!!!

そこで車は止まりました。

でもいきなり出てきた一刀ちゃんの寸前で止まるという奇跡はあらず、

誰か勇敢な大学生が自分の身を投げて子供を助けるといふ奇跡もあらず、

「一刀!かずとおおお!!!」

一刀ちゃんのお父さんは、母としての責任を疎かにした妻を叱咤しました。

車にぶつかった一刀ちゃんは重患者室で目を覚まさず。

一ヶ月、二ヶ月、半年が経って、子供を入院させることによって家に金銭的問題が起こり始め、夫婦の間では喧嘩がない日がなくなりました。

そして、一刀ちゃんが気を失ったまま一年が経つ頃、お父さんとお母さんは離婚することになりました。いいえ、どっちかと言うとお父さんの一方的は宣告でした。

その後、お母さんだけが一人で一刀ちゃんを看護しました。

一乃ちゃんのお母さんが一人になって一週間過ぎる頃、病院では大変なことが起こっていました。

重患者室の一乃ちゃんがなくなっていたのです。

徹夜していた看護師急いで担当のお医者さんに、お医者さんは急いで家で寝ていたお母さんに電話しました。

電話を受けているお母さんの顔は驚きに満ちていました。

けど、それは病院から一乃ちゃんがなくなったからではありませんでした。

そのいなくなった一乃ちゃんが、自分の側に寝ていたからでした。

事故から一年後、一乃ちゃんはようやく起きていました。

でも、一乃ちゃんは何も話しません。

お医者さんの言うとおり、事故によって脳に異常が起きたのか、解るはずもありませんが、

それより大変なことは、

一乃ちゃんが毎晩毎晩病院から消えてお母さんが寝ている寝台に現れるということでした。

次の日病院に戻しても、その夜には家に戻ってくる。

一人で来られる距離ではありませんでした。

バスで一時間、子供が一晚を歩いても辿り着くはずが無い距離。

そんなに遠く離れている家に、一刀ちゃんは毎晩毎晩来てました。

そんな一刀ちゃんを見て、お母さんが先ず思ったことは、不幸にも恐怖でした。

その頃、病院代と生活のために厳しい日々を過ごしていたお母さんに、お母さんとしての慈愛心はもうなくなっていったのでしょうか。

日々が続くほどお母さんは、何も言わずに、ありえないところから自分の側に現れている一刀ちゃんのことを怖くて怖くてしょうがなくなってきました。

最初からそういう人だったのか、厳しい日々と夫との別れという衝撃が彼女をそうさせてしまったのかは解りません。

二つだけ確かだったことは、一刀ちゃんは何も言えなくてもお母さんの言葉をいつも従ったってこと。

そして、そんなお母さんは一刀ちゃんと一緒にいることを拒んでしまったこと。

お母さんの肌の温もりが恋しかった頃の一刀ちゃんは、変な理由で早くもお母さんから距離を取らされてしまいました。

口も言わずとも、気づいたらいつの間にか側に現れる一刀ちゃんの仕草は、一刀ちゃんにとってはお母さんへの愛を求めた行為。

でも、お母さんはそんな一刀ちゃんから恐怖を感じ、やがては一刀ちゃんが自分の息子だということも忘れたのように扱いました。

それでも一刀ちゃんは、お母さんに依存しようと思いました。

世界でたった一人、自分を守ってくれる人ですから。

お母さんが新しい家庭を作るまでは、少なくともそうだったかも知れませんが。

> 0 f <

【……】

最初から、そんな子はいなかったのよ、皆もが一刀ちゃんを忘れてしまいました。

お母さんと一刀ちゃんを見捨てたお父さんも、再婚したお母さんも、皆変わってしまいました。

結局、親を失った一刀ちゃんは都立の保育院に任されるようになり  
ました。

急にどこかの優しい人の養子になってもらうという奇跡もあらず、

その後、通った小学校でとてもいい先生に出会って、その後一刀ち  
やんの不幸な日々は報われたという奇跡もあらず、

いなくなったお父さんや、それともお母さんが戻ってくるという奇  
跡もあらず、

一刀ちゃんはそう生きてきました。

「……………」

…ところで一刀ちゃん、これ、あなたのですよね？

「……」

学校でのかばん。私が預かっておきました。

どすつと寝台に落とされた自分のかばんで、一刀ちゃんは急いで開  
きました。

入っているのは普通の教科書と筆記具と……

一刀ちゃんが、消えてしまったお母さんの部屋から見つけた写真一つ。

他は全部燃やされていました。運良く家具の後ろに入って見つからなかった写真。

お父さんとお母さんと一緒に取った写真。

「……(ぼたぼた)」

皆変わってしまったのに、

お父さんも、お母さんも、

なのに写真だけは変わらずに残っていて、

それがもつと昔を恋しくさせてしまって、

一刀ちゃんは久しぶりに見たその写真を見ながら、ぼたぼたと涙を落としていました。

一体一刀ちゃんの何がいけなかったというのですか？

事故も、あんなことができるようになったのも、一刀ちゃんのせいではありません。

一刀ちゃんが親たちを困らせようとわざと車に飛び込んだわけでも、お母さんを怖がらせようと毎晩家に来たわけでもありません。

なのに、

一体一刀ちゃん、あなたの何がいけないのでしょうか？

コンコン

!!

> p f <

「一刀、私よ。入ってもいいかしら」

華琳さん、来ましたね。どうしますか？

「……………」

写真とかばんを隠して、ててつと歩いて戸を開けるその動作には何の躊躇いも見えませんでした。

けどそれは、全ての状況を自分の悪さとして追い詰めた上にできた行動。

自分の手で自分を苦しめること。決していいことはありません。

がらり

「……………」

「ありがとう」

華琳さんは中に入って椅子に座り、一刀ちゃんも反対側の椅子に座りました。

私がお茶を……………あ、淹れませんね。黙って聞いていきましょう。

「一刀」

「……………」

「私は、これから半月ぐらい城を出て行くわ。春蘭と秋蘭も一緒にね」

「……………」

正面で華琳さんを見れずに俯いていた一刀ちゃんが驚いたように華琳さんを見ました。

「少し離れたところに、盗賊たちがいるという報告が入ったわ。私たちはその盗賊たちを討伐するために行くの。朝の時は、そのことで担当の人と話をしていたの」

「……………」

「……………怖かったのね」

「……………（コクッ）」

『いつもと、違った。本気って感じで』

「そうね。…確かにそれは最初は本気で怒っていたけれど……一刀、前にあなたが言ったよね。自分のせいで両親たちが変わってしまったって」

「……………（コクッ）」

頷いた一刀に向かって、華琳さんは椅子から立って、座っている一刀の前に立ちました。

「あなたのお父さんとお母さんが変わったことは、あなたのせいではないわ。あなたが関係ないとも言えないけどね」

「……………」

「でも、少なくとも私には、あなたのことが必要なの」

「……………??？」

「一刀、私はね。これからもたくさんの戦場に立たなければならぬ。たくさん戦って、たくさんの人を殺すことになるでしょうよ。そうになったら、私の心は少しずつ、荒んでいくでしょう」

「……………」

「でも、あなたが私を笑顔のままに見ていてくれれば、私は今のこ

うしてあなたが見ている私で残っていられるわ。秋蘭や春蘭たちもね」

「……」

「……」

そこまで言った華琳さんは、スッと手を伸ばして一刀ちゃんの頭を狙いました。

「…(びくっ)」

少しびくっとした一刀ちゃんでしたが、消える様子はいませんでした。

「私もね。いつもあなたの前では優しいお姉さんであって欲しいわ。けど、状況がそれを許さない。だから、一刀が少しでも苦労をして頂戴」

「……>>なでなで<<」「」

撫でられるままぼんやりと華琳さんを見ていた一刀ちゃんは、

「あっ！」

一瞬自分の視野から消えたことに華琳さんはびっくりしましたけど、

スッ

直ぐにまた現れて、華琳さんの側に立っている一乃ちゃんでした。布団においてあった竹簡をとろうとしただけです。

『一ヶ月もないの？』

「…ええ」

『ボクは？』

「危ないから、ここに残っていなさい。ずっと歩かないといけないから、疲れるわよ」

『その間は一緒に寝られない？』

「……侍女の誰かに言うておくからそれで我慢なさい」

『……嫌』

「私にわがまま言っつもりなの？」

『一人で寝る』

「っ、そ、そう……」

『それと、』

「何？」

『我儘、言っでいい？』

「……今回は私が悪かったから、許容範囲のうちならいいですよ」

「……」

それを言われた一乃ちゃんは竹簡をおいといて、華琳さんに向かって両腕を開きました。

「……な、何？」

「??？」

解らないの？って顔で腕を上下に振る一乃ちゃん。結局また竹簡に何かを書き込むかと思ったら……

「なっ！」

……ぷっ

> オフ <

『抱っ』

> オフ <

「春蘭！秋蘭！」

「はっ！」

「準備はできたかしら」

「はっ、全軍準備完了しました」

「そう、なら直ぐに行くわよ。遅れた分もっとな強行軍になるから、全員覚悟しておくように」

「華琳さま」

「何かしら、秋蘭」

「その…北郷のことは…」

「もう大丈夫よ。安心なさい」

「そうですか………」

「悪いけどあわせる時間はないわ。帰ってきたからになさい」

「御意」

「全員、出陣！」

「………」

「華琳さま、どこか具合でも悪いのですか??少し顔が赤いのです  
が………」

「だ、大丈夫よ、桂花」

> p f <

まあ…そういう華琳さんも新鮮でしたね。

「……………」

しかしまあ、我儘としては随分安かったんじゃないやありません？『毎晩一緒に寝る関係』としては

【そんなことないよ？一度してもらいたかったから】

まあ、私が関係することではないですね。

しかし、直ぐに機嫌直しましたね。一刀ちゃん。

【だって嬉しかったんだもん】

華琳さんが必要としてくれるのですか？

「（こくこ）」

利用され易い性格ですね…いや、失礼。

それよりもう寝ましょう。当分間は一人寝ですね。

【さっちゃんは？】

僕ですか？…とまあ、構いませんけど、一緒に寝るっていう感じは  
しませんよ？

…

…

•

拠点フェイズ2 季衣黙（前書き）

またしく拠点であります。

短いので今日は2つあげます。

## 拠点フェイズ2 季衣黙

「華琳さま、偵察が戻ってきました」

「そう、報告なさい」

ここは華琳さんたちが進軍している最中の場所です。

華琳さんが治めている土地の境を越えたところで、何かの群れが見えたため偵察を放ったのですが、それが只今戻ってきたそうです。

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、この辺りで暴れている賊の一員だと思われます」

「様子を見るべきかしら」

慎重に考えられる華琳さん。

「もう一度偵察を出しましょう。夏侯惇、あなたが指揮を執って」

「おう」

ふーん、この場面てなんでしたっけ……あ、確かここで許緒さんに

……

「…うん？」

「！」

スッ

「春蘭、どうかしたの？」

「あ、いえ、何でも……」

「そう。なら今すぐ行きなさい」

「はっ！」

・・・

「……う」

いや、危なかったですね。バレてしまつところでしたよ。流石春蘭さん、鋭い。まさに獣の感ですね。

「……」

バレちゃったら怒られるでしょうかね。

【来ちゃダメって行ったのに来ちゃったから……】

めっちゃ怒られるでしょうねー

「……うう」

だった来なけりゃいいのに…

【だって…もう一人で寝るのヤダもん…】

はあ…我儘な子ですから。

それより、春蘭さんが動き始めましたよ。先ずはあっちにいつてみましよう。

「…（じくっ）」

スッ

> p f <

あ、こんな高い石山で見ると下に何がいるか全部見えますね。

「……………（ブルブル）」

うん？一刀ちゃん、どうしました？

【…高いとこ、怖い】

何故来たし…

【……ねえ、春蘭お姉ちゃんが行こうとするところって、あそこ…】

どうでしょうね…あれ？あれは…

「はあああつ!!！」

ドーン

人飛んだ!?

「!?!」

ドーン

うわっ、こっち来る、一刀ちゃん危ないですよ!

スッ

ドン!

「うろうろ……」

ああ、後ろのデカイ岩にぶつかった。痛そう……というか死んでない?

「でえええええい!!！」

「ぐおっ!!！」

「まだまだあつ！てやああああああつ！」

「がはっ！」

女の子一人を囲んで大勢の人たちが戦っていますね。

盗賊でしょうか。

「はあ…はあ…もう多すぎるんだよ」

今までよく戦いましたが、あの女の子ももう限界っぽいです。

春蘭さんが来るまではまだちょっと距離があるのですが……

「……………」

「一刀ちゃん？」

「っ」

「一刀ちゃん、その棒で何しようとしてるんですか？」

ギギーッ

棒を絶壁の端の岩の下に突っ込んで、ってちよっまっ……！

グ、ググウー

「っておい、岩！いくら艇使うからって、子供の体重に動くんじゃねえ……！」



「夏侯惇將軍！アレを見てください！」

「あれは…！」

一つの岩で始まっていたものが、落ちながら周囲の石たちまで巻き込み、それは大きな山崩れになっていました。

「危険だ！総員、後退しろ！」

「ははっ！」

一度部隊を引かせる春蘭さん。

じゃあ、許緒さんは……

——  
——  
——

「おい！アレ見ろ！」

「なっ！こんな時にい！」

「逃げる！潰れ死ぬぞお！」

「あ——」

状況を理解した許緒さん。けど、疲れたせいか途中で足に引っかかって転んでしまいます。

「あっ！」

岩は転んできてます、このままでは間に合え……

スッ

「あ、え？」

「……………」

「っ、誰？」

強い日の下なせいか、一刀ちゃんの服が光っていて、許緒さんは一刀ちゃんの姿をちゃんと見ることができませんでした。

転んだ許緒さんの手を掴んだ一刀ちゃんは……

「……………」

スッ

グググー！！

岩が通った後、その場は砂塵で何も見えませんでした。

> p f <

スッ

「……………」

「え？あ、あれ？何、ここは…」

「一刀ちゃんと許緒さんがまた現れた場所は、山崩れが及ばなかった、少し離れた場所でした。」

「……………」

「な、何か良く解らないけど、お前が助けてくれたの？」

「……………（フルフル）」

「まあ、そこで頷いたらアレです。自分で事件起こして自分で解決するという……………マッドサイアンティストとかがたまにやる悪事の一種になります。」

「え？どういこと？」

「……………」

「一刀ちゃん、後ろから春蘭さんが来ていますよ？」

「山崩れが一度止まったところ、偵察に来たようです。」

「！」

「あ、あれ、ちょっと」

「……」

慌てる許緒さんを見て、一刀ちゃんは一度手を振ってから、

スッ

消えてしまいました。

「あ……」

「大丈夫か、勇敢な少女よ」

「あ、はい？…あ、はい」

「よかった…良くこんなところに逃げ切ったな」

「え、いやー、それはその……」

「うん？」

「い、いえ、何でもありません……あの、それよりお姉さんは……誰ですか？」

> 0 f f <

「……………はあ…はあ……………」

大丈夫ですか？

【これ…すごく疲れる…】

ああ、自分以外の人まで移動させるとすごく体力入るんですね…ってか誰もやれと行ってませんよ。

【でも……………】

はあ…まあほおっておけない気分もわかりますけどね……………

でも、

盗賊の全員まで助けるんだったら最初から岩落とさないでください。

【逃げられる程度だろうと思ったのに】

考えてなかったんですか、途中で落石増えること。

【うん】

ああ……………

あ、春蘭さんの部隊が盗賊たちを追い始めましたね。

【疲れた…】

はいはい、今日はもう戻りましょう？

【ヤダー、華琳お姉ちゃんと一緒に寝る】

こんなに大騒ぎにさせてまだ言いますか？今現れたら今回の事故も  
一刀ちゃんも仕業だとバレますよ？

【…ほんと？】

ほんとほんと

【……じゃあ……】

スッ

…とまあ、許緒さん、多分顔見てませんから、大丈夫でしょうね。

バレたらマジ怒られるでしょうし。

> p f <

「……あの子、何だったのかな……天使？」



拠点フェイズ2 季衣黙（後書き）

子供の一刀ちゃんが岩を動かせるかの件については、以前TINA  
MIで可能だという計算を受けたので変えてません（というかでき  
ないと言っても無理です）

拠点フェイズ2 秋蘭黙（前書き）

秋蘭さんって、なんともない顔して結構こういうのに弱そうなんですよねー……自分だけの妄想ですか？

拠点フェイズ2 秋蘭黙

華琳さんたち、今頃だったら戦っているところでしょうかね。

【…大丈夫かな】

まあ、心配にはなりませんけど…きっと大丈夫ですよ。強いですから、華琳さんたちは。

「……（じくっ）」

とじろで、

ピカッ！！

「！！（カタカタブルブル）」

陳留はいい加減天気酷すぎですね。

【ここ最近ずっと稲妻走ってるよ？嫌がらせなの？ボクがあんなこととして罰当たったのお！？】

ピカッ！！！！

…そうでもないとも言えませんね……

「！！！！（じろじろ）」

もう三日も陳留には夜になったらすごい雨と共に稲妻が走り続けて

います。

「一刀ちゃん、ここ最近ずっと部屋の中で布団で体包んでカタブル状態であります。」

【うう…もう怒られてもいい、華琳お姉ちゃんのところに行く】

まあ、そう来ましたか。

仕方ないですね。

まだ寝るには早い時間ですし、もうちょっと待ってたほうがいいですよ

「…う…」

ゴロゴロ…！

【もういやー！】

> 〇 f 〇 <

その頃華琳さんたちなんですが…

ピカッ！

「これじゃあ進軍が遅れてしまつわね」

案の定、こつちにも雷が…

ちなみにこの現状は中原全体で観測されています。

人工衛星…いや、上から見てみて、なんとなく解りました。

「天気 of 悪さは予想のうちです。問題ありません」

「そう。まあ、私もこんな天災によってあなたの首が落ちることをみたくはないけどね」

「……………」

華琳さんの言葉を聴きながら、何故か許緒、季衣さんに目が行っている桂花さんでした。

何故でしょうね。

そういう季衣さんはどうしているのかというところ、

「あの…春蘭さま」

「うん？…どうした、季衣」

「あの…その…今日、春蘭さまと一緒に寝てもいいですか？」

「うん？…別に構わんが、何故だ？」

「いえ、特に理由はないんですけど…なんとなく、そこはかとか

……………」

「?？」

「…姉者、季衣は最近天氣が悪いから一人で寝るのが怖いのだ」

季衣がもじもじしているのを見て、側にいた秋蘭さんが言いました。

「しゅ、秋蘭さまぁ」

「何だー、そういうことだったのか」

「うう……」

「しかし、季衣もまだ子供だな。雷など何が怖いというのだ？」

「それは……その……音大きいし、ぴかっつするし……木とかに当たったら焦げ焦げになるし……」

「解った。私は構わないよ。どうしてもっと早くいわなかったのだ？」

「ううう……恥ずかしいです」

「まあ、良い。今夜は私のところに来い」

「はい」

何か、この人たちの中でこんな話をすると、すごく不穏な気がするのですが……

「…！あ、あの、華琳さま」

「？何かしら、桂花」

「あの…その…実は、私もその…雷が怖いというか……」

「……………」

……………

嘘だろ、絶対。

「あははは！！何だお前は。その年になって雷が怖いと言っのか？」

「お、大きいなお世話よ！怖いんだから仕方ないじゃない！」

「解ったわよ。二人とも騒ぐのはやめなさい」

ピカッ！

「キヤー」

「き、きゃあ（棒読み）」

各々春蘭さん、華琳さんの腰を掴まえる季衣さんと桂花さんでした  
が……………

「……………」

オイ、その猫耳、それでも策士か？ああ？

「…桂花？」

「え、えっと……か、華琳さま…私も…あの…」

「はあ……まあ、いいわ。後で私の閨に来なさい」

「は、はい」

「……」

うわ、華琳さん、何か企みがある顔。お仕置き決定ですね、わかります。

「……」

???

秋蘭さん？

> p f <

ちょっと気になったので秋蘭さんのところに来ました。

「……さて、困ったな」

はい？

ピカッ

「……………」

「……………」

「……………（ブルブル）」

…秋蘭さん？

脚、震えてますけど……………ほんのちよつとだけど。

「姉者は季衣に持っていていかれたし、華琳さまのところも先に乗っ取られてしまったは……………今日も一人で寝るしかないか」

うへえ、まさかこんなところに隠れた雷怖がりやがいたとは……………

って、ちよつと待ってください。

今華琳さんのところに桂花さんがいますね。

どういふことは……………

うおー！！一刀ちゃん、そっちに行っちゃダメ！！

> p f <

スッ

「……………」

「ああんー！華琳さまー！私、もう……………」

「こつなるつと嘘をついたのでしょ？いけない子ね……………」

「あああ……………」

【さっちゃん、何でボクの耳を塞ぐの？】

間に合った……………」

「一刀ちゃん、華琳さんのところは先客があるんだそうです。」

【えー？じゃあ、どうするの？……………」】

ピカッ！

「あゝ……！」

耳を塞いで座りこみました。

【じゃあ、どうするの？ボクもう一人で寝るのヤダよお】

秋蘭さんのところに行きましょう。そこならいいでしょ？

【うう…解った】

スッ

> p f <

「……………」

あれ？秋蘭さん、いませんね……

どこに行ったんでしょうか。

【……………ねえ、おつちゃん】

はい？

【ボク泣いていい？】

何故泣くのに僕の許可が必要なんですか、ってマジで潤わないでください。直ぐに戻ってきます。

ピカッ

コロコロ

「!?!」

あまりにも怖くて秋蘭さんの寝台に飛び込む一乃ちゃん。

どすっ！

「づぐうっ!?!」

「??？」

「う…うう…」

「!?!」

あれ？秋蘭さんベッドの中にいたんですか。

布団、何枚も重ねておいてあったから人があるのに見えませんでしたよ。

「ほ、北郷か？お前がどうしてここにいるんだ？」

「……………（ぐすん）」

「北郷？」

ピカッ！

「！」

「…う…（カタカタブルブル）」

秋蘭さんの腰を掴まえて絶対放さないかのようにじっとしている  
刀ちゃん。

「……………雷が怖くてここに来たのか？」

「……………うう…（にくっ）」

腰を掴まえて上目付きで目を潤わせながら「刀ちゃんが頷きました。

「…そうか。だが、ここにお前がいることを華琳さまが知れば、う  
っ！」

「……………！！」

華琳さんのことを言うと、もっと強く抱きついてくる「刀ちゃん  
でした。

それも嫌なんですね。

というかそっちのほうがもっと嫌じゃないですか？

「わ、解った、華琳さまには内緒にするから先ずは放せ」

「……」

『本当に、言っちゃダメだからね？』

「ああ、解った」

「……（にぱっ）」

「……ふふっ」

笑顔の一刀ちゃんを見て、秋蘭さんも笑いますが、

ピカッ！

ゴロゴロ……！

「う……！！」

「……」

今度、先に相手を抱きしめたのは秋蘭さんでした。

「……????」

「……（ブルブル）」

【……ねえ、さっちゃん】

はい？

【秋蘭お姉ちゃんって……】

はい、一刀ちゃんの考えている通りかと。

「……」

「……うん？」

震えていた秋蘭さんの頭を撫でる一刀ちゃんでした。

いつもと逆ですね。

あまり似合いません。

「（むっ）」

いや、まあ……似てるとかそういうの関係ないですね、はい。

< ｷｯﾁﾝ >

「それじゃあ、灯りを消すぞ」

『消さないほうがいい』

「……そうだな。それじゃあ、このまま寝よう」

「（じくっ）」

そしてそのまま寝台に戻る秋蘭さん。

「久しぶりだな、北郷と一緒に寝るのも」

『うん、…あ、あのね、あの城壁の上の時ね』

「ああ、解っている。怖かったんだろ？私たちがお前の親みたいに変わってしまうのが」

「……（じくっ）」

「大丈夫さ。華琳さまも私も、決してお前を遠ざかるようなことはない」

「……う……」

「寧ろ、華琳さまは北郷が私たちを遠ざかることを心配しているだろっ」

「??？」

「北郷、私たちはこれから…この山賊討伐だけではなくて、たくさん敵と戦わなければならなくなる。それは、今みたいに単に相手が悪者だからだけではなく、華琳さまの道に邪魔者になるとしたら誰でもだ」

「……………」

「そんなことになったら、北郷、お前は華琳さまや私たちのことを怖く感じてしまつかも知れない。華琳さまがお前にここに来れないようにいっておいたのも、その理由だろう」

実際のところ、危ないからというのは少し言い訳としては劣ることがなくもないですね。

どっちかというと、猛者たちが集まっているこのの方が、陳留の空の城よりは安全と言えるでしょうし。

「……………」『嫌いにならない』

「…北郷」

『約束する。秋蘭お姉ちゃんたちのこと、嫌いにならない。これからも、ずっと一緒にいるだから、秋蘭お姉ちゃんも約束して。ボクのこと嫌いにならないって。ボクのこと見捨てないって』

「……………ああ、約束するさ」

「……………（てへ）」

約束するという秋蘭さんの言葉を聞いた一刀ちゃんは、嬉しそうに秋蘭さんの体にもっとくっつくのでありました。

ピカッ

コロコロー！

稲妻は続いていましたが、二人とももう気にしていないようです。

「……お休み、北郷」

「……………（こくっ）」

二人とも、お休みなさい。

・

・

・

> p f <

「アハハハ、跪いて脚をお舐め！」

「ああん、華琳さまー」

うっせえわ、お前らもう寝ろ！

コロコロー——



拠点フェイズ2 華琳黙（前書き）

TINAMIに行くところの没だったものがありますが、結構おかししいし、ここにあげると殴られそうなので自重します。

拠点フェイズ2 華琳黙

一刀「〜」

嬉しそうですね。

一刀「(こくっ)」

あ、そういえば、昨日伝令さん来てましたね。華琳さんたちが今日帰ってくるって。

一刀「(こくっ、こくっ)」

そうですね。早く華琳さんに会いたいですね。

一刀「(こくっ)」【何回かこっそり行ったけど、見てないから】

そうですね。…ああ、今頃なら行ってもいいんじゃないありません？

一刀「??」

ほら、もう半日ぐらい残っているし、今ちょっと早く迎えに行ったからって華琳さんが怒るとは思いませんよ。

【……そうかな……うん、そうだね】

じゃあ、今行きますか？

一刀「(こくつ)」

ラーメン屋さん「へい、御使いのぼっちゃん、ラーメンお待ち」

一刀「…あ…」

あ、そういえば昼食食べようとしたところでしたね。

> p f <

ここ、進軍中の曹操軍

スッ

一刀「…(きよろきよろ)」

あ、一刀ちゃん、危ないですよ。

一刀「…あ…」

一刀ちゃんを側に空いた車たちが通り過ぎました。

一刀「………？」

きっと輸送部隊ですよ。兵糧がなくなっただけですね。

やっぱり、ちょっと足りなかったみたいです。

一刀「??」

ああ…つまりこの人たち全員昼食とってないということです。

一刀「!!」【じゃあ、華琳お姉ちゃんたちも?】

さあ、どうでしょうね。將軍たちの分は残っていたか良く解りませんが…華琳さんの性格を考えれば、兵たちが餓えてるのに自分だけ食べたりはしませんね。

一刀「……」

まあ、あまり先走ってもよくありません。

とりあえず華琳さんのところへ行って、様子を見てみましょう。

一刀「(くっく)」

・

・

・

華琳「桂花。最初にした約束、覚えているかしら」

あ、あそこに華琳さんたちがいますね。

【あれ?この前見た春巻のお姉ちゃんも居るよ?】

はるまつ!?!? いや、それはよしとして……

華琳「桂花、城を目の前にこんな話を言うのも何だけれど……私、とてもお腹が空いてるの」

あれ?…なんか、空気重くありません?

一刀「……」

あ、一刀ちゃん、今は出る場面じゃないですよ……ってもう遅いか。

桂花「ですか、華琳さま。一つだけ言わせていただければ……それはこの季衣が」

季衣「にゃ?」

まあ……案の定の流れに來ましたね。

別に、一刀ちゃんが行っても行かなくても問題ありませんでしょうね。

てててて

華琳「不可抗力や予想できない状態が起こるのは戦場の常よ。それをいい訳にするのは……」

ぐいぐい

> p f <

華琳「…??あ、か、一刀？」

桂花「なっ?!」

春蘭「き、貴様が何故ここに…!」

秋蘭「北郷!」

季衣「にゃ？」

一刀「……」

いつもの作法で自分の存在を示す一刀ちゃんです。

が、

華琳「一刀、どうしてここにいるのかしら」

『華琳お姉ちゃん、お腹空いた?』

華琳「私の質問に先に答えなさい」

『お迎えに来た。お腹すいた?』

華琳「一刀、戦場というものはね。無事に帰ってくるまでが戦場なのよ。私が戦場に来るなど言ったのは、それは私が城に着くまで来ちゃダメって言ったのよ」

『お腹空いた?』

華琳「あなた……」

『空いた？』

秋蘭「北郷」

一刀「……（むっ）」

華琳「……っ」

ちりちりっ

あれ？

あれ？何これ？

何で華琳さんと一刀ちゃんの間でスパークが……

桂花「ちよつとあなた、何よ華琳さまにそんな目を……」

『猫耳は黙ってて』

桂花「なっ！」

『お腹空いた？』

華琳「……ええ、空いてるわよ」

一刀「……」

スッ

あ、消えた。

桂花「な、何なのよ一体」

秋蘭「華琳さま、北郷は……」

華琳「ええ……どうやら怒らせてしまったようね……」

え？怒った？何故に？

> p f <

一刀「……」

ぐいぐい

一刀ちゃん、何してますか？せつかく華琳さんたち迎えに行ったのに黙って帰ってきちゃったりして…

一刀「……」（イラッ）

ぐいぐい

【何だよ。馬鹿じゃないの？】

はい？

ぐいぐい

【ねえ、さっちゃん、どっかでノリない？ノリ？】

ノリ？

ええっとちょっと待って下さいね…

確か前もって来たかばんに糊が…

「……………」  
(ジド目)

あ、あれ？この糊じゃないですか？？

【さっちゃん、私の手にいるのは、何？】

え？…ああ、そういえばそれって…

【さっちゃん】

はい？

【今ボク機嫌悪いから戯れこと言ったら容赦しないよ(ゴゴゴゴ)】

おお、いつの間にか僕って下僕扱い……いや、まあ、怖いから従いますけどね。

何でこんな目に……

僕なんか悪いことしました？

> p f <

春蘭「あ奴が怒ったってどういうことだ？」

華琳「ふう……」

秋蘭「……多分、私たちがお腹を空かしていることに怒っているのだろう」

春蘭「はあ？何だそれは」

秋蘭「…兵糧がこの頃に尽きることは帰ってくるころから知っていたことだった。途中で城に伝令を入れることもできたのだが」

華琳「これは私と桂花の問題だったからね。だから城に伝令を出した時、その話はしないようにいっておいたのよ」

秋蘭「それで、北郷は兵糧が尽きたことを先に言っていないことに怒っているということだ」

春蘭「うーん……」

桂花「だからって何よ、華琳さまに対してあの態度は！大体、あの子は一体何者なの？急に現れたと思ったら急に消えたりもして」

秋蘭「桂花、あの子は……」

華琳「秋蘭、今は一刀のことが重要じゃないわ。今重要なのは……」

ぐいぐい

華琳「うん？」

また来ました。

一刀「……（ハイツ）」

華琳「一刀…これは？」

帰ってきた一刀ちゃんが持ってきたのは大量のおにぎりです。

糊はなるべくいい物を見つかるうと思いついて、韓国の知り合いさんにお願ひしました。

一刀「……」

華琳「御飯に……この黒いのは何なの？」

『ノリ』

春蘭「はあ？ノリは食えんだろ。しかもあれは白……」

一刀「……（ジド目）」

ああ、今の一刀ちゃんにそんな馬鹿事に付き合ってくれる余裕はなさそうです。

一刀「……」

華琳「何？それを私に食べなさいって言うの？」

一刀「…（こくっ）」

華琳「私だけ食べるわけにはいかないでしょ？こっちは四人の将と千の兵士たちがいるのよ。私だけ腹を満たす気はないわ」

一刀「（ピキッ）」

むしゃむしゃっ

あ！持って来たの食う！

それも凄い勢いで。

華琳「…??？」

皿にはかなりの量のおにぎりがあったのに、一刀ちゃんは皆が見る場でそれらを全部食べちゃいました。

一刀「……」

スッ

あ、また消えた。

春蘭「な、何なんだ一体？」

秋蘭「…もう私にも解らん」

華琳「まあ、後で城に帰って何とかするわよ。今は……

ドーン！！！！

ドーン！！

ドーン！

華琳「！？」

春蘭「何事だ！」

兵士「申し上げます！」

華琳「今のそれは何だ！」

兵士「曹操さま！部隊の行き先に車が！」

華琳「車？」

兵士「はっ！いきなり現れて…上には兵糧が盛ってあって、前に子

供一人が立って……」

華琳「!!!?」

秋蘭「まさか……!」

春蘭「な、何だ?どういふことだ?」

> p f <

一刀「……(ゼーゼー)」

馬鹿ですか、あなたは……

人何人を直ぐ側に運ぶのも力使い尽くしたくせに、

普段なら馬二つが運ぶ車を三つも持ってきますか。

【うっさい】

おお、こわいこわい。

一刀「……(ブルブル)」

大丈夫ですか?

【頭がくらくらする】

帰って休みますか？

【ちよつと後で】

華琳「一刀！これは……」

秋蘭「まさか…北郷、こんなこともできたのか？」

一刀「……」

華琳「あなた何てことを……」

『華琳お姉ちゃんが悪いんだよ』

華琳「何を……何でそこまでするの？」

一刀「……」

一刀ちゃん、また何か書くのかと思いきや…

一刀「……」

見せずに他の竹簡に書き直しました。

『で？食べないの？ここまでしたのに、食べないとか無しだからね』

華琳「……」

春蘭「か、華琳さま…」

ぐうー

秋蘭「……………」

華琳「……………」

季衣「……………す、すみません。目の前に食べ物があるから、つい……………」

桂花「あんたね……………」

何か重い空気だったのが台無しに……………」

華琳「はあ…解ったわ。食べるからそう怒らないでよ」

一刀「……………(フラツ)」

あ

華琳「一刀!」

倒れそうになった一刀ちゃんでしたが、車を掴んでギリギリ倒れませんでした。

春蘭「まったく!脅かしやがって……………」

大丈夫ですか?

【……………お腹減った……………これもう二度とやらない】

はい、はい。

そういえば、先おにぎり全部食べたのって、気力補充だったんですね。

基本小腹なのに、妙に沢山食べると思ったたら…。

華琳「秋蘭、調理部隊に準備させなさい」

秋蘭「はっ」

華琳「一刀、おいで」

一刀「……………」

動けないようです。

華琳「仕方ないわね…春蘭」

春蘭「はっ」

春蘭さんが車に近づいて、一刀ちゃんを抱き上げて華琳さんのところに行きました。

華琳「一刀、そういえばあの兵糧。手配したわけじゃなければ、倉から断りもなく持ってきたわね？」

一刀「……………」『言って持ってきた、一応』

華琳「一応、ね……まあ、後で今回のことについてはお仕置きがあるからね。期待してなさい」

一刀「…（じくっ）」

華琳「で、先持ってきたおにぎりとやらだけど、また作ってくれないかしら」

一刀「……………」

華琳「疲れてるなら、後でも構わないけど」

一刀「…」『ヤ、もう作ってやんない』

華琳「あら、そう。残念ね」

一刀「……………」

> p f <

秋蘭「うん？これは…先一刀が書いて捨てた……………」

『餓え死に掛けてみたことある？』

秋蘭「……………」

桂花「何見てるのよ」

秋蘭「…な、桂花、お前は死にかけるほど餓えてみたことあるか？」

桂花「は？いきなり何よ……まあ、私の家は豊かだったからね。そんなことは……」

秋蘭「ああ、私もだ」

桂花「それがどうしたの？」

秋蘭「いや、特に何でもない……」

で、一刀ちゃん、何でそんなに怒ってたんですか？

【さっちゃんはね。金払ってやる24時間飢餓体験とかやってみたことある？】

え？…一度だけありますね。あの時は大変でしたよ、本当。死ぬかと思いました

【……食い過ぎて腹千切れて死ぬ】

ええ！？

死ねばいいのにでもなくただ死ね!?

> p f <

食事中の華琳さん

華琳「……………」

じっと御飯を見ているだけだと思ったら…

華琳「……………」

御飯を手に握って（熱くないんですか？）

華琳「……………」

中に一緒に出てきたマーボー入れて」

華琳「……………」

また握る。

パクッ

華琳「……………何やってるの、私？」

さあー。

ちなみにもあれ、中身はメンマでした。

拠点フェイズ2 華琳黙（後書き）

普通の会話でも過去の辛さが滲み出る一乃ちゃんです。

拠点フェイズ2 桂花黙

桂花「ちよつと、あんた起きなさいよ！」

一刀「……（すー）」

桂花「起きなさいってば！今日朝から会議があるのよ！」

一刀「……（すー）」

桂花「……（ピキッ）」

あ

?!

どかつ！

一刀「！？！？」

布団から飛ばされて床に頭をぶつけてパツと起きた一刀ちゃん。

何事かとあっちこっち見回ってます。

あれ？これって前にやってない？

桂花「ほら！早く行くわよ！」

一刀「……あ！」

桂花さんの腕に引つ張られて、一刀ちゃんは無理矢理引きずられて「桂花さんの部屋」から出ました。

何故一刀が桂花さんと一緒にいるのかというと、

この前、倉から勝手に兵糧を持ってきた罰です。

本人はことわってから持ってきたと言ったんですけどね（倉の担当者半分脅迫されたそうです。一刀ちゃん何したの？）

それで、桂花さんの罰も一緒に合わせてもらうことになりました。ズバリ、今度一週間、二人で一緒にいることに決められたようです。

二人の腕は長い布で繋がっていて、役3m以上離れないようになっています。

桂花さんは随分嫌な見たいですね。子供でも男は男のようです。

一刀ちゃんの場合……桂花さんのことがあまり好きじゃないみたいです。

何せこの人のせいで華琳さんが御飯食べていなかったのでからね。寝るのも床に布団だけ敷かれて寝ていますし、多分、ここに来てこんな待遇初めてじゃないですか？。

多分、今起きなかったのもわざとですよ。

華琳「では、朝の会議を……」

秋蘭「……」

一刀「……くー……くふー」

そうでもないか……

そういえば、この前リミットを明らかに突破して瞬間移動してましたからね。多分そのせいで疲労が溜まっているんじゃないかなって思います。

桂花「こ、こら、おきなさいよ」

華琳「ほおっておきなさい。秋蘭」

秋蘭「はっ、先日の盗賊と戦った地域ですが、州牧が逃げてしまつたらしく、朝廷から華琳さまに、そちらの州牧も兼任なさるように申してきました。

華琳「まあ、当然ね」

春蘭「しかし、自分が治める地を捨てて逃げるなど、外道中の外道ですな」

桂花「まったくくだわ。でもま、おかげで華琳さまの覇道のための一

歩になったのだから寧ろ感謝するべきかしら」

華琳「自分の器に過ぎた場所まで上がった未熟者に礼など言う必要はないわ。寧ろその無力のせいで民たちを苦しめたのなら、見たとたんに首をはね……」

いつもの話で急に口を挟む華琳さんの目先には…

桂花「……華琳さま？」

この人じゃなくて、

一刀「……くうー」

この子がいます。

っていうか一刀ちゃん？そろそろ起きましようね。

一刀「……ん」

華琳「そういえば一刀？」

一刀「…??」

華琳さんに呼ばれたことに気づいたのか、ちまちま目を開ける一刀ちゃん。

華琳「昨日町の人たちから陳情書が「いっぱい」届いたんだけど。昨日町に出かけていないの？」

一刀「……う（こくっ）」

桂花さんと一緒にいるようになって三日目ですからね。

桂花さんの仕事を一応優先的にしますから、一刀ちゃんは桂花さんの隣で大人しくしているぐらい何もできませんでした。

とって、一刀が町に出かけなければ決してならないというのならそんなことはないんですけどね。

華琳「そうね……桂花、今日は政務は休んでいいから、一日一刀ちゃんと出かけなさい」

桂花「か、華琳さま？どうして私がこいつの遊びに付き合わなければ、あつ！」

ちよっ！一刀ちゃん！人の脚を蹴っちゃダメですよ！

桂花「何すんのよ！」

『遊びじゃない』

桂花「は？遊びじゃないと何？あんたが町の警邏でもしてるってこと？」

華琳「まあ、見れば解るわ。桂花、この前言ったわよね。一刀が一体何者なのかって。今回のことでよく見るといいわ」

桂花「は、はあ……」

華琳「それと一刀？」

一刀「??？」

華琳「人の脚を蹴っちゃダメよ」

一刀「……」『御免なさい』

> p f <

というわけで、一刀ちゃんと桂花さん、町に出かけてみました。

桂花「どこに行くのよ」

一刀「……………」

桂花「何か言いなさいよ!」

一刀「……………」『桂花お姉ちゃん』

桂花「何よ」

『盲人と急にぶつかって「前ちゃんを見て歩け!」と言ったら酷いと思わない?』

桂花「っ、それは……………」

まあ、その通りですね。

『特にどっか行く予定はないよ。桂花お姉ちゃん行きたいところあるっ。』

桂花「あのね…私は遊びに来たんじゃないのよ」

『ボクも別に遊びに来てないよ。遊ぶかもしれないけど』

桂花「……」

何なのよ一体、って顔ですね。

あ、桂花さんはいつもそんな顔ですか。

・

・

・

??「あ、御使いお兄ちゃん!」

一刀「……(こぼっ)」

桂花「??」

少女A「御使いお兄ちゃん!」

少年B「昨日は何で来なかったんだよ」

一刀「…^^」

少年C「うん？この布は何？」

少女D「おねえちゃんだれ??」

桂花「わ、私?…え、ちょっとあんた、何してるのよ!」

少女A「この人帽子が猫っぽい!面白い!」

少女D「ほんと!」

女の子たちが桂花さんの頭巾が気に入ったみたいです。

桂花「えっ?!ちょっと、やめなさい!潰れちゃうじゃない」

少年B「ねえ、兄さん、今日は一緒に遊ぶんだよね」

一刀「…(フルフル)」

一刀ちゃんは何も言わずに微笑みながら布をさして、女の子たちに囲まれた桂花さんを指しました。

少年B「え?何?遊ばないの?」

少年C「何で縛られてるの?」

一刀「……………」

『罰』

少年たち「????」

案の定、文字が読めない男の子たちです。

少女A「あ、それ知ってる!」「ばつ」だよね!」

一刀「(びっくり)!」

少年C「すげえ、お前いつから字読めるようになった?」

少年A「へへっ、この前お兄ちゃんが買ってくれた絵本に書いて  
……あ」

一刀「……」

『内緒って言ったのに……』

少年B「ええっ!お前兄さんに本買ってもらったのかよ!」

少年C「ずるいよ!兄さん、俺も買ってよ!俺も勉強して、兄さん  
と話できるようにするから!」

一刀「……あ……(あわあわ)」

本、高いんですよねえ。

災難ですね、一刀ちゃん。

少年B「兄さん、ありがとう！」

少年C「またねえ！」

『今月のお小遣いが……』

わーい、財布が空だー。

ちなみに秋蘭さんからもらいます。

桂花「自業自得でしょ？」

『でも、今度会ってもうちよつと対話できるよつになったらそれはそれでいい』

桂花「……」

ぐー

『…私じゃないよ』

桂花「わ、私でもないわよ」

相打ちです。

そろそろお昼ですね。

でも一刀ちゃん、お金なくなりましたし、この人が払ってくれそう

にもないですし、昼ご飯は帰って食べますか？

『御飯食べに行こう』

桂花「あんたお金ないじゃない。私に払わせるつもり？」

『……ちよつとぐらいいいじゃん』

桂花「いやよ。何であんたなんかお金使わなくちゃならないのよ」

『は冗談で。大丈夫。お金なくても食べれるから』

桂花「は？」

・

・

・

ここ、ラーメン屋です。

『おじさん』

ラーメン屋おじさん「…うん？おお、御使いのぼっちゃんじゃねえか。その後ろのお姉さんは誰だい？」

『桂…荀？さん。曹操お姉ちゃんの新しい軍師』

一瞬真名で書こうとしましたね。ダメですよ、一刀ちゃん

おじさん「あつ！こ、これは失礼しました」

桂花「別にいいわ。ていうか、あんた、そこに何を書こうとしたのよ」

『……………今日は桂の葉が入ったラーメンが食べたいなって？』

そんなラーメンあるか…………

おじさん「桂はないけどよ…………どうだ？今度新作に出せようとするもんがあるんだが。試食してくれよ」

一刀「(こくっ)」

おじさん「苟？さまもいかがですか？」

桂花「仕方ないわね…………」

> p f <

おじさん「へーい、お待ち！」

桂花「……………ああ……………」

うわー。

一刀「……………」【いただきます】

一刀ちゃん、突っ込まないんですか？

ラーメンが何か上にたくさん乗せられて本体が見えないんですが。

桂花「何なのよ。これは…メンマ？」

おじさん「あいよ。メンマでありますよ！それも荆南のメンマの名人が作った超高級メンマよ！」

一刀「……（すすー）」

桂花「麺よりも多いじゃない。メンマが」

おじさん「それはこの店の特徴ですぞ」

桂花「何なのよそれは……」

一刀「……（すすー）」

桂花「あんたも何か言いなさいよ！」

一刀「……（ぱぁーっ）（キラキラ）」

桂花「?!」

あ、キラキラは効果です。

後、後光とかも……

?? 「な、何だ、あの露店！何か光ってるぞ!？」

?? 「ああ、あそこは有名だ。またあの御使いの子が来たな」

?? 「何、何？」

?? 「お父さん、私あそこで食べたい！」

わー。広告効果は抜群です。

これはお金はもらいませんね。

寧ろ広告料もらいましょう。

桂花「あ、あんた、それは何なのよ」

一刀「???(きよろっ)」

ちなみに本人は知らないようにしております。

本業、お客さんが知らないように助けることを経営モットーとして  
おります。

桂花「……」

『桂花お姉ちゃん、早く食べないと美味しくなくなるよ』

桂花「わ、解ってるわよ……しかし多すぎるのよ。このメンマの量  
は。ラーメン屋ならもっとラーメンに気にしなさいよ」

おじさん「何をおっしやるか！メンマはどんな料理にでも合う、究極の食材なのですよ」

桂花「だからってこんなにたくさん要らないでしょ！寧ろこれじゃメンマが主になってるみたいじゃない！」

おじさん「何か問題でも？」

桂花「大アリよ！」

おじさん「…そうかね、ぼっちゃん」

一刀「………？」

桂花「あんたは何なにも知らないみたいに頭傾げているのよ！」

メンマラーメンにあまりに夢中でした故に…

あ、ちなみにこの店の名前ですけど…言わなくても解りますね。

??「おっさん、あの子が食べてるのくれよ！」

??「こっちも！」

おじさん「はい、はい！しばしお待ち！」

一刀「…(すーすー)」

桂花「………」

> p f <

『美味しかったね』

桂花「…もう当分メンマは見たくもないわ」

『メンマ美味しいよ?』

桂花「美味しいとか美味しくないとかの問題じゃないわよ」

『……好き嫌いはよくないよ?』

桂花「あんた先から私のこと馬鹿にしてるでしょ」

??「万引きだ!」

一刀「!」

桂花「えっ?ちょっと、何よ!」

あ、あつちから誰か走ってきてますね。

万引き「退け、退け!」

万引きがこっちに刃物を振りながら走ってきてます。

一刀「……」

それを見た一刀ちゃんは素早く桂花さんの腰を掴まえて、

桂花「えっ？ちょっとあんたどこ触ってるのよ！」

スッ！

桂花「……えっ？」

万引き「なっ!？」

一度移動したかと思いきや、また現れたのはその直ぐ上。

そして、そこを通りすぎようとしていた地上の万引きさんと桂花さん＆一刀ちゃんはそのまま…

ドン！

桂花「キャッ！」

万引き「ぐえっ！」

あ、万引きが桂花さんのお尻に敷かれました。

桂花さん、WIN！

桂花「あいた…何なのよ……」

一刀「……(てゐ)」

一刀ちゃんはぶつかって倒れた万引きさんの手の刃物を遠く蹴りま  
した。

そして、他の腕に抱いている、店から盗んだ高そうな重箱を取り出  
しました。

店主「おお！御使いさん！ありがとうございます」

遅れて追ってきた店の人が一刀ちゃんを見て言いました。

一刀「……」

店主「本当にありがとうございます！」

『警備に連絡した？』

店主「いえ、まだ……あの人たちに言ったらもう後が遅いので  
……」

『そっか…はいつ、これ』

一刀ちゃんは重箱を店主に返してあげました。

そして、まだ万引きさんの上に乗っている桂花さんのところ振り向  
きました。

『桂花お姉ちゃん、大丈夫？』

桂花「大丈夫なわけないでしょ！何なのよ一体！」

『御免。説明してる暇がなくて…』

桂花「だからって私まで…あいたた……」

『大丈夫？』

桂花「特に悪いところはないわ。…ていうか何なのよ、それは。あんたなんでそんなことできるのよ」

一刀「何かできる」

桂花「説明になってないわよ…」

いや、無理ですから。

『おじさん、この万引き、後はお願い』

店主「あ、はい」

『桂花お姉ちゃん、立てる？』

桂花「ちょっと……って、手掴まえるんじゃないわよ」

一刀「……」

何も言わずに手だけスンと出す一刀ちゃん。

桂花「……………」

何も言わずに手を掴む桂花さん。

> p f <

そして夜です。

一刀「(すー…………すー)」

桂花「結局、ろくなこともなかったじゃない」

秋蘭「本当にそう思うのか？」

桂花「！秋蘭」

秋蘭「華琳さまのご命令だ。今日にて二人の罰を終わらせる」

桂花「あ……………」

秋蘭「…………桂花、お前、北郷を床で眠らせているのか？」

桂花「それがどうかしたの？男と一緒に部屋で寝るだけでも私は気持ち悪いのよ」

秋蘭「…損ずることをするな…お前は」

桂花「は？どういふことよ」

秋蘭「いや、何でもないさ…それより、今日の北郷はどうだったか」

桂花「別に？子供と遊んでたらお金使われて、お金ないから変な店でただで試食してもらって、後は万引き一人を私を利用して捕まっただくらいかしら」

秋蘭「そうか。…いつもどおりだな」

桂花「いつもこうなの？」

秋蘭「ああ、北郷が町に出るといつもそういう感じさ。子供たちに誘われて一緒に遊んで、店の人たちに誘われて御飯を食べて、たまに警備たちの手に収まらない悪者があつ

たら何とか自分でやつつける。北郷が町に出るだけで、町の治安が上昇して、活発化する」

桂花「…そうなの？」

秋蘭「ああ、町で誰一人でも北郷のことを知らないようにした者があつたか？」

桂花「…嫌、なかつたわね」

秋蘭「そういうことだ」

桂花「どういうことよ？」

秋蘭「北郷はそこにいるだけでも町で騒ぎの中心となっている。自分では自覚がなくても、実際、一日も北郷が町に現れないと、町の皆が一刀のことを心配して城に陳情書が山

ほど届いてくるほどだ」

桂花「そ、それほどなの？」

秋蘭「ああ、あいつの波及力はそれほどなのさ」

一刀「……………う……………??？」

秋蘭「む？北郷、起こしてしまったのか？」

一刀「……………（フルフル）」

桂花「ちょうどいいわ。あんたもう帰りなさいよ。もう華琳さまの許可も来たわけだし、私の部屋で寝る必要もないじゃない」

秋蘭「そうだな。…北郷、良かったら私の部屋で一緒に寝るか？」

一刀「……………」

『嫌、ここで寝る』

桂花「なっ！」

秋蘭「ふふっ、そうか。それは残念だったな。それじゃあ、私は戻るぞ」

桂花「ちよっと、何勝手に決めてるのよ！私が出て行きなさいと言ってるの！」

一刀「……（すー）」

桂花「ちよっと！起きなさいってばー！ー！」

拠点フェイズ2 桂花黙（後書き）

割と桂花の事好きな一乃ちゃんです。

## 四黙

「……」

タンタン

「……（こくっ）」

「一刀ちゃん、今から町に出るんですか？」

「（こくっ）」

毎日大変ですね…まあ、遊ぶだけだし別に大変なこともないですか。

「（むっ）」

あ、はい、はい、遊んでませんよ…

あ、そういえば先、春蘭さんと桂花さんが一緒にいるのを見たんですけど…何やら華琳さんと春蘭さんと秋蘭さんで視察に出るとか…

「?????」

え、聞いてないんですか？おかしいですね……

「……（むっ）」

あ、怒った。

スッ

> p f <

「うううん……」

一方、春蘭さんと桂花さんは、約束支点で華琳さんと秋蘭さんを待っている最中です。

「うううん……」

ちよっと、春蘭さん、いい加減……

「もう、いい加減大人しくしていなさい。あんたがそうろちよろしてるから、私まで不安になるじゃない」

「だけど遅いではないか。華琳さまと秋蘭は一体何でこんなに遅いのだ？」

「髪をお直しに行かれたんでしょ？いいから黙って待ってなさいよ」  
髪って、あのクルクル……ああ、そういえばそういう話もありましたね。

スッ

「（びくっ）！？」

「きゃああっ！……ちよっと！……いきなり現れないでよ！」

移動した場所がちょっと悪くて、桂花さんの前3センチというところに落ちちゃいましたので、桂花さんも一刀ちゃんもびっくりしちゃいました。

「何だ、人に黙っているって言ったくせに、お前はでっかい声出さないか」

「私のせいじゃないわよ！あんたそのいきなり出てくるのやめなさいよー！」

『どこで何してるの？』

「人の話を…」

「華琳さまを待っているのだ」

あ、スルーした。春蘭さんがスルーした。

『どうして？お出かけするの？』

「人の話を聞き…」

「今日は街を直に回ってみることにしてだな。華琳さまはちょっと髪の毛の調整で遅くなっている」

『何でボク呼ばなかったし？』

「あのね。遊びに行くわけじゃないのよ。ちゃんとした意見も出せないあなたを視察に行かせるわけがないじゃない。大体あんたはい

つも遊びに行っているでしょ?」

まあ、確かに子供を連れて行ってもしょうがないですね。寧ろ邪魔になりますし。

「……(むっ)」「確認してくる」

「「は?」」

スッ

え?ちょっと…この子どもに行きました。

まさか……

> p f <

スッ

『華琳お姉ちゃん』

「なっ!」

「???」

「なっ、北郷……」

「???」

「い、い、い……」

嫌あああああああああああ！！！！！何入ってくるのよ！出て行きなさい！」

> p f <

スッ

あ、戻ってきましたって、あれ？顔色が悪いですね。

「…どうした？」

『何かね？華琳お姉ちゃん悲鳴上げながら近くにいた花瓶や色々投げてきたの…ボク何がいけなかつた？』

「どうせいきなり部屋に入ったんでしょ？そりゃ華琳さまだって怒るわよ」

『いや、怒ったというより…ま、いいや。何か今日は変だから出直す』

あれ？帰っちゃうんですか？

【何か華琳お姉ちゃんに罵られたら、やる気失くした。帰って寝よう】

普通に街にも出かける気まで失いましたか。

タツタツタツタツ

あ、あそこから華琳さんが……珍しく走ってきてるんですが。

「はあ……はあ……一刀、まだいるわね」

「??？」

「はあ……間に合ってよかった……」

ああ、目に映ります。

クルクルじゃない髪を見られて、とりあえず無意識的に怒鳴りましたが、ふと気付けばこれって不味くない？って感じになって突っ走ってきたんですね。解ります。

「????」 『何か解らないけど、ボク邪魔そうだから今日は部屋で待って』

「いえ！付いてきてもいいわよ。いや、寧ろ付いてきなさい」

「……」

先と今と接触の差がありすぎて混乱してる一刀ちゃんでした。

いやー、あの髪がですね……。

「華琳さま、そう先に走って行かれては……と、北郷」  
暫くして秋蘭さんも来ました。

「前から言おうとしたが、そう人の部屋にスッと現れるのは良くないぞ。これからはそんなことは、せめて戸の前にして、入る時は戸を開けて入ってきてくれ」

「……（コクッ）」

何か、そういうのが生活化してましたからね。

確かに一刀ちゃんの悪いくせではありません。

「はあ……はあ……」

「華琳さま、大丈夫ですか？…あなたのせいでしょう？」

『え？何でボクのせいになるの？』

「あんたね……」

「はあ……いや、もういいわよ。それより桂花、城のことは任せたわよ。もし何かあったら、その時の判断は任せるわ」

「は、はい。そ、それより華琳さま、その髪は……」

「え？髪？……」

あ、そういえば、髪まだ直してる途中、

「嫌あああああああああああああああああああああ」

「?????!」

もうこの人わけわかんねえ……

・

・

・

「…ねえ、私の髪大丈夫かしら」

『大丈夫、大丈夫』

【モウワリトドウドモイイ】

うわ、一刀ちゃんが諦めたよ。華琳さんのこと諦めちゃったよ。

『でも、どうしてボク呼ばれなかったの?』

「呼ばなくても出掛けるから適当に会ってビックリさせようと思っただが…何故私たちが今日出掛けると解ったのだ?他の連中にも

言わないようにいっておいたのだが」

「(びくっ)……(じー)」

いや、いや、こっちは見ないでください!?

「まあ、それは良しとしましょう。それより一刀、私たちに付いてくることにしたなら、今日はきっちり働いてもらおうわよ。遊びに来たわけ行くじゃないんだからね」

『そのいつもはボクが遊びに回っているように言う言い方は凄く異議を立たせたいんだけど……解った』

今日の一刀ちゃんは何かがチガチガチしてますね。

「それじゃあ、桂花、後は任せたわよ」

「はい」

そうやって、四人は町向かうのであります。

> p f <

「随分賑やかになったものね」

一刀ちゃん、あそこに旅芸人さん居ますよ。

「(キラキラ)」

「あ、ちよつ、一刀？」

ああ、仕方ないですよ。一刀ちゃん、ここに来る旅芸人たち大好きなんですから。

歌が好きだそうですよ。

この子が言つと何か意味有りげなのがあるのですが…

「はい、それでは次の一曲、聞いていただけましょう」

「（わくわく）」

「こら、北郷、私たちは遊びに来たわけでは…」

「ほおっときなさい」

「う、しかし……」

「姉者、今は黙ってみていてくれ」

「秋蘭まで……」

この二人がこうする理由ですか？

一刀ちゃんの目がすごいキラキラしているからです。

あれが止められる馬鹿は相当居ませんよ。

「ああ、いいな」

「ええ……」

あの、二人とも？

もっところ…政治的な、君主的意見は…??

「ありがとうございます」

「それでは、次の一曲行ってみましょう？」

まあ、仕方なく、私が悪人役をしましょう。

一刀ちゃん、いい加減華琳さんたちが待ってますよ。

「…」

ふと気付いた一刀ちゃんは、おひねりを入れて、華琳さんたちのところに戻ってきました」

「あら、もう戻ってきたの？もう少し楽しんできてもいいのよ」

『…「めんざい」』

一刀ちゃん、それ皮肉じゃないです。

「ま、まあ、それじゃあ、狭い街でもないし、これから手分けして  
回ることにしてしましょ」

「では、私は華琳さまと」

「一刀は私に付いてきなさい」

「（こくっ）」

「えー……」

「諦める、姉者。我々は自分の身くらい守れるだろ？」

「あいつも自分の身くらい守れるだろ？」

それは確かに。

「仕方ない…北郷」

「???(きよとん)」

「たまに、お前のその小ささがうらやましくなる。どっしたらそっ成長しないのだ？」

「……」『参旬丸食って知ってる?』

「何だそりゃ？」

「後で調べてやってみて。縮むかもしれないから」

【市ね】

この一刀ちゃんは、今日本当に機嫌は良くないですね。

【人が気にしてるところを突くじゃない】

まあ、確かにその年頃並と比べりゃちょっと小さいですよ。

そういうタイプもあるんですよ。後でパツと成長する、

【さっちゃんはどつだったの？】

僕は…ちょうど小学校入る時から伸びましたね。

【…私の背持つて行った？】

その他の漫画のネタですから。古いですから。その作者もう他の作品書いてますから。

> p f <

ま、というわけで、華琳さんと一乃ちゃんは街の中央、秋蘭さんは左手側、春蘭さんは…もうめんどいのでいいや。

「…」

一乃ちゃんは華琳さんと仲良く手繋いで歩いています。

「……ふう」

華琳さん、仕事してください。

「はっ」

あれ？私の話聞いた？

「いけない、いけない…これだから一刀を呼ばなかったのに……」

「？」『呼んだ？』

「だから呼んでないわよ」

「……？」

【さっちゃん、今日の華琳お姉ちゃんって何かおかしくない？】

「一刀ちゃんほどではありませんけどね。」

「……？」『華琳お姉ちゃん』

「な、何かしら」

「大通りは見ないの？あっちの方先に見たほうがよくない？」

君主さんより子供のほうが真面目に見える件について。

「大通りは後でも別にいいのよ。あそこは黙っていてもあそこから話をしてくるから」

「……？」

「つまり、大通りの商人たちは力が強い分、自分たちの不便をもつと積極的にこっちに話してくるの。でもこっぴつところの人たちは、

詳しく見てないと私たちが下す命がこちらの人たちに逆効果を与える可能性もあるの」

「……」

五秒ぐらい考えた、一刀ちゃん。

『華琳お姉ちゃんは優しいね』

「なっ！」

わー、この子考えるのを諦めて上に、人を討った。

「べ、別に優しいとかじゃないわよ。人の上に立つものとして当然な考えよ」

「……」

「そ、それより一刀、あなたはこの街をいつも見てるでしょ。何か言いたいこととかある？」

「??？」『言いたいことって？』

「何でもいいわ。ここを見て思ったこと。些細なことでも行ってみたさい」

「……」

また五秒ぐらい考えた一刀ちゃん。

『あそこの料理店のおじさんね？この前お父さんになったよ』

「そ、そういうあれじゃなくてね」

『あつちの店はこの前食い逃げが捕まった暴れて店が大変なことになつてたし、あつちは、炒飯が美味しい』

「……………」

『あの店のおばさんは子供たちのお父さんが亡くなって一人で店開いてるし、こつちの店のお婆さんは、目が良く見えなくて、たまにお釣りをもらった金よりもたくさん返す時があるの』

「……………」

『あの隅の店は子供がたくさん居てね。あの辺りに行くと時々一緒に御飯食べられるし、こつちの服屋はこの前この女の子が描いた意匠で服を作ったら、子供がいるお母さんたちから大人気だったの』

すいすいですね。

街の店のこと、全部覚えていますね。

そうやって暫く話していた一刀ちゃんは、

「……………」 『役立てなかった？』

「…いいえ、そんなことないわよ。えらいわね、一刀」

「>>なでなで<<……………」 あ

褒められて顔がちょっと赤くなった一刀ちゃんは視線を華琳さんから他のところに向かおうとしました。

そしたらふと目に入るのが……

「はい、寄ってらっしゃい、見てらっしゃーい」

>ロチ<

露店を開いている女の子。…まあ、ぶっちゃけて李典さんです。

「……」 『始めて見るお店』

「露天商ね。ああいうのはいつも変わるし、地図にもないわ。ああいうのを見てみるのもいいでしょうね」

近づいてみたら、

「……」

「…?」

近く来て自分のところを見る一刀ちゃんをじっと見てみる李典さんです。

『何売ってるの?』

「えっ？」

「カゴ屋ね」

後についてきた華琳さんです。

『ねえ、ねえ、お姉ちゃん、これ何？』

でも、一刀ちゃんの目に先ず入ったのはそこじゃなく…

こっ、…なんだっけ、

「爆発する何か」これだけは絶対違うな。

名前なんだっけ。

「おお、子供が見る目が鋭いな。これ名付けて「全自動カゴ編み装置」や」

『全自動カゴ編み装置？』

ああ、確かにそういう名前でしたね。

爆発するけど。

「せや、この絡線の底に、こっ竹を細うきった材料をぐるっと一週突っ込んでやな……なあ、ちよっところっちの取っ手持って！」

「（くっ）」

「大丈夫なの？」

「大丈夫やー、多分」

多分でもない気もしますが。

にも関わらず、ぐるぐると回してみる一乃ちゃん。

「…………おお」

「な、すごいやろ？」

「底と枠の部分はどうするの？」

「あ、そこは手動です」

「…………そう。まあ便利といえば、便利ね」

『凄いな、お姉ちゃん天才？』

「嫌だなー。そんな褒められもつたら照れるやんか」

純粹で何よりです、はい。

ぐるぐる

って、それ以上それ回したら、

「ええ、ちょっと、危ない！」

「??？」

ドカーン!

あっちゃ……

「大丈夫、一刀?!」

「……」

あ、びつくりして固まっちゃいました。

「ああ、やっぱりダメやったかあ……」

「やっぱりじゃないわよ。そんなものだったら最初から子供にやらせるんじゃないわよ!」

珍しく怒っていらっしやる華琳さんです。

「一刀、大丈夫?」

「……!」

あ、気が戻った。

『ねえ、ねえ、今のもう一回やって?』

「……え?」

…なんか、気に入ったっぽいです。

「いや…。元々はこう爆発しちゃあかん装置やけどな…」

『そうなの？』

「……………ヨヨヨー」

何か泣く方違くないですか？…ま、いつか

「大丈夫、一刀？」

『うん、でも、ボクのせいで装置壊しちゃった』

「ええねん、ええねん。寧ろこっちは悪いわ」

「……………あ」「ねえ、これカゴ一つ頂戴』

「何に必要なところでもあるの？」

『そのうちにある』

「はあ……………」

「あい、まいどー」

『ありがとう、お姉ちゃん。ここにずっといるのっ…』

「いや、ずっとはな…まあ、もう何日はいるだろっけ」

『そっか、じゃあボク明日も来るね』

「え？」

『華琳お姉ちゃん、行くっ』

「ええ」

カゴを持った一乃ちゃんは、華琳さんと一緒に視察の仕事に戻っちゃいました。

『またくるっとな……』

そして、この人は何か悩んでいます。

> p f <

「…で？何で揃い揃って竹カゴなんて抱いてのかしら？」

「こ、これはその…季衣への土産にございます！」

「今朝きたら、部屋で使うカゴの底に穴ができていたことに気付きましたので……」

『お揃いだね。何か面白いね』

何がですか？

「北郷、そのカゴ、お前が持ちには大きくないか？私が持とう」

最初から言おうとしましたが、それ持つてると前良く見えませんね。

途中で部屋に戻っておいとけば良かったものを…

『あ、ありがとう』

【秋蘭お姉ちゃんのカゴ壊したのボクだけど】

…え？

じゃあ、そのカゴの使いどころって……

「ま、いいわ。お買い物のせいで時間をかけすぎて、視察の仕事に怠っていたわけではないでしょうね」

「はっ、問題ありません！」

「無論です！」

それを華琳さんが言うのもあれですがね。

僕が見る限り、この人が一番サボってました。

「そのの、若いの……」

「……誰？」

「そのの、お主……」

…あ、これは。

「占い師か？」

「占い師？華琳さまはそういうもの信じにらん。慎め」

「……春蘭、秋蘭、控えなさい」

「は？はあ……」

「強い強い相じゃのお。肴に見えない、強い相じゃ」

「一体何が見えるの？」

「兵を従え、地を尊び、その力、国に使えば国が繁栄し、豊かにできる稀代の名臣となるじゃろう……が、」

「今の国ではお主の力を収める器にならぬ。その溢れ出す野心は、国を侵し、野を侵し……いずれこの国の歴史に名を残すほどの稀代の奸雄となるだろう」

「貴様！華琳さまを愚弄する気が……っ！」

「……！！（びくっ）」

一瞬に空気が変わったことに気付いた一刀ちゃんはびっくりしましたが、前のように逃げるようにはしませんでした。

【約束したから……】

そうですね。約束しましたもんね。

「乱世の奸雄大いに結構。その程度の覚悟もないようでは、この乱れた世に覇を唱えるなどではしない。そういうことでしょう?」

「それから、その坊主」

「……??」

「!?!」

来た。

「まだ幼いというのに辛い人生を送って来たな……今まではお主の意思に関わらず不幸はお主に宿っていたが、これからはお主の意思でそれを選ぶことができるじやろう……精々、せつかくの機会をちゃんと掴めるといい」

「……」

「あなた、この子のことも解っているの?」

五秒ぐらい考えた。

「（「くっ」）『ありがとう』」

……

「華琳お姉ちゃん、行くっ」

「……ええ」

そして、四人は城へ戻ると足を運びました。

さて、僕も帰りましょ……

「そしてお主じゃが……」

……！

僕のことが見えるのですか？

どうして

「その話は良い。お主に言いたいことがある」

……???

「大局の示すまま、流れに従い、逆らわぬようにしなされ。さもな  
くば、待ち受けるのは身の破滅……くれぐれも用心なされ」

待て、その予言は……！！

「……………」

うん？

…もしもし？

「……………」

…僕が、見えない？

じゃあ、先のあれは…？

…

…

…

## 四黙（後書き）

三羽烏&魏定番のフラグ立ち場です。

萌将伝のネタがあつたので一応説明しておきます。

華琳さんは毎日そのクルクル髪をセットするために特殊の機会を使つてますが、自分が気に入る形になるまで、その髪型を人にみられることを非常に嫌います。

萌将伝では礼の機会が壊れて一日部屋から出て来なかって困ったことになるといふ話がありました（どうでもいいけど麗羽も同じく）

拠点フェイズ3 凧・真桜・紗和黙

「はいー、寄ってらっしゃい、見てらっしゃいー」

あ、李典さんです。

今日も昨日と同じところで竹のカゴを売っています。

「ああ……やっぱこんなところじゃあ、イマイチやな……二連敗は流石に避けたいんやけどな」

あ、昨日負けたんですね。誰が一番売るか。

まあ、仕方ないですよ。

確認してみました。が、楽進さんのところは何かすごいオーラが漂っていて人が寄ってきますし、

于禁さんは服屋が並んでいる街で、服を選んでる人たちに対してカゴを売っていたりして、地の利があります。

それに比べて李典さんはそれでもなんか目立っていたあの絡繰も壊れちゃいましたし、先ず負けて入ってるといってもそう間違っただけではないはずですよ。

「ああ、場所変えようかなあ。といっても無理やし。あの子、また来るって言ったしな……」

あ、ちゃんと待っていてくれるんですね。

ところで、一乃ちゃんがそろそろ街に出てくる時間ですね。

約束したのもありますし、出たところ直ちにここに来るだろうと思います……

ぐいぐい

「えん？」

「……」「こんにちは」

「うわーっ!」

こら、一般人にそれ使っちゃダメだって華琳さんに言われたでしょっ?

「い、いつからいたの？」

「……」「ちよつと前」

「ぜ、全然気付かへんかったけど」

> p f f <

『そんなことより、お姉ちゃん今日は売れた?』

「いんやー、今日はまだ一つも売れてへんや……これじゃあ、今日も負けちゃうなあー」

「……………??」

「ああ、実はなあ。ここにうちの友たち二人もカゴ売ってるんやけどな。商売ビリな人が夕飯奢りなんや」

『それは大変だね』

「ああ、昨日も負けたやから……………なあ、坊やや」

『一刀だよ』

「…あ、一刀というんか。ウチは李典や」

『李典お姉ちゃん』

「あー」

『つまり、売れて欲しいんだね?』

「まあ…せやなー」

「……………(じくじく)」

【ちっちゃな?】

あ、はい、はい、何ですか?

【じくじく、目立つっぱい何かないかな?】

ええ?そこまでして助ける理由もないでしょう?

【いいからぁー】

あぁ…はい、はい。えっと……こういう立て札でいいですか？  
周りがピカピカってしますけど。

【もうちょっとああいうのは？】

ああいうのは流石にまずいでしょ。

というか、正直一刀ちゃんがそこにいるだけでも十分目立つだと思  
いますか？

街の有名人が一つの露店でずっと立っていると、誰でも一度は振り  
向きますって。

「……………!!」

【さっちゃん頭いい】

へへえ、でしょ？

「あの…一刀や、先から壁の方みてなにしてるん？」

『もう終わった』

そして一刀ちゃんは、竹簡に大きく字を書きました。

『竹カゴ売りまーす!!!』

> p f <

「うっそやる……」

昼間がまだ過ぎない頃、露店にはもうカゴが残っていませんでした。

一刀ちゃんの宣伝力、マジパネエッス。

『これで今日は李典お姉ちゃんが一等だね』

「あ、ああ…せやな。しやし、こんなに早う終わっちまうとは思わんかったわ。何か、一刀ちゃんここで有名な子っばいしな」

『そんなことないよ。普通のそこらじゅうの子供だよ』

ふぎけんなよ、おい。

『そんなことよりね。もう売るものなくなったから、ボクと遊びに行こう』

「え？なんや。ナンパしてくれるん？」

『ふえ？』

この子、本当に単に遊びに行きたいだけです。

そういえば今日は皆城に居ませんね。

最近この辺りで盗賊たちがたくさん動いていちゃって、手に余る状態のようです。

本当に世も末ですね……

「ま、ええわ。どうせもうやることもあらへんし。途中で風たちに会ったらちーとからかってあげようかな」

「……………(にぱーっ)」

「で、どこにいくん？ウチはこの街はようしらへんし、いづいづのは男の人が先に行くんやで」

「(いっくっ)」

どじに特に行くところがあるようですな。

> p f <

「い、い、い……」

鍛冶屋ですね。

しかも、ここって城でも注文入れるほど一流の鍛冶屋ですよ。

「おお、これはすごいなあ……………」

「……………(きよるきよる)」

誰かを探しているようにきよるきよる見る一刀ちゃん。

そして、

「……………(ぴかっ)」

「うああー、ちょっと、一刀ちゃんや」

李典さんの腕を引いて中に連れて行きます。

そこにいたのは……………

「うん？おお、御使いの坊主じゃねえか」

『こんにちは』

ちよっ！その人この鍛冶屋の親の職人さん！

『このお姉ちゃん、昨日言ってた人』

「え？」

「ほおー、このお譲ちゃんがなあ……………」

「あ、あのお……………何の話やら」

「御使いさんから話は聞いた。自動にカゴを作れる絡繰を作ったよ

うじゃねえか」

「え？ああ、いや、それは…もう壊れてしもつたし」

「俺でよかつたら構造を教えってくれば少し改良できるように一手打ってあげられるがな」

「え？ちよっ、おっさん、それホンマか？」

「聞けば、竹カゴの露店を開いていたようじゃないか。完成したら凄く頼りになるものではないのか？」

「なるさあ、あれが本当に使えるもんになったらもうウチの村の人たちも苦労せへんで済むしな」

「なら、その物、どういう仕組みなのか少し聞かせてくれ？」

「ああ、でも、ええのか？そんなことしてくれて」

「なあに、あの坊主の頼みなら、もうちよっと無茶なことでも問題ない」

「……一刀ちゃんや、お前本当に何者なん？」

「……???(きよとん)」

いや、何わからないって顔を……

>ロキ<

最初からこうしようと考えていたんですか？

「（こくっ）」

面白かったから。

別にあの人が誰か知ってやったわけではないんですね。

「??？」

あの人たち、これから仲間になるんですよ。

【たちって、じゃあ、李典お姉ちゃんの友たちという人たちも？】

はい。

ああ、でも……

「????」

あ、いえ、その話はその時になったらしましょう。

「真桜！」

あ、あそこにいるのは……

「うん…?あ」

職人さんと話をしていた李典さんは後ろから聞こえる馴染みな声に振り向きました。

「昼に誘おうときてみたら……露店もサボってここで何をしているんだ？」

「な、凧！」

「??？」

ちよつと離れたところにいた一刀ちゃんは、二人が話しているところに行きました。

「真桜……村の皆が頑張ってくれたのに……お前はこつしてサボって…（ふうふう）」

「いや、ちよつ！なな凧、誤解だつてー！」

「誤解も何も……」

ぐいぐい

「っ！ー！」

「！ー！（びくっ）」

スッ

ああ、楽進さん怖い顔。

助けるつもりで突いてみたら、真桜さんの後ろに隠れてしまいました。

「なっ…今は……」

「……（ひょこ）」

「な、風、とりあえず落ち着いてウチの話聞きなっ」

「???.?」

>ロフ<

「そうか……この子のおかげで全部……」

「……」

「なあ、真桜」

「うん?」

「どうしてその子はお前の後ろに隠れて私を怖がる目で見つめてるんだ?」

「そりゃ風が怖いからじゃあらえへんの?」

「なっ!どうして私を……」

だって、最初見せた顔が気に満ちている、そりゃまあ相手が友たちでなかったら殺していたというような顔をしていたら、肝の小さい一刀ちゃんが驚きもしますよ。

「あんな、一刀ちゃん。尻がああ見えてもええ奴なんよ。だから、ほらな」

「……」

李典さんの話を聞いて、てくてくと楽進さんに近づくと一刀ちゃんです。

「……」

「あ、えーと……」

「あ、その子何か言葉はいえないっばいからそこらへんは解っておきな」

「あ、えーと、その、先は悪かった」

「……(じー)」

「……じゅう……」

「……『痛くない?』」

「えっ?」

『体、傷たくさんあるから』

あ、先ずはそこに目移りますね。

「ああ、…大丈夫だ」

「……………」 『痛そう』

「昔の傷だ。今はなんともない」

『ボクもね。こういう傷あるの』

「え？」

そう言いながら、一刀ちゃんは上着をたくしあげて、腹を見せました。

「なっ！」

「ちよっ、これって……………」

一刀ちゃんの腹には、

車にぶつかった時に手術した痕が、きつちりと残っていました。

腹を横に分ける、子供がもちには大きい傷です。

手術とかが広まってないこの時代なら驚くことでしょう。

「…おい、それ大丈夫なん？」

『もう大丈夫。昔の傷だから』

服を戻してから一刀ちゃんは言いました。

『ボクはこれしかないけど、お姉ちゃんはたくさんあるね』

「あ……………」

楽進さんは驚いて口が閉じれないようです。

「せ、せや！ 夙、昼ご飯食べに行くって言ったな。早う行かんと時間なくなるでー」

「あ、そ、そうだな」

重い話を流そうとする李典さんとそれに乗る楽進さん。

「一刀ちゃんも一緒にいくんやろ」

「(こくっ)」

「おや、もう行くのか？」

鍛冶屋の職人さんの声でした。

「ああ、おっさん、ありがとう。勉強になったでー」

「ああ、また暇があったら来い。待ってるぜー」

「ありがとう」

そうやって三人は鍛冶屋を後にしたわけですが……

「ひっ！」

「……………」

「あ……………」

「……さーわー」

サボって喫茶店で爪に手当てしていた于禁さんとばったり会っちゃいました。

『李典お姉ちゃんたちの友たち？』

「ああ、于禁っていうんやけど……ちょっと、あっちに行こうな、  
刀ちゃんは」

「?????」

「沙和ー！ー！」

「きゅー！ー！ー！」

ドッカーン！ー！ー！

まあ、そういう話もあったなあ、ってお話でした。

> p f <

「あつう……真桜ちゃん、凧ちゃんが怖いのー」

「沙和が悪いんやろ。それより、ほら、挨拶しな」

その時、初めて一刀ちゃんを見る于禁さん。

「うん？…わはー！」

そして、

「この服かわいいのー！」

うえっ！？そつち？！

「ー！ー！(くっびび)」

突然触ってくる于禁さんに驚いた一刀ちゃんでしたが、逃げることはせず。

「ねえ、ねえ、この服どこで買ったの？」

「……………」

それはとても困る質問ですがね。

「子供がそれ知ってるわけないやろ」

「ああ、そうなの……………」

「……………」

「ってというか、何で真桜ちゃん、こんな子供を連れてくるの？」

「ふふーん、聞いて驚きー。この子のおかげでなんと、ウチは持ってた竹カゴを全部売り上げたんや！」

「えー！？真桜ちゃんずるいのー。子供を利用するなんて反則なの」

「利用とは人聞きが悪いなー。ちゃんと同意を得てやったんやでー。なー、一刀ちゃん」

「（こくっ）」

「うーん…あはっ、じゃあ、真桜ちゃんは今大金持ちだから、昼ご飯は真桜ちゃんが奢るのー」

うわー、この子頭いい。

「なっ！ちよっ、それはないやろー！」

「それがいいな」

「凧までー?!」

【ねえ、さっちゃん、もしかしてボク、余計なこととして、李典おねえちゃんのこと困らせた?】

いいえ、一刀ちゃんは何も悪くないですよー。今日はよく頑張りました、えらいえらい。

「……………」

「何でこうなったしー…ヨヨヨ」

> p f <

「あー、美味しかったのー」

「せやなー、美味しいし、値段もよかったしー、一刀ちゃんのおかげで今日はええことばかりや…ウチが奢ったことを省けば」

『じめんなさい』

「こら、真桜、一刀のせいにするな」

まあ、とにかくこれでこの人たちとも面識が立ちましたね……

「……………!!」

あれ？一刀ちゃん、どうしました？

…あ。

「あら、一刀、こんなところで何をしているのかしら」

華琳さん、戻ってきましたね。

「……………（カタブルカタブル）」

「え？一刀ちゃん、どないしたん」

「この人って誰なの？」

「控えろ！このお方は陳留の州牧、曹孟徳さまだ！」

あ、春蘭さんも。

「げっ！州牧さん!?!」

「じゃ、じゃあ、ここの一番えらい人さんなのー？」

「ええ、そうよ。そして、…一刀」

「……………」

「私たちがいない間、城で桂花と一緒に大人しくしていなさいって言ったはずだよ。何故ここで、こうしているのかしら？」

「……………」

スッ

「あーあいつ、逃げやがってー！」

「まあ、後で相当のお仕置きね…そして、その三人」

「「は、はいっ」「」

「はい」

「今日一刀の世話をしてくれてありがとう。感謝するわ」

「あ、いやー、世話というか…世話はウチらの方がもっとされたわけやし……………」

「なのー」

「おかげで色々とたすけてもらいました」

「あら、そう……………ただ遊んだわけではなさそうね……………お仕置きは止  
してあげましょうか」

ふー、よかったですね。

「それじゃあ、私たちはこれで失礼するわ」

「は、はい」

そして華琳さんと春蘭さんは李典さんたちを通りすぎていきました。

「はあー、びっくりしちゃったのー」

「一刀ちゃん、ただの子じゃあらへんと思ったんやけど……」

まさか、州牧さんの息子さんやったのか」

ちよっ！すごい勘違い！

あ、まあ、今を見るとその考えも妥当ではありますが、

本人の前で言うのと速攻首を刎ねられそうな発言ですね。

ま、まあ……これ以上言うと、華琳さんの耳に入るかもしれないし、今回はこれで閉めることにしましょう。

この三人とは、またそのうち会えるでしょうしね。



拠点フェイズ3 凧・真桜・紗和黙（後書き）

全陳留のいる民たちに死亡フラグが立ちました。

### 拠点フェイズ3 華琳黙（前書き）

一乃ちゃんと寝ることには十分な注意が必要です。

一度一緒に寝てしまつとそれから周期的に一緒に寝なければ禁断症状が起きます。皆さんも気をつけましょう（笑）

拠点フェイズ3 華琳黙

最近なんかですね。

「?????」

「一刀ちゃん、華琳さんと一緒に寝る日数減ってますん？」

「……………」

あ、無視しないでくださいよ。

僕の質問に気付かない振りをしながら食卓に座る一刀ちゃん。

手に持つてるのは単なる卵かけ御飯です。

いや、だからですね。

「……………（パチッ）」

頂きますじゃなくてですね……最近秋蘭のところでも寝るし、無理矢理桂花さんのところでも寝てますし、たまに季衣さんの昼寝に付き合う時もあるんですが、華琳さんと一緒に寝るのみたことないんですが、僕。

【さっちゃん、そんなに一々確認してたんだ。変態】

はい、はい。話逸らさないでください？

華琳さんと何かあったんですか？

「……………」

……………

【何でここには納豆がないのかな】

そろそろ僕怒りますよ？

> p f <

「……………」

政務中の華琳さん。

大真面目です。

「……………」

がらり

「はっ…！」

「華琳さま」

「…あ、桂花だったの」

一瞬、戸が開けるのを見て顔が明るくなっていた華琳さんですが、相手を確認していつもの顔に戻ってきました。

「どうしたの？」

「いえ、その…政務中の華琳さまの手を煩わせるほどのことではありませんが、ちょっと、相談事がありました…」

「相談？珍しいわね。言っでごらんなさい」

桂花さんがこんな不安な顔をするのって、本当に珍しいですね。

何か恐怖に染まってる顔も少し見えますし。

「華琳さま、私が華琳さまの気に障るようなことをしたなら教えてください。もう私、我慢できません」

「…ごめん、話が見えないんだけど」

「北郷のことです。どうか、あいつを使って私にお仕置きをするのはやめてください」

「……は？」

「最初は、これも華琳さまのお仕置きだと思ったら…と思いましたけど、流石にもう限界です。週にあいつと二、三日も一緒に寝るのだったら、死んだほうがマシです」

桂花さん、何か新しいプレイに目覚めていたんですね。

「…桂花」

「はい」

「あなたの話をまとめると、何？一刀があなたの部屋に寝に行く頻度が増えた、そういうことかしら」

「それはもう増えたという話じゃないです。あいつと寝たのは、華琳さまが罰としてあいつと一緒に居させていた時だったんですよ」

「……そう」

「…あの、華琳さま？」

「何？」

「その…あいつが私の部屋に来たのは…」

「私がさせたわけではないわ。…解ったわ。一刀には私が話してみましよう。それと、そうね…私がそうさせたのだと思っ込んでいたわけね…お詫びとして、今夜はたっぷり慰めてあげるわ」

「あ、…はい／／／／／」

「………」

> 040 <

「（パチッ）」

ご馳走様。

「おや？北郷。こんなところで何をしていたのだ」

あれ？秋蘭が来ましたよ。

『お昼ごはん』

「昼ご飯って…北郷、料理ができたのか？」

『御飯と卵あったから』

「ダメだろ。もっとちゃんとしたものを食べないと」

『大丈夫だよ』

「大丈夫なわけがあるか。私が何か栄養のあるものを作ってあげるから待っている」

『ふえ？そんな悪いのに…』

「そんなふうと思うことはない。私もちよつと昼食を喰べようと思つたところだし、一緒に喰べたらいい」

「…………（じくっ）」

一刀ちゃん、大丈夫ですか？小腹でしょ？

【だからって断るわけにもいかないじゃない】

ああ、一刀ちゃんも大変ですね。

・

・

・

そして、この頃政務中の華琳さん。

「……そろそろ昼食にしようかしら」

と思いつつも、一緒に行く相手がなければ街に行って食べるのもあれですね。

「たまには自分で作るうかしら」

いや、普通なら政務の時なら侍女さんが昼食お持ちしてくれるのですけどね。

華琳さん、料理には厳しいからそこは食べないそうです。

そうやって厨房に着いた華琳さんですが、

「うん？」

案の定、中には一刀ちゃんと秋蘭さんが居ますね。

『秋蘭お姉ちゃん、料理お上手なんだね』

「美味しいか」

「（こくっ）」

「……あの二人も……」

「も」って何ですか？

「ま、私なんて華琳さまに比べたらまだまだただけだな」

「??」『華琳お姉ちゃんも料理できるの?』

「うむ？見たことないのか？」

「（こくっ）」

「それはおかしいな。私はてっきり、もう華琳さまが北郷に料理を  
食べさせたことがあるだろうと思ったんだがな」

「……」

【やっぱり】

そしてあなたさんはまた何が「やっぱり」ですか？

>P<

で、何ですか？

「……」

【食べ過ぎて眠い】

ちげえよ！

何で華琳さんと仲が悪くなったのかそれ聞いてるのですよ。

「……」

【ボクね、気付いたの】

気付いたって、何をですか？

「……」

【華琳お姉ちゃんってさ、女好きなんだよね】

……あ。

…あ、いや、こつこつ時は逆に強気に…

…で？

【ボク男の子だよね】

それが今更あなたが華琳さんの部屋に潜り込まない理由になるとは  
思いませんが。

しかもそれ許したの華琳さんですよ？

あの時一刀ちゃんすごく怒られたと覚えてますが（拠点 フェイス  
1 華琳黙参照）

【あれは、ボクが罵られていたからで…今は華琳お姉ちゃん以外で  
も秋蘭お姉ちゃんとかもいるし、それに、この前桂花お姉ちゃんが  
言ってた。華琳お姉ちゃんって、実は男は部屋に入ることすら許さな  
いそうだし】

そうか、桂花さん、あなたですか。

あなたが一刀ちゃんに変なことを言ったんですね？

おかげで一刀ちゃんが要らん気遣いを……

【でも実際、ボク自分が華琳お姉ちゃんのところに行ったことはあるけど、華琳お姉ちゃんから誘われたことなんてないよ。春蘭お姉ちゃんや秋蘭お姉ちゃんは時々誘われるの見たもん】

ああ、それは…誘う意味が違うんですがね。

「…??？」

一応聞きますけど、一刀ちゃん。

春蘭、秋蘭さんたちが華琳さんに誘われて何するか知ってますか？

【何って、寝るんですよ、一緒に?】

他には？

「……………?」

まあ、ですよね…

> p f <

ところでちょっと華琳さんのところに戻ってきてみました。

先厨房でそのまま部屋に戻ってしまった華琳さんですが……

「……」

何かイライラしています。

一刀ちゃんの今日の行動を纏めるとつまり、華琳さんは実は男嫌いだから、自分のこともあまり好きじゃないけど、何となく側に置いている状態という…

その何となくが説明できないんですけどね。

というか、本当に華琳さんが一刀ちゃんのことを実は好きじゃないというところ…

「……（ぶるぶる）」

この、禁断症状とまでいえる華琳さんの状態はどう説明しましょうか。

一刀ちゃんの言うとおりだと、ここ半月間、華琳さんと一刀ちゃんは話もほぼ交わってないんですが…

そろそろ一刀分足りなくませんか、この人。

ガタン

と、思ったら華琳さん、立ち上がりました。

どこに行くのかは知っていますが、何をするんでしょうか。

•

•

•

がらう

「(びく)」

「……？」

『か、華琳お姉ちゃん、どうしたの？』

「どうしたの…？どうしたのですって…？」

「??…う！」

あ、ほっぺ抓った。

「川の…川の…」

「いあい…いうああ」

両手で一刀ちゃんのほっぺを摘まんであっちこっち伸ばせる華琳さん。

これ、何？新しい苛めですか？

「……………」

「あなた、最近私のこと無視したよね……………いい度胸じゃない」

「……………うえ？」

「いつまでやっているかと思えば、私はほっというて桂花と秋蘭とばかり構っているようだし、あなたを拾ってきたのが誰なのかも一度確実にしてあげようかしら」

「……………」

あ、…：灯り消しましょうか？

> p f <

夕方

「華琳さまー！…どちらへいらっしやいますかー！！」

「どうした、桂花？」

「秋蘭！華琳さまどこにいるか知らない？」

「華琳さま？いや、今日は見ていないが……………」

「一体どこに……はっ！もしかしてあいつの部屋に……」

「……いや、それはないだろう。一刀は今は私の部屋で寝ているんだが」

「……そうなの？なら一体どちらへ……」

「そう慌てることはない。城から出掛けたはずもないし、そのうち見つかるぞ」

「……」

因果応報ですよ、桂花さん。

というか、こんな場面、前にもいませんでした？

・

・

・

華琳「……つふふん」

一刀「……」

ちなみに一刀ちゃんというと、動けないように縛られて、華琳さんに抱かれて一緒に寝ています。

羨ましいのか、哀れなのか……

まあ、こっちも因果応報ということ……

華琳「……(ぎゅっ)」

一刀「……う」

しかし、この華琳さんは少しヤバいですね。

一刀ちゃん、これからはちゃんと相手してくださいね。さもないともっと酷いことになりますから。

【ねえ、さっちゃん。これちょっと解いて

はい？

……いや、うん……

華琳さんは寝てるようですし

バレても知れませんかよ。

スッ

一刀「……(ぎゅっ)」

華琳「……っ……んん……」

おやおや、溜まっていたのは華琳さんだけじゃなかったようで……

まあ、

僕は桂花さんや春蘭さんがこっちに来ないか監視でもしましょう。

華琳「一刀」………すー………すー」

あ、ちなみに後で変なこと言った桂花さんはお仕置きされました。

めでたし、めでたし。

拠点フェイズ3 季衣黙（闇）（前書き）

ここで闇というのは、闇に落とした話。つまり没ネタです。没にした理由はネタが面白くなかったとかそういうのではなく、ただ一刀ちゃんが必要以上に苦しまれるような状況が起きると、T I N A M Iではすぐぶる石を投げられましたので没にしたものです。ここじゃ闇編はあげないつもりだったのですが、季衣の拠点が見た目という要望があったためあげるものです。石は締め切りました。

拠点フェイズ3 季衣黙(闇)

『季衣お姉ちゃんはたくさん食べるね』

「にゃ？」

朝、城を歩いていたら側にお団子をたくさん置いて食べている季衣さんに出会いました。

「あ、一刀ちゃん。一刀ちゃんも食べる？」

「(こくっ)」

頷いて季衣さんの側に座って団子を一つもらいます。

パクッ

「……………」

一つパクッと食べた一刀ちゃんは、すごく美味しかったようで、顔が赤くなって緩みました。

「ね？おいしいでしょう？」

「(こくっこくっ)」

「街で一番美味しいところなんだよ」

バクッバクッ

と言いながら、団子を口に入れる季衣さんの食べ速度は尋常じゃありません。

一度食べ始めたら一体そのその喉はどの次元と繋がっているんですかと聞きたくなるぐらい凄まじいスピードで皿の団子がいなくなっ  
て行きます。

「……………」

一刀ちゃんは口ぼかんとあけてそれを見えています。

ほら、一刀ちゃんも食べないと全部なくなりますよ？

「……………」

まあ、元からそこまで食べることに食欲がないことは解っているんですけどね。

「にゃ？一刀ちゃん食べないの？」

「……………」『一つだけでいい』

「ええ、ダメだよ。一刀ちゃんはもっとちゃんと食べないと。ちゃんと食べないと成長しないって、春蘭さまも言ってたもん」

「……………」

「にゃ？」

「刀ちゃん、言いたいことはわかりますが、口にはしないでください。」

> P f <

【季衣お姉ちゃんってよくそんなに食べても太らないよね】  
それを言わないでくださいよ。

ええと、やっぱり運動量が違うからじゃないですか？

ほら、季衣さんの武器とかアレですし。

自分よりも重そうな球を投げまくるじゃないですか。

そりゃたくさん食べますよ。

「……………」

その一方、季衣さんは……………」

「春蘭さま」

「うん？どつした、季衣」

「一刀ちゃんって元からそんなに食べないんですか？」

「うん？んまあ、私が良く解らないけど、秋蘭の話に聞くと、随分食べる量が少ない量だな。炒飯一人分作ってくれるそれも全部食べきれないというからな」

「ええ！？」

その炒飯一人分と言うのは、さて二人の基準の一人分なわけでは…  
ないんですよね？

「ま、あいつがわざとお腹を空かせておく理由もないし、食べる量というのは人なりに違うのだ。季衣も小柄なのにたくさん食べるだ  
る？」

「うん……」

> p f <

ここ戻ってきて一刀ちゃん。

【でもやっぱり大食いって良くない？】

それは現代の発想ですよ。

現代じゃ体を動かすことってあまりないですけど、

この時代だと常にいつ戦いがあるか知りませんし、それに季衣さんはその年で將軍じゃないですか？

現代人とは運動量が違うのですよ。

【でもほら、季衣お姉ちゃんの食べる量が普通じゃないというのは確かでしょう？この前聞いたらあの時初めて季衣お姉ちゃんが盗賊討伐に行った華琳お姉ちゃんたちにお部隊に入った時、すっごい食べて、そのせいで皆御飯食べてなかったと言っ話もあつたし】

まあ、それは確かにそんなこともありましたが…って、その話誰から聞きました？

【桂花お姉ちゃんから？】

あの猫耳はいつも必要ないことはペラペラ吐き出すんですね。

とにかく、そのことは一刀ちゃんが心配することではありませんよ。別に季衣さんが太ったとかそういう話でもありませんし、体に異常があるという話でもないですから。

「一刀ちゃん！一緒に街に御飯食べに行こう！」

「??？」

ふと一刀ちゃんが振り向けばそこには季衣さんが居ます。

「……?」 『あれ?季衣お姉ちゃん先団子食べたでしょ?』

「じゃ?お団子はお団子だよ。お菓子だし、御飯にはならないよ」

「……………」

まあ、確かにちょっと異常かもしれませんが。

『行く』

> p f <

『どっちに行くの?』

「ここに美味しい料理店あるんだ」

「……………」

一刀ちゃん以外と一人で食べると食べるのがしょぼいですから、料理店とかは一人だとあまり入りません。

露店で肉まんか、それともラーメン食べるほどですね。

料理店はあまり入ったことはありません。

・・・

・

・

「おじさん、ここ炒飯大盛二つと、麻婆豆腐と麻婆茄子、」

ちよっ!?

「!」『多すぎない?』

「大丈夫だよ。金はあるから」

『そういう問題じゃないけど…いや、それも確かに問題だけど』

あの料理の量は…確かにさっちゃんも漢字で知ってる中華料理は全部出たのだと思います。っていうかアレで全部ですね。

・

・

・

しばらくしたら料理が一気に到着しました。

「……………うあ……………」

この中華の並べは、この世界に始めてきた時に華琳さんに買ってもらった時のような中華セットですね。

そういえばあの時もそれほど食べてませんでしたけど…

「ほら、食べて、食べて」

季衣さんが料理勧めてますよ。

【これ、多すぎるよ?】

量に圧倒されず、先ずは食べてください。

季衣さんがそのうち食べますよ。

「…(こくっ)」

僕に頷いて一刀ちゃんは蓮華を持ちあげました。

>ロキ<

「……」

って、ちよっ……あぁ…

「(ちらっ)……」

「……」

馬鹿な。

季衣さんが料理を目の前にしてみてるだけだと!?

「もつと食べる?」

「……………」

そして勧められたら流石に断ることが厳しい一乃ちゃんです。

「……………(あわあわ)」

『季衣お姉ちゃんは食べないの?』

「私はいいよ。先お団子食べたから」

「……………」

【先と話が違うー(涙)】

そうですね。

嵌っちゃいましたね。

【どういふこと?】

ほら、季衣さんから見ると一乃ちゃん、食べるなとすぎなんですよ。だからこつとして食べさせようとしてるんですよ。

ある意味的確な策ですね。

こうしたら流石に断れにくいですし。

【ボクこんなに沢山食べるとお腹はちきれちゃうよ】

まあ、それも確かに。

大人何人食べる量ですね。

季衣さんが見るとそれほどのお量でもないでしょうけど。

「……う……」

食べられなかったら言った方がいいですよ。

【でも……ほら、あれ】

え？

「……………(ににににに)」

【何あれ？反則じゃない？ああにににに見てる顔にもうお腹一杯で食べられないとか言ってみて】

わー、あの顔は何ですか？

まるで食べるのを見てるだけでもお腹一杯とでも言いたそうな顔。

自分が作ったのでもなくせに。

「……」

【食べるしかないの？】

まあ、僕としてはいい考えが思いつきませんね。

僕も食べるのを手伝ってあげたいですけど、無理ですし。

何とか一人でやってください。

【鬼い〜！】

いやー、断れないって大変ですよね。

> p f <

「……う……」

「はあ… 一体どれだけ食べたのよ」

結局良く頑張つてその昼を全部食べた一乃ちゃんですが、

案の定お腹を壊してしまいましたして部屋でうんうん唸っているのを秋蘭さんが発見。

華琳さんは知らないようにしようとしたんですが、途中で医員が城から出るのを見た華琳さんに医員さんが吐いて発覚。

「あなたはもうちょっと断りというものを知りなさい。言うだけ全部聞いて良いものじゃないのよ」

「……………」

言う口がない一刀ちゃんです。

あ、一刀ちゃんの場合、書く手がない、ですね。

「でも、季衣はどうして一刀にあんなに食べさせたの？」

「多分、一刀が普段食べるのが貧弱なのだと思いますのでしょ」

「まあ、実際そうなんだけどね。さすがに季衣が食べる分は無理だけど、季衣まで心配するぐらいだと、少しはちゃんと食べたほうがいいよ、一刀も」

え？

あ、ちなみに普段に一刀ちゃんの献立ですけど。

朝：元から食べない。水。

昼：ラーメンやしゅうまいや肉まん。時々街の人に桃とかもらった  
らそれで済ませる。

夕：城でくれる御飯（それも余す）

うん、ダメだこりゃ。

もっと一刀ちゃんの食生活に気を使わなかった僕のせいです。

「とにかく、大人しく寝てなさい。まあ、その様子だと動く力もないでしょうけど」

そして、華琳さんは秋蘭さんと一緒に部屋を出ようとなりました。

「……………ああ……………」

「……………解ってるわよ。季衣には何も言わないから」

「……………」

それを聞いた一刀ちゃんは静かになりました。

> p f <

後日談

「はあ……………あの子は何故あんなところには要領がないのかしら」

「まだ人の接し方が苦手なのでしょう……………あれでも季衣の場合は、最初から怖がることもなく仲良くした場合ですから」

「それはそうだけれど……………はあ、どうすればいいのかしらね」

「それはそうですが、華琳さまはどうして北郷がお腹を壊したこと

が解ったのですか？」

「……政務をしていたら春蘭が来たのよ」

「姉者が？」

「季衣がお腹を掴んで倒れていたらしくてね」

「……………」

「なんとも胃に穴ができたそうよ」

「それは……なんと……まだ北郷の方がマジなのは」

「……二人とも自業自得でしょう」

・

・

・

拠点フェイズ3 季衣黙（闇）（後書き）

没ネタの没ネタ

【こ、こうなったら一か八かで…】

スッ

「うん？」

一刀ちゃんは炒飯を救った蓮華を季衣さんの方へ指しました。

「うえ？いや、一刀ちゃんが食べなよ」

「……………」

蓮華をもっと季衣さんの方に近づけて固定。

「…う……………あぁー」

パクッ

仕方なく食べる季衣さん。そして、

「美味しいー（キラキラ）」

あれは私がかけた効果じゃありません。本当に。

『もつと食べるっ。』

「うん！」

そして、本来の目的を忘れて一刀ちゃんがあげる炒飯、続いて麻婆も全部食べてしまった季衣さん。

これで誰も苦しまずに済みました、めでたし、めでたし。

没になった理由：なんかおいしくなかった。

拠点フェイズ3 秋蘭黙

「北郷？いるか？」

がらり

久しぶりに一人で寝てた一刀ちゃんを呼びに秋蘭さんが部屋に訪れましたが、

「…いないのか？」

はい、いません。

今日は何故か朝から早起きして街に出ました。

「む？」

帰ろうかと思つた秋蘭さんの目に入るものがありました。

それは、前にはなかった部屋の隅っこにある、この前街で買った竹のカゴです。

それだけだと別に目が行かなかったでしょうけど、問題はカゴの中に入っている物でした。

鞆です。

この前僕が一刀ちゃんの世界から持ってきたものです。

入ってるのは大した物はありません。教科書とノートと筆箱と……

「これは……」

あ、その手に触れてはいけないものは一刀ちゃんが五才の時にお父さんとお母さんと一緒に遊園地で取った写真です。

僕、手に触れてはいけないものっていいました？

「……………」

秋蘭さんがその写真から目を放せず何分か過ぎました。

がらり

「あっ」

> p f <

「……………」

「ほ、北郷、どこに行ってたんだ？」

「……………」

一刀ちゃんは胸に紙の封筒を抱いていました。

中身は…お菓子ですか？

「……………」

「そ、そうか。そういえば、昨日お茶会をすると、北郷にも言っただな」

「……（こくっ）」

「一刀ちゃんは持っていた紙封筒を秋蘭にあげようと思いました。」

「いや、そ、それは後で北郷が持ってきてくれないか」

「???.……（こくっ）」

「あ、それじゃあ、私はこれで……」

そう言って秋蘭さんは一刀ちゃんに背中が見えないようにして部屋を出て行きました。

「……???」

【さっちゃん、秋蘭お姉ちゃんどうしたの?】

さ、さあ……なんだったんでしょうね……

「……?」

・

・

「…はあ…」

一方、秋蘭さんが背中に隠していた手には、

戻しきれなかった一刀ちゃんの写真が持たれてありました。

> p f <

一刀ちゃん朝から出て行くと思ったたらお菓子買いに行ってたんですか？

「（こくっ）」「（こくっ）【作る量が限られてる限定品で、朝から並べないと買えない】

何のために？

【昼に華琳お姉ちゃんたちとお茶会】

あれ、招待されたんですか？

「（こくっ）」「（こくっ）【というかお菓子調達係り】

まあ、そりゃ一刀ちゃんが街の隅々まで良く知っているからでしょ？

【そうなんだけどね…】「……………」

どうしたんですか？じっと持ってきたお菓子の封筒見て、

【こっそり一つ食べてもバレないかな】

えー……ダメですよ。

【やっぱり?】

仕方ないと思いながら、一刀ちゃんは竹のカゴの直ぐ側にある棚にお菓子の封筒を置きました。

「……………」

【あれ?ボクってこれここに置いたっけ?】

> p f <

「……………はあ、つい持ってきてしまったが、これを一体どうすれば…」

一方、部屋で頭を抱いて唸っている秋蘭さんの姿がありました。

「素直に言ってしまったら北郷が私のことをなにか思うか解らないし、だからって間をとって北郷あの中にこれがないことを知ったら……………」

写真だけ見たらそれが一刀ちゃんのお父さんお母さんなのかどうなのか解らないのですが、その写真の裏には、昔一刀ちゃんが【お父さんとお母さんとの最後の思い出】と大きく書いてあるのです。

一刀ちゃんの文字には、こっちの世界の人たちでも見えるように工

夫をしています故、秋蘭さんがそれがどういうものかわかるということですよ。

それに、一乃ちゃんのことについて終始を大体解っている秋蘭さんだからこそ、これは焦らずにはいられない状況だったのです。

がらり

「む？秋蘭、こんなところで何をしているのだ」

「あ、姉者」

そうしていたら、春蘭さんが秋蘭さんを探しに来たようです。

「早く準備しないと、お茶会に間に合わなくなってしまうぞ。お菓子をかうと買った北郷はどうしたのだ？」

「ああ、今北郷が持っているはずだ」

「なら、私が行こう。お前は他の支度を……」

「……いや、姉者が行くとまた騒がしくなるかもしれない。北郷のところは私が行こう」

「む、そうか……じゃあ、場所は前決めたところでいいよな」

「ああ」

> 〇 f f <

一刀ちゃんの部屋に行くところで、秋蘭さんはどうすれば一刀ちゃんにこの事をばれずスムーズにこの写真を元のところに戻せるか考えていました。

「……………」

ふと考えが行き過ぎて、足が止まっていたところで、

桂花さんがこっちに來ます。

「こんなところで何ぼおっとしているの？」

「…あつ、桂花。ちょうど良かった」

「何？私、今日はちょっと急がしいのだけれど。…おかげで華琳さまとのお茶会にも参加できないなんてえと思ったらさらに不機嫌になるから……………」

「ちょっと相談事があるんだが」

「相談？」

「実は……………」

そして桂花さんに終始を全部話す秋蘭さんです。

•••

••

「…素直に謝れば？春蘭や私ならともかく、あなたならそれほどあいつが怒ったりはしないでしょうよ」

知恵を借りようとしたつもりが、まさか軍師さんからこんな正攻法な話が出てくるとは思いませんでした。

「やはりそれしかないのか？」

「それとも、一緒にいるところであいつが他のところを見てる間、そのカゴを見るふりをして初めてその中から出したようにする手もあるけど」

「うむ……そんな手もあるな」

「ま、どっちにせよもうバレているのだったら終わりって話だけだね」

「そうだな…止まらせて済まん。じゃあ、私はこれで」

「早く行きなさい。あなたを見てると仕事をしなきゃいけない私が惨めに思えるから」

「わるい、それでは…」

いつもなら笑いで返す秋蘭さんですが、そのような余裕はなさそうです。

「ほんじ……!」

部屋の戸を開けた瞬間秋蘭さんは硬直しました。

部屋の中はバラバラでした。

寝台の布団も床に落ちていて、棚は倒れていて、真ん中には棚にあった花瓶の水を浴びて正座になって座っている一刀ちゃんがいました。

「ほん、じじい?」

「……………」

背中を見せていた一刀ちゃんの顔を見るため前に回ろうとした秋蘭さんでしたが、

『戸閉めて、入って来ないで!』

「あ」

「……………」

いつもは達筆な一刀ちゃんが、今度の文字だけはすごく荒く書いてあって、一刀ちゃんの今の感情が良く解りました。

後ろを向かずに一刀ちゃんは次の文を書きました。

「……………」『お菓子、食べられなくなっちゃったし……………ボクは部屋片付けるからお姉ちゃんも街に行って他のお菓子で買い直してくれない？』

「……………大丈夫か、北郷？」

『大丈夫、水浴びたけど……………ここに来てこんな精神的衝撃くらったの初めてだけど、大丈夫』

それは大丈夫じゃないと言いたいですね。

『いいから早く戸閉めて』

「北郷……………私は……………わざとではなくてな」

『どつでもいいから!!』

「!!」

秋蘭さんは、そのまま戸を閉じてしまいました。

> P P <

「……………すまん……………北郷……………」

> P P <

「……………（ブルブル）」

「一刀ちゃん……………」

【先の見た！？】

ええ、見ました。デッカイGでした！！僕心臓麻痺くるかと思いましたがよ！

【ボク飛ぶの初めて見た】

僕だって初めてですよ！

何ですかあれ？やっぱり中国だからですか？中国だからなんでもかんでもデッカイんですか？

【知らないよ。とにかく、先秋蘭お姉ちゃんが戸開いてる間に出て行かなかったね？】

はい、多分…むしろ出て行ってほしかったです。

【そうだと秋蘭お姉ちゃん驚いて気絶しちゃうよ。ボクも驚いて棚

にぶつかってお菓子こっぴなっちゃったし、大惨事だよ】

ええ……まあ、他のところも大惨事ですけどね。

【何の話？解らないけど、今は早くあのゴキブ…】

言わないでください!？

・  
・

・

・

## 五黙

「……」

荒野が見える絶壁の上で、

「刀ちゃんはいつものように黙々と、下を見ていました。」

その下には……

「押せ！押せ！押し切れえい！」

「春蘭さま！敵、撤退していきます！」

「なに、もうか？」

「はい。見ての通りです」

「ちっ、益体もない」

「追撃はどうしましょう」

「そうだな。必要とも思えんが……まあ、良い。隊列を整えた後、  
応出しておけ、ゆっくりでいいぞ」

「はいっ……」



「ああ、秋蘭。どうだった？」

「桂花の言うとおりで。これを……」

「やはり黄色い布か」

まあ、確かにそうかも知れませんがね。

黄巾党が発生し始め、

最近皆さん、ちゃんと休む暇もなくああして騒ぎを起こす若い群れを蹴散らすために東奔西走していますから。

最近城に全員が集まっているのを見たことがないほどです。

【ねえ、さっちゃん、ボクずっと考えたんだけどね】

はい

【華琳お姉ちゃんは、ボクのことを必要だと言ってた。こんな戦が続く日々で、皆、我を失って有らされていくつて。そんなとき、ボクがいてくれたら、そうならずにいられるつて】

でも、解らないんですね。自分がどうすればいいのか。

「……………（じくっ）」

笑ってあげたらいいと思いますよ。子供ですから。…子供じゃなくても人の笑顔が嫌いだという人はありませんよ。人が幸せだと、側の人にも幸せになれますよ、きっと。

「……………」【そうなの?】

少なくとも、子供の笑顔にいらつとする人はいませんよ?

【桂花お姉ちゃんはボクが笑うといつも馬鹿にしているの?って怒るけどね】

あはは……………

「……………」【帰ろう】

はい。

スッ

> p f <

スッ

「一刀?」

「(びくっ)!!?」

「はあ……まったく」

ああ……

部屋に戻ってきていれば華琳さんがベットの上で足を組んで座って、  
一刀ちゃんのことをお待ちしておりました。

「……………」

まあ、いつかはこんな日も来るだろうと思ってはいましたけどね。

「どこに行ってきたのはちゃんと説明してくれるかしら？」

「……………」

一刀ちゃん、華琳さんがこう出る時は、全部知っていながら聞いているんですから嘘とか言っちゃダメですよ？」

『……お散歩』

「どこへ・お散歩に・行ってきたのかしら」

「……………」

一刀ちゃんは何も言わずに華琳さんの手を掴まえました。

「……何？」

「……………」『最近、皆城にちゃんといないから』

「……」

『お姉ちゃんたちの体の心配とか、そういう問題以前に、ボクが寂しい』

「一刀……」

『だから……見ていた。危ないことは、しないから、見るのもダメとか言わないで』

長々と続くこの頻繁な出立によって、疲れているのは華琳さんたちだけではないのです。

一刀ちゃんだって、いつも皆と一緒にいたい。

だけどそれは無理だと言うことを承知している上でも、

今の状況はあまりにも酷いものでした。

一緒に行きたいといっても危ないからって許されないから、せめて遠くから見ている。

それが、今までの一刀ちゃんが取った行動なのですが……

「……」(フルフル)「『ううん、ごめん』」

「え？」

『もうしない。だから……』

そう言いながら、一刀ちゃんは掴んでいた華琳さんの手を放そうとしましたが、

「！」

放した手を、逆に華琳さんの方から握られてしまいました。

「…そうね」

そして、その手を引っ張って一刀ちゃんは自分の元に来るようにした華琳さんは一刀ちゃんを軽く抱きしめてくれました。

「…あ……」

「あなたがあまり優しくくていい子だから、時々忘れてしまうわ。あなたがまだ子供だということも、あなたがどんな子だったのかもね……」

「……」

「ごめんね、寂しい思いさせてしまって」

「……う……」

一刀ちゃんは何も言えない口からただ漏れる言葉と共に、華琳さんの方でもっとくっつくのでした。

「あの、ボク、本当に休んじやっても大丈夫なのですか？」

「ええ、寧ろ季衣の場合、最近働きすぎて強引にでも休ませたいくらいだわ。あまり無茶をしないといざとなった時こっちの方が困ってしまうわよ」

「……ボクそんなに無理していません」

「…あの子が最近皆のことを心配しているわ」

「北郷がですか？」

秋蘭さんが華琳さんの言葉を受けました。

「ええ、最近、皆ちゃんとして休んでいる時がないから、あの子も心配しているのよ」

「ふん、あのような子供に心配されるようなものでもありません」

春蘭さんがなんともないように言いますが、

「そう、それでもあの子は皆のことを心配しているわ。だから、ぐれぐれも無理はしないようにね」

「はっ」

「御意」

・

・

・

一方城壁の上。

今日は何だか上機嫌ですね、一刀ちゃん。

「……ん……ん……うん」

何か、鼻歌とか歌っていますし、何かいいことでもあったのですか？

「……（フルフル）」

何も無いのにそういう顔なのですか？

「……？」

いや、キョトンとしましても聞いたこっちが困るんですけど……いや、もう何でもありません。

「……（てへっ）」【実は今日、季衣お姉ちゃんを休ませるって華琳お姉ちゃんが言ったの。一緒に街にでも出掛けようかなあと思っ【て】

あ、そうですね…って、僕をからかいましたね？

「……………(にじつ)」

まったくもう……

「……………うん…ん…うん…ふうん」

・

・

・

「ふう……………」

あ、一刀ちゃん、季衣さんが来ましたよ。

「……………?」

「…はあ」

何か、元気がないみたいですね。

「……………」

どうでしょう。街行くの、やめますか？

「……………」

> p f <

「……………」

暫く季衣さんが来るのを見ていた一刀ちゃんは、

「…うん…んん…ふうん」

季衣さんを見てないふりをして、また城壁で鼻歌を歌い始めました。

「……………うん？一刀ちゃん」

「…うん…ふん」

季衣さんが呼んでも、一刀ちゃんは城壁の上に座って足で宙を蹴りながら鼻歌を歌っていました。

「こんなところで何してるの？」

「……………」

そしたら、一刀ちゃんは季衣さんの方を振り向いて、

『待ってる』

「待ってるって何を……………？」

その時、風が吹いてきました。

一乃ちゃんは風が吹く方に顔を向きました。

「……………」

風を浴びた一乃ちゃんは季衣さんの方を振り向きました。

『機嫌を直したい時は、高いところに行って風を浴びるの。そして、風が苦しい事も、寂しい事も全部持っていてくれるの』

「……………」

『何かあった？』

「あ……………いや、その、一乃ちゃんが心配することじゃないよ」

『誰かに話すときつと楽になるよ。口を飾りにしない方がいいよ』

その発言、一乃ちゃんが言ったら凄く痛いですね。

「……………実は、ボクも今日出立したかったのに、華琳さまに休みなさいって言われちゃって」

『……………休み、ヤなの？』

「いやとかじゃなくて……………ボクの村が盗賊たちに苦しんでいた時みたいに、他の村の人たちも苦しんでいるかと思ったら、こうしていいたくないのに、華琳さまも春蘭さまも、休みなさいっていうから……………」

……………」

「……」

それを聞いた一刀ちゃんは、突然手をあげて季衣さんの頭を撫でました。

城壁に座っていたら、丁度高さが合います。

「うん？>>なでなで<<……なんだよ、もう…一刀ちゃんにまで子供扱いされたくないよ」

「…(てへ)」『ごめん。季衣お姉ちゃん、優しいなって』

「優しいって？」

『自分の事よりも人のことを考えて行動するとか、ボクにはできないから』

嘘おっしやい…

いつも人の事しか考えないから皆呆れさせるのは誰ですか？

『でも、自分自身の世話もできないまま人を助けようとするのは、それはただの馬鹿だよ。誰も褒めてくれないよ、そういうの』

「一刀ちゃん…」

『休んで、休んでからもつと元気出したら、今日自分の手ですくえなかった分まで明日助けてあげたらいい。今日の分は、秋蘭お姉ちゃんや秋蘭お姉ちゃんたちが上げてあげるから』

「……………うん」

『……………(にこっ)』

「…なんか、一乃ちゃんにそんなこと言われたら、私の方が妹分みたいじゃない」

優しい笑顔になる一乃ちゃんを見て、季衣さんは何だか不満そうに口を尖らせました。

『ボクは別に季衣お姉ちゃんの身体のことなんて気にしないんだからね。ただ、今日季衣お姉ちゃんが休んだら、ボクと遊んでくれるかなあって』

あ、それツンデレですか？

……………あれ？デレしなくなっけ？

まいつか。

> p f <

「うん……………ふうん……………うん……………」

街に手を繋いで出てきてからも、一乃ちゃんはずっと鼻歌を歌っていました。

「あ、何、その鼻歌？どこかで聞いた覚えがあるような気がするんだけど」

季衣さんが何だか興味を持ったようです。

「この前この街にいた芸能人のお姉ちゃんたちが歌ってた歌。ボク、歌詞は言えないから鼻歌だけだけど」

「うーん…ボクも聞いたことあるな。確か……」飾りじゃあないのよ、あたしたち…そういうあれだったっけ」

「（こくっ）」『歌上手だった。名前、なんだっけ…』

「確かに名前は張角……」

その時、季衣さんは足を止めて、

「??？」

そして、

「あああああああああああああああああああああ……！！！！！！」

「（びくっ）！？」

「ねえ、一刀ちゃん！ごめん、ボク、ちょっと華琳さまのところに  
行ってくる」

「!?!? !?!?」

何か重要なことを思い出したようです。急いでるみたいだし。

一刀ちゃん。

【え？ん……でも、季衣お姉ちゃんはちょっと危ないかも…あ、もう知らない】

ぐいっ

一刀ちゃんは走っていきこうとする季衣さんの服を掴みました。あまり掴むところもないんですけど、季衣さんの服。

「ああ、一刀ちゃん、今はちょっと…」

ぐっ

【あ】

え？

スッ

・

・

・

場所を変えて、ここは華琳さんの部屋です。

「……………」

スッ

あれ？現れる場所が何故か華琳さんの頭の上……

「……………いそいでぐわっ！」

「なぶぐあっっ！」

「！！」

ガダダタン！！

あっちゃあ……………

突然襲つて（？）きた季衣さんと一乃ちゃんによって、椅子に座っていた華琳さんは後ろに倒れました。

…って、華琳さん、今「なぶぐわっ！」って叫びませんでした？

「もうー、何なのよ、一体！一乃ー！！」

『ボクのせいじゃないもん！季衣お姉ちゃんが急に動くから』

「えっ？ボクのせい？ボクのせいなの？」

そうですね、季衣さん。

瞬間移動というのは停止している状態でするのが基本なのですよ。

急に動いたりしたら、そりゃ的確度下がりますよ。

> p f <

とんだハプニングはおいといて、

季衣さんは華琳さんに張角について説明しました。

「それは本当なの？」

「はい、間違いありません」

「もし、黄巾党の張角と芸能人という張角が同一人物だとしたら、本拠地が解らないことも説明できるわね。あっちこっちを回り旅芸人なのだから」

「……………」『でも、あのお姉ちゃんたち、ただ歌っていただけだよ。なのに盗賊の首魁だなんて、何かも間違いだよ』

「さあ、どうでしょうかね。実際どうなのかはまだ解らないけれど、とにかくその張角という者が、人を惹く能力に優れていることはよく解ったわ」

「……」

他の子たちにも話したほうがよさそうね。本当に同一人物かどうかの確認も必要だし、二人は今日はもう遅いから帰ってもいいわよ。

「あ、はい」

「……」

季衣さんが先に部屋を出て行ってから、一乃ちゃんは暫く華琳さんのことを見詰めていました。

「何？まだ言いたいことがある？」

「……」 『殺すの？』

「…張角を？」

「（じくじく）」

「まだ解らないわ。殺すか、それとも、あなたや季衣みたいに私の元に置くか。その者の成り次第よ」

「……」

「殺さないでって言いたいのかしら？」

「……」

「一刀ちゃん？」

「……」（ふるふる）

「??？」

あれ？以外ですね。僕もそんなことだろうと思いましたが。

「……」

スッ

そして、一刀ちゃんは振り向いていなくなりました。

> p f <

「一刀ちゃんが戻ってきたのはまたまた城壁の上です。」

ふういひいひい

風を浴びる一刀ちゃんの顔は、複雑な顔になっていました。

「……」

「一刀ちゃん？」

【実はね、華琳お姉ちゃんたちが戦うことなんて、見たくない。だから、戦うのはやめてって、いつも言いたくなる】

…そうですね。当たり前のことです。

大切な人がいつも戦場に立つことが、好きであるはずがありませんから。

【だけど、ボクが言ってもきつとそうはならないから……私が華琳お姉ちゃんたちに会うずっと前から、華琳お姉ちゃんたちは戦っていたから】

直接言っただけ断れるのが怖いんですか？

「……………」【それもあつ】

断れると知つていても、一度言つてみたらどうですか？少しは一刀ちゃんの意見を聞いてくれるかも知れませつよ。

【……………さつちゃん、ボクのお母さんが再婚した時のこと知つてる？】

突然なんですか。

…いえ、解りませつよ。

【あの時ね、病院にお母さんが来てたの。他の人と会つてるつて…】

あ

【あの時、もしボクが行かないでって言ったら、お母さんそのおじさんと行かなかったかもしれない。でも言わなかった】

…どうしてですか？

【…それを言ってるお母さんの表情の裏で、幸せを感じたから】

……

【今日も華琳お姉ちゃんも、なんとなくそんな感じだった】

……

風が…寒いですね。

## 六黙

有能な才を持つ者を好む華琳さんです。

そして、自分の前に立ち向かえるほどの才を持つ相手なら尚更、華琳さんの心に火を付けます。

そついうのは華琳さんの悪い癖でもあって、

きつと一刀ちゃんが見たという華琳さんの「顔の裏の幸せ」というのはきつとそれでしょう。

華琳さんは黄巾党の党首の正体がわかったことに、少しは黄巾党への興味を深くしたようです。

その中、一刀の悩みも同じく深くなりつつあるのですが、それに気付くのは今より遙かに後に話になるでしょうね。

一方、黄巾党の活動はどんどん計画的なものになってゆき、

ある日、いくつかの黄巾党の群れが一つの場所に集結しているということが判別されました。

> 〆 十 十 <

「桂花、今動かせる兵はどのぐらい？」

「それが、補給の届きは明日の朝ぐらいになるでしょうです。それに、」

「先の戦いのあと、一度兵たちに休憩を与えてしまったので……」

「ついさっき、討伐から戻ってきた春蘭さんが言いました。」

「間が悪かったわね…今すぐに動かせる兵は？」

「約三百ぐらいです。それも精鋭部隊ではありません」

「早くしないと奴らがどうするかわからないわ。まずは先発部隊を編成するよ。大将は……」

「華琳さま、ボクが出ます！」

「……」

「季衣、お前は……」

「そうね、今回は季衣に任せましょう。副将には秋蘭を付けるわ」

「え？秋蘭さまが、副将ですか？」

「ええ、但し、撤退の判断は秋蘭に任せるから、季衣は必ず従うよ。うに。いいわね？」

「はい！」

「御意」

「春蘭は今から輸送部隊から補給物資を持ってきなさい。明日まで待ってられないわ。明日日が昇る前に後続部隊を再編成して出立するわ。指揮は私自ら取る」

「はっ！！」

> p f <

「一刀ちゃん、季衣さんと秋蘭さんが出立しました。」

「……………」

「行かないんですか？」

【行かない。約束したから】

「あ、そういえばもうこっさり付いていかないって約束しましたね。」

「（じくっ）」

「んー、でもあっさりですね。本当に行かなくて大丈夫なんですか？」

「正直、僕としては今回ばかりは行ってもらいたいところなんですけどね……………」

【正直ボクが行かなくてもどうにかなるわけでもないし、ボクが心配になってみていただけだから…バレちゃったものだしもう行かないことにするよ】

ん、まあ。そうなんですけどね。

……

……ところで一刀ちゃん。

「??？」

あなたは一体、何をしていらっしゃるのですか？

【知らなくていい】

いや、知らなくていいじゃなくてですね。

普段取り出さないノートと鉛筆まで取り出してなにしてるんですか？

ってかこの外史以来初めてなんですけど？

「……」

カキカキ…

時々、一刀ちゃんと居ると自分の存在が無我になってしまう気がします。

一方ここは華琳さんの部屋なのですが、

「……………うーむ」

華琳さんが休むの久しぶりに見ますね。

…というか、この人何してるんですか？

「……………（イライラッ）」

何か、これ前にも見た気が……………

「ああー、もう!」

怒らないでください!？枕をこっちに投げないでください!？

寝られないのは僕のせいじゃないでしょうか!というか当たりませ  
んが

最近一刀ちゃん、皆の疲れを考えて敢えて一緒に寝に行かないみた  
いですけどね。

一刀ちゃんはすごい勘違いをしています。

あなたと一緒に寝ることで疲れとか溜まりません。

寧ろ一緒に寝てたのに寝ないとあんなように一刀分（？）足りなく  
なつて凶暴化するんですウチヤン」

え？何ですか？今僕どうやってぴちゅったんですか！？

え？え？

「何であの子最近来ないのよ。今日は秋蘭も季衣もないのに、」  
華琳さんの部屋じゃないと他のところに行っているという仮定がま  
ず間違っているんですがね。

あれ？そういえば、華琳さんがこれだということとは、他の人たちも  
…いや、まあ、いいです。考えないことにします。

コンコン

「誰？」

しーん

「一刀なの？」

コン

答えがなかったら一刀ちゃんですよね。

というか、人の部屋にノックして入ってくる一刀ちゃんなんて初めて診ましたけど。

「…入ってきなさい」

がらり

「……」

入ってきた一刀ちゃんの手には、先部屋で持っていたノートが握られています。

「ど、どうしたの？」

「……」

そしたら一刀ちゃんは華琳さんがいるベットに近づいて、手に持っていたノートのあるページを開いて見せました。

「え？何これ……」

開いた両ページには各々服のデザインが描かれていました。

え、一刀ちゃん。先これ描いてたのですか？

文字も凄く達筆ですし、一刀ちゃん昔なにしてたんですか？

二つの服のデザインの中で、左のは凄く綺麗なナイトドレス、もう一つの右のは、軍服スタイルの服です。

そして、その上には、『どっちが良い？』

「一刀、あなたこんなこともできたの？すごいわね」

ああ、先ずはそこですね。

『それはどうでもいいから好きなを選ぶ』

そう書いている一刀ちゃんの顔に、少しは嬉しい表情があったことは軽くスルー！。

「ふむ……」

そしたら、華琳さんは長考に入ります。

考えの行き先は大体思いつきますけどね。

あれ、きつと選んだ方作ってあげるんですよね。

だったら、華琳さんとしてはナイトドレスを選ぶわけではないっしょ。あんな恥ずかしいし。

一部の変態な読者の皆さんは、軍服の方がもつと恥ずかしいだろうというかも知れませんが、そんな考え方の自分を恥らってください。

あ、それと知ってますか。囲碁にこういう金言があるんですよ。

「こっちの、右の服の方がいいんじゃないかしら」

ええ、『長考の末に悪手を打つ』って。

『その裏の方を見てみて』

「裏？」

そういわれてページの裏を見る華琳さんの目に入る文字は…

『明日一刀ちゃんを連れて行く』

> p f <

「急げ、もっと急げー！！」

「春蘭、そんなに兵たちを急がせたら、秋蘭たちと合流する頃には兵たちが力尽きて戦えなくなるわよ」

「ですが、華琳さまー」

「はあ…あまり兵たちに腹いせしないで頂戴」

「うう……」

「……？」

キョトンとしているのは、華琳さんと同じ馬に乗って後ろで華琳さんの腰に抱きついていてる一刀ちゃんです。

いや、何天然な顔していらっしやいますか、一刀ちゃん。

昨日、一緒に行かせなかったら、あのドレスを着た華琳さんの絵を描いて桂花さんに渡してしまうと言ったのはどこの小悪魔ですか？

桂花さんがそれをもらって一体なにをするだろうか想像した華琳さんの肌に電気が走ったのように鳥肌が立つ時は僕が笑い死ぬかと思いましたよ。

「華琳さま！何故あいつが華琳さまと一緒に行くのですか？戦場は子供の遊び場ではありません」

「……………」

「ど、どうしたんですか、華琳さま？」

「桂花」

「はい」

「後で覚えておきなさい」

「はい？」

訳もわからず恨みを得た桂花さん。まさに外道。

「……………」

「はあ…一刀。何度も言うけど、私から離れたらダメよ。絶対に」

「（こくっ）」

・

・

・

「曹操さま！曹操さまはいらっしゃいますか！」

「どづした！」

その時、兵士一人がこちらに走ってきました。

「貴様は確か、秋蘭の部隊に居た…」

「はいっ！夏侯淵さまの命令で、状況を報告するため参りました！夏侯淵將軍と許緒將軍の部隊が黄巾党の本隊と接続！暫し交戦しましたが、数の差が明らかすぎましたので、近くにいた村に後退して防御をしている最中です！」

「！！！」

「華琳さま！」

「ええ、全軍速度上げ。囲まれている秋蘭たちを助けに行くわよ！」

「はっ！全軍駆け足！全力尽きるまで走れ！」

「馬鹿！それじゃダメでしょう！」

「うるさい！秋蘭と季衣がどうなってもいいのか？」

「それは解ってるから少し落ち着きを……」

春蘭さんと桂花さんがそういうやりとりをしてるどころ、

「一刀、もっとしっかり掴まなさい。これから早く移動するから」

「……」

「ダメよ」

動かせる手がなくて話ができない一刀ちゃんでしたが、華琳さんは一刀ちゃんが言いたいことがわかるかのように釘をつけました。

「今あなたが秋蘭たちがいるところに行っても何も変わらないわ。邪魔になるだけよ」

「……」

「大丈夫よ。秋蘭も季衣もきつと無事よ。あの子たちを信じなさい」

「……（こくっ）」

納得したように、一刀ちゃんは華琳さんの腰にもっとぎゅって抱きつきました。

「一刀ちゃん、僕が先に行つて様子を見てきましょう。」

「……………」

はい、それじゃあ、

> p f <

「夏侯淵さま！西側の第三防御線が破られました！」

「ふーむ、防柵は後二つか。どのぐらい保ちそうだ、李典」

「マズイな……………後二つか。そうだな……………結構応急に作ったもんやし、後一刻持つどうかつてところやな」

「微妙なところだな。姉者たちが早く来てくれれば良いのだが……………」

これは……………ひどい、としか話す言葉が見つかりませんね。

村の町は完全にぼろぼろになってしまつて、火災とかもあつたように建物のそこそこには煙も見えています。

秋蘭さんたちの部隊と、楽進たちが率いている義勇兵が共に防御線を建てていますが、本当真桜さんの言う通りこれからどれだけ持つものか……………」

「しかし、夏侯淵さまがいなければ、我々がここまで耐えることはできませんでした。ありがとうございます」

「それは我々も同じ事。貴公ら義勇兵がいなければ、連中の数に押しやられて敗走しているところだ」

「いえ、私たちこそ、夏侯淵さまたちがいなければ、既にあの場で全滅していたでしょう。ここまで防御できたのも夏侯淵さまの指揮があつてこそです」

「お互い助けてもらっているのだ。もう少し耐えよう。直ぐに姉者たちが援軍を連れてこっちに来る」

「はい」

「凧ちゃん！東側の防柵が破られました！東側の防柵の残りは後一つしかないの！」

「あかん！東のありゃー、材料が足りひんかったから結構もろいでー。破れるのも時間の問題や」

「仕方ない。残りの兵は全て東側に回す。楽進」

「解りました。真桜、沙和、こっちは頼んだぞ」

「ああ、無理せんぞな」

「気をつけるの」

「ああ……」

「秋蘭さま、ボクたちも行きましょう」

「ああ、皆、ここが正念場だ！力を尽くし、何としても生き残るぞ  
！」

「わかったの！」

「おお、死んでたまるかいな！」

ガーンガーンガーン！！

「何だ？」

「報告です！街の外から大きな砂煙！大部隊の行軍です！」

「敵の援軍なん？」

「えー？またくるのー！？」

「敵か？それとも……」

「それが……」

ひょーっ

「……（にっ）」

「！北郷！」

「一刀ちゃん!？」

「へ？」

「一刀ちゃんやんか」

「一刀ちゃん？」

ああ、そうですか。

もう来ましたか、早かったですね、流石に。

「……」

黙々としながら一刀ちゃんが開いた竹筒の中にはこう書いてありました。

『援軍到来』

> 〆 〆 <

「北郷を先に行かせて大丈夫なんですか？」

「あら、桂花が一刀の心配をするの？」

「なっ！そ、そういうわけではありません！」

「まあー。大丈夫よ。中はなかなか苦戦しているっようだから、一刀が早く行って先に援軍が来たことを伝えたら兵たちの士気もあがるわ」

「はあー」

「…ええ、そうよ。きっと大丈夫よ。中には秋蘭と季衣もいるし…」

（ブル）

「…華琳さま？」

華琳さん？

「彼女たちなら何事もないでしょうよ。でも状況が状況だから少し目を離してしまうかも知れないじゃない。もしかして知らない人にも連れて行かれたら、いや、いざとなってもあの子は知らない人が触れようとするのと逃げられるわよね。そうよ、あの子なら大丈夫だわ。あの子なら何万の敵の中にも傷一つないまま戻って来られるじゃない。あの子ならきっと平気よ。それでなければ私があの盗賊のグズどもをただで殺すわけがないでしょ？あの子に傷一つでも与えた奴は殺さず城の拷問室に連れて行って寧ろ自分の口から殺してくださいと嗚咽しながら叫ばせてその上に半分以上死んだら手足を切って塩付けて漬けにして街の人たちに広げて…」（ブルブル）」

華琳さん？華琳さーん？漏れてる、言葉が漏れてますよ！周囲の兵士たちが何かわからない覇気に包まれて嘔吐症状を見せていますよ！

「銅鑼を鳴らせー！！中の秋蘭と季衣たちに！私たちが来たことを伝えるのだー！！」

春蘭の命によって大きく銅鑼が鳴り、曹と夏侯の旗が揚がり、

「敵の数が把握しました。役三千、我々本隊の敵ではありません」

「いいわ。総員、突撃！苦戦している仲間たちを救うのだ！」

曹操軍の大反撃が始まりました。

> p f <

「一刀ちゃんがどうしてこんなところにいるねん？」

「一刀ちゃん、久しぶりなのー！」

「！！」

急に抱きつこうとする沙和さんですが、

スッ

「…あ」

「あ

「あ、あれ？」

「……………」

いつもみたいに急な動きには苦手な一刀ちゃんです。

「……………ふえーん、真桜ちゃん、一刀ちゃんが沙和のこと見て逃げたのー」

「沙和、そんなことをしてる場合か」

「せやで、沙和。一刀ちゃんが困ってるじゃねえか」

「……………（あわあわ）」

【これって意識して動くんじゃないの。無意識なのー】

あれ？そうだったんですか？

道理でそんなに反応時間が早いものだと……………

「それより北郷、お前一人で来て大丈夫なのか？」

「……………」 『大丈夫なんじゃない？秋蘭お姉ちゃんが守ってくれるんだし』

華琳さん、怖かったんですけどね。

「……ふふっ、頼りにしてくれてるのは嬉しいんだがな」

でもほら、無意識だとあまり危険な目に会いそうではなくないですか、一刀ちゃんって？

「一刀ちゃん」

って于禁さんまだ開き直っていませんか。

一刀ちゃん、あの人なんとかしてください。

「……」

振り向いた一刀ちゃんはしくしくとしている（多分嘘泣きの）沙和さんに近づきました。

「……」

ぐいぐい

「…うん？」

泣いてた（うそ泣き）沙和さんがスカートを引っ張る一刀ちゃんを見下ろしました。

おゆー

「……>>おゆー<<」

今の一刀ちゃんにこう……ぼの汗が飛ぶ効果のアレが欲しいです。

「…はあ？、一刀ちゃん？」

「ああ、一刀ちゃん、それウチもやってー」

「くらー！」

まったく戦争には向いてない二人さんです。

「あ、ボクもして！」

……おまえもか

「季衣…まだ戦争は終わってないぞ」

「！…！【あ、そうだった】」

「ああん、もつとー」

「沙和もいい加減にしろ」

「とかいって、凧も一刀ちゃんにぎゅってされてみたいやろ」

「なっ！何を馬鹿なことを……はっ」

「……（しゅん）」【そっか、うん、そうだね、この前一度会っただけなのに抱きつくとかおかしいよね。無礼だよ。そーだねー】

「いや、あの、別にいやとかじゃなくて、今は戦いの途中だし、そんなことする暇はないというか」

「あーあ、凧が一刀ちゃん落ち込ませたで」

「せっかく援軍が来たって教えに来てくれたのにひどいのー」

「うっうっ……」

ああ、落ち込んだ楽進さんはかわいいですねー

「皆遊ぶのはそれぐらいにしておけ。北郷、私の後ろにいる」

「（じくっ）」

「楽進と季衣は前に出て東側に火力を集中してくれ」

「はい」「解りました」

さあ、これで一安心できますね。

「（じくっ）」【あ、さっちゃん】

はい

【僕行ってから華琳お姉ちゃん、どうだった？】

ええ、まあ。それは表では平然としようとはしていましたが、不安な感情だだ漏れでしたよ。

【そっか……】「…（てへ）」

あ、照れちゃって……

まあ、なんだかんだでこの戦争も終わりそうです。



没にした理由・後が怖かったです（華琳さん、怖いです）

## 七黙

「かずとー！」

「>>ぎゅー<<!？」

「大丈夫だった？怪我はないの？」

「大丈夫、大丈夫だから放して、華琳お姉ちゃん、苦しい」

「えっ？…一刀、あなた…」

「うん？…あれ？ボク、喋れる。華琳お姉ちゃんボク喋れるよ」

「よかったね。一刀」

「あのね、華琳お姉ちゃん。ボク喋れるようになったら、一番最初に華琳お姉ちゃんに言ってあげたいことがあったの」

「何？」

「だーいすき」

> オチ <

「……………ZZZ…（えへへ）」

「こんな修羅場の中でよく寝てるわね」

「華琳さま！だからどうしてあんな奴を膝の上に乗せて…」

「姉者、少し静かにしろ。北郷を起こしてしまうだろ」

「しゅーらん」

……え？いや、覗いてませんよ？人の夢を覗くとか、そんなことい  
くらさつちゃんでもしませんよ？

……しませんよ？

とにかく、この街にいた黄巾党の連中は全部蹴散らしたところで、  
一刀ちゃんはなんだかんだで色々緊張が溜まっていたのかそのまま  
寝てしまいました。

今は色々あった後華琳さんの膝の上で寝ている最中です。

「羨ましいのー」

「あんなうれしそうな顔で寝ちゃってなー。ああ、一刀ちゃんや  
つたらかわいいよなー」

「……………」

そして、仲間になった（一刀ちゃんは寝てますのでまだ知りませんが、別にどっちでもいいでしょう）大梁義勇軍の三人さんです。

ちなみに凧さんは遠くから一刀ちゃんの寝顔をみながら物欲しそうな顔をなさっています。自分もしたいのですね。膝枕。

「…そう、凧といったわね」

「あ、はっ！」

華琳さんが呼んだら、凧さんはパツときがついて答えました。

「…前に陳留で会った時も結構一刀と仲がよかったみたいだけど、この子もあなたたちのことはそれほど警戒していなかったよね」

「あ、はい。この前陳留で出会って、色々助けてもらいました」

「そう…」

華琳さんは暫く考えこむように真剣な顔になりました。

「な、凧。どないしたん？」

真桜が他の人たちに聞こえないように凧の耳にささやきました。

「解らん。もしかすると、我々のことを一刀様が親しく思っていることがお気に召さないのかもしれない」

「え？どうしてー？」

沙和も対話に混ぜられていますね。

「まー、こつちはただの義勇軍の兵たちやからな。州牧の息子さんが私たちみたいな奴らと一緒にいるのがあまり好ましくないと思っただのかもしれないな」

「そんなー」

「あまり悲観的に思うこともよくないが、とりあえずは一刀様のことについてはあまり深く関わらないほうが良いかもしれない」

そんな自分たちの話をしている三人ですが…まだ華琳さんが一刀ちゃんのお母さんだと思っていますね、あの人たち。

「…一刀」

考え続けていた華琳さんがふと一刀ちゃんを揺らしました。

「……???(パチッ)」

きよろきよろ…

「…あ……ああ」

「目が覚めたかしら」

「……はあ……」【夢か】

「一刀ちゃん、一応忘れているようですが…いつとききますけど、二二二って戦場なんですよ。」

「……」

僕の言葉にパツて気が付いたように一刀ちゃんは華琳さんの膝の上から頭を起こしました。

『どつなつたの？』

「もう終わったわ。今は村に補給品を配っているところよ」

「……」

「疲れたの？」

「（フルフル）」『もう大丈夫』

「そう、無理せずに疲れたら休みなさい」

「（こくっ）」

その後一刀ちゃんの目に入ったのは、

「……あ」

三人集まってひそひそ何かを話している凧さんたちでした。

「あの子たちもこれから私たちと一緒に行動するようになったわ」

『あのお姉ちゃんたちも？』

「ええ、ここで義勇軍を集めて、黄巾党に対抗していたそうよ」

「……………」『凄いね』

「まあ、それなりの武があるのは間違いないよね。それはそうと  
一刀」

「??？」

「しばらくあの子たちと行動を一緒になさい」

「……………」『どういうこと?』

「あの子たちは入ってきてあまり経ってないけど、状況をちゃんと説明している暇がないのよ。これから暫くはあの子たちの面倒を見てあげなさい」

え、一刀ちゃんが面倒を見る方なのですか?おかしいでしょ、それ。

「……………」(こくっ)

返事だけはあっさりですね。一刀ちゃん。

「いいわ。凧、沙和、真桜」

「……………」あ、はい!」

あそこで話をしていた際に華琳さんが呼ぶのを聞いて返事する三人。

「しばらくあなたたちのことは一刀に任せます。何かわからないことがあったら一刀に聞きなさい」

「…(ぺんっ)」

「一刀ちゃんは三人にむかってぺこっと挨拶しました。」

「…よろしいのですか?」

「何かかしら?」

「我々が一刀様と一緒にいることが気に召さないのでは……」

「何故私が一刀の友たちのことまで手を出さなければならぬのよ。そんなの一刀がいいなら私は全然かまわないわよ」

「はあ……」

「だから、凧さんが心配していることには根本的なところから間違いがあります。」

「よろしゅう頼むで」

「一刀ちゃん、よろしくなの」

「…(にっ)」

「あーん?かわいいのー」

「>>>お母ー<<<……(あわあわ)」

「沙和さん、自重してくださいw」

「一刀ちゃんがわからないような難しい軍議とかは飛ばします。僕も良く解りませんから。」

えっと、要は黄巾党の補給拠点を探索し、早急に落とす、とのこと  
です。

そういうわけで、将の皆さんが偵察に回ってる最中ですが、

「一刀ちゃん、沙和と一緒にいこう」

「ウチと一緒にいくやろ？」

「（あわあわ）」

この人たち、一刀と一緒に偵察任務に行こうと争っています。

その中ですごく困っている一刀ちゃんの顔がたまりません（じゅる  
っ）

「二人とも、そろそろ出発しないと他の方たちの足を引っ張ってしま  
うぞ」

「沙和は連れていくのー」

「沙和は先一刀ちゃんのこと驚かせたやろ。だから今度はうちに譲  
りや」

「そんなの理不尽なの。寧ろこの機会で、一刀ちゃんとの仲を縮む

のー」

【ボクの見解は…？（あわあわ）】

「刀ちゃんの見解なんてどうせ華琳さんと一緒に残っていたいに決まってるからそういうのは却下されるでしょ。」

【あうう……】

ひょい

「??？」【うん？】

あれ？

「……え？」

凧さん、悩んでるー刀ちゃんをさりげなく抱き上げて

テテテテテー

凧さん、凧なーん、どこいきますか？

「ちょ、ちょっと、凧！」

「ああ、凧ちゃんが刀ちゃんのこと乗っ取っちゃったのー」

「っ……」

ああ、凧さん、逃げた！

凧さん、すげー。

何も気にしてない顔して二人が争っている間に一刀ちゃんを持って逃げた！

【だからボクの見解は??】

> p f <

結局二人を追い払って一刀ちゃんと一緒に偵察に行った凧さんですが…

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

これはどれが誰の枠なのか僕にもわかりませんね。

凧さん、何でもいいから喋ってください。

一刀ちゃんと仲良くしようと持ってきたんじゃないんですか？

「か、一刀様」

「??？」

「その…一刀様はどうしてここに来られたのですか？危険だというのに」

「……」

まあ、皆心配することは一緒ですね。

確かに子供が歩き回って安全なところではありませんからね。

『皆のこと心配になるから』

「心配ですか？」

『ボクが行っても何も助けにならないし、寧ろ邪魔なことは知っているけど、それでも見ていないと心配になる。だから来たの』

「……」

『ダメだよな。ボクが居ると皆に迷惑になるから。でも……』

「……一刀様？」

そこまで言った一刀ちゃんはちょっと苦笑しました。

> ｴｯ ｴｯ <

「あの子が私たちに付いて来ようとするのはただの心配じゃないよ」

「どじいっ、ことですか？」

こちらは本陣に残っていらっしやる華琳さんと桂花さんです。

「桂花はあの子と最近良く寝ていたら解るでしょうね」

「……」

「あの子と寝ると変な夢見たことあるでしょ？」

「はい…あの子は走ってくる何かとぶつかって倒れる…でもどうして」

「理由は私解らないけれど、それはあの子が昔実際に経験したことよ。昔あの子がご両親から見捨てられるまでのことが夢に見えるの」

「！」

「だからあの子はどんな形ででもまた自分の面倒を見てくれる私たちを失いたくないと思っているの。だからいつも自分が知らないところで何があったらどうしようと心配になって付いて来たわけだわ」

「ですが、いくらなんでもあんな子供を戦場に近づけるのは」

「だからってあの子が大人しく城で待ってるわけではないわ。連れていかなかったら一人で、私たちにばれないように来るだけよ。私たちと一緒にいるのとあの子一人で戦場にいるの、どっちの方が安全だと思つかしら？」

「……」

子供の頃に両親に見捨てられてました。

会いに行く術がある一刀ちゃんでしたけど、一度も会いに行つたことがありません。

もう、「あの人たち」の人生に迷惑かけたくありませんでしたから。それから何年も過ぎて会つた、心から頼つてもいい人たちでした。なのにその人たちは、いつ死んでもおかしくないほど戦場を駆ける。

これが心配ができないわけがないですね。

『凧お姉ちゃんは強いの?』

「強いというほどではありません。ただ、この身一つ、親友を守られるほどの武は持っているつもりです」

「……………」『羨ましいね』

【ボクも皆を守られたら……】

一刀ちゃん……

『ところで風お姉ちゃんどうしてボクに敬語なの？ボク風お姉ちゃんにそんなこと言われるほど偉い人じゃないよ』

「いえ、しかし、華琳さまの「ご息」になるお方に、私たちのような平民が親しく呼ぶわけには……」

……

「…うえ？」

あ……

【さっちゃん、このお姉ちゃん何言ってるの？】

はい、どうやらこの前会った時、華琳さんが一刀ちゃんにお母さんみたいな台詞を投げたのがあの三人に誤解を招いたようです。

【……華琳お姉ちゃんがお母さん】

……

……

「（かああ）」

「一刀様？」

まあ、変なムードになっているのも僕としては一向構いませんけどね、あそこに見えるのって黄巾党の連中じゃありませんか？

「！！」

「一刀様？……！あれは……」

> p f <

「場所はここから半日ぐらいの距離にある筈です。黄巾党の連中が  
一時的に拠点として使っているようで、今すぐに攻撃しないとまた  
他の場所に移動してしまうかと思えます」

「でかしたわね。風、一刀も」

「ありがとうございます」

「……（クー）」

「どじったの？」

ふと自分のことをいつもよりもじっと見ている一刀ちゃんに華琳さ  
んは言いました。

「（はっ）（ふるふる）」

「そう。疲れたでしょうけど今はちょっと我慢なさい。今すぐ出  
立するわー！」

「」「」「はっ」「」「」

・

・

・

そういうわけで、また華琳さんと一緒の馬の上に乗っている一刀ちゃんですが、

「一刀、もっとしっかりつかまえていないと落ちるわよ」

「……（こくっ）」

いや、本当に一刀ちゃん。

そんなに曖昧に掴まえてると馬から落ちますよ。

しっかり華琳さんの腰に捕まえていないと。

ヒヒイイー

「!？」

「一刀！」

ほら、だから言ったのに…。

「大丈夫か、北郷」

隣の秋蘭さんが捕まえてくれなかったら大変なことになってましたからね。

「はぁ……驚いたじゃない」

「……（しゅん）」

「疲れているのか？」

「（フルフル）」

華琳さんは厳しい顔をして一刀ちゃんを睨みつきました。

「今はあなたの気まぐれにかまってあげてる暇がないわ。馬から落ちそうなら縄で縛ってあげてもいいんだけど」

「……（じーっ）」

「……」

「……（ぷいっ）」

暫く華琳さんを見ていた一刀ちゃんはそっぽを向いて他のところへ歩いていっちゃいました。

「…華琳さま」

「ほっておきなさい。それよりも今は早く皆に着くことが先よ」

「はぁ……」

>ロキ<

華琳さんたら、もうちょっと気にしてくれてもいいでしょ？」

【さっちゃん】

はい？

【ちょっと黙ってて】

あうう……一刀ちゃんが固いです。

「……」

凧さんたちが言ったことがそれほどショックだったでしょうか。

まあ、でも華琳さんは確かにお母さんみたいに一刀ちゃんのこと気にしてくれますし、

【違い】

え？

【……ボクのお母さんはお母さんしかない。他の人は……】

「……」

あ、一刀ちゃん。

【ついてくるな】

スッ

あ、どこに……

一刀ちゃん……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7403w/>

---

黙々・恋姫十無双

2011年10月13日15時53分発行